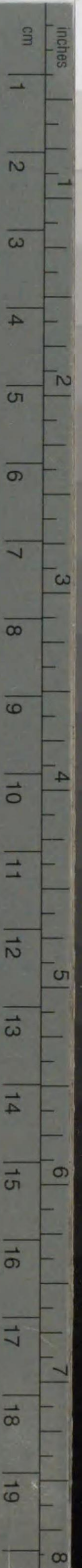


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



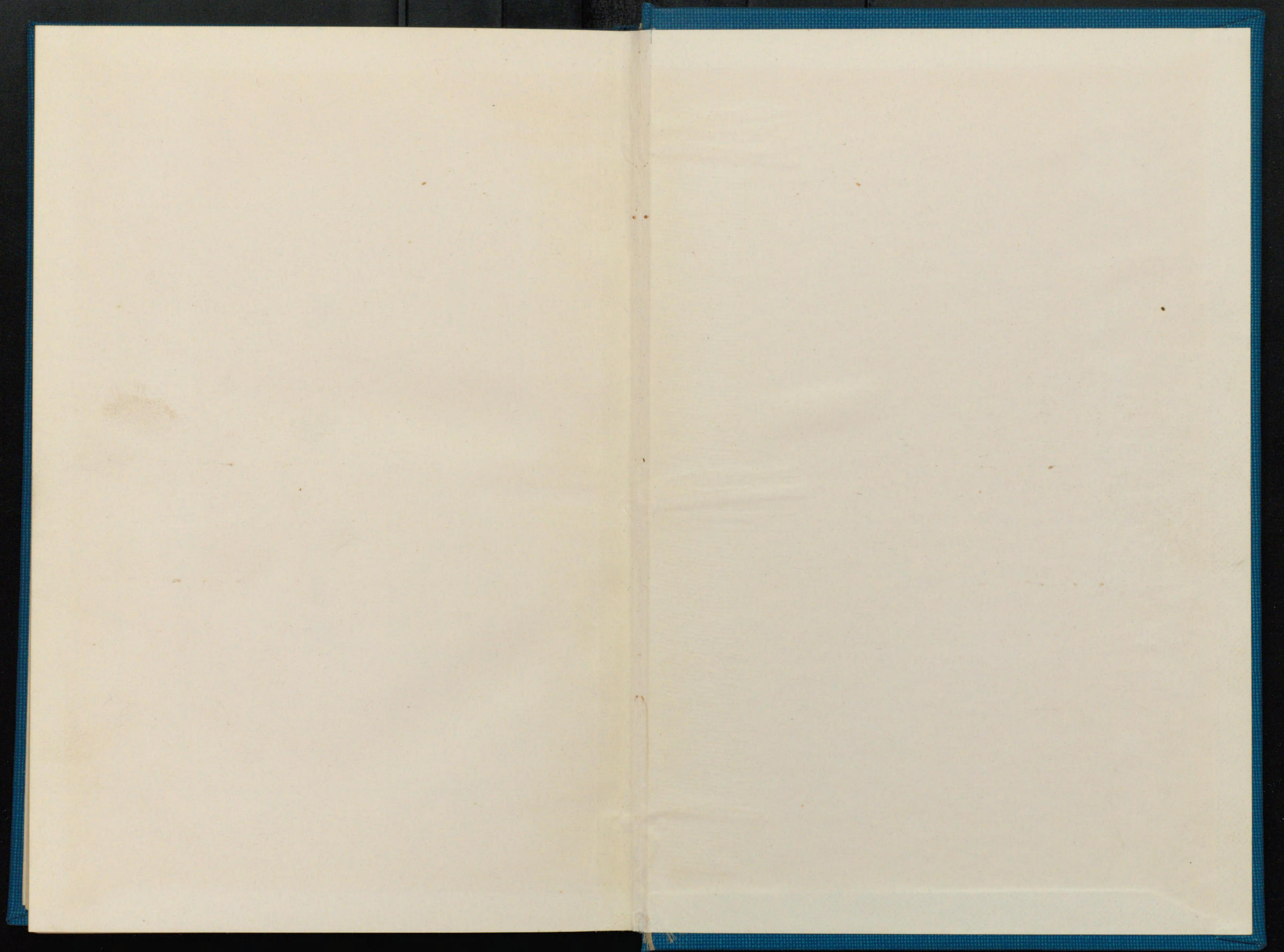
Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

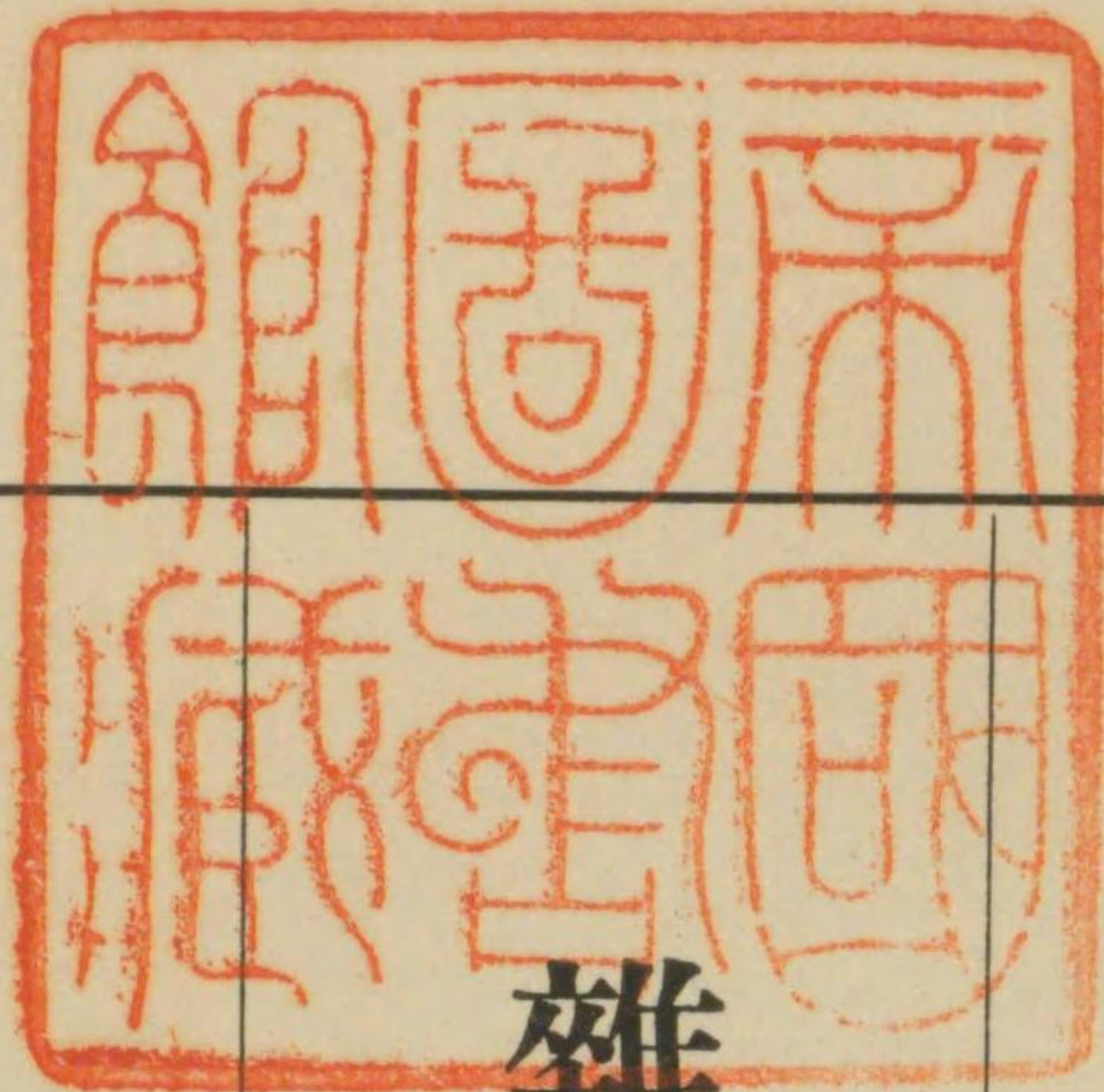


698
8

698-8
1200501581594



2-3058
5



雜

纂

其壹

伊藤博文公編

金栗子
野子
佐野子
平塚竹慎
金栗子
野子
佐野子
平塚竹慎

校訂

秘書類纂刊行會發行



698-8

類纂
雜
纂
壹

目次

大日本帝國憲法.....	二
憲修條.....	一三
皇室典範.....	一六
帝室制度調查局總裁奏議.....	三五
皇室典範增補.....	二六
皇室典範增補審查報告.....	四三
官制改正案要旨.....	四八
內廷宮內官官制草案.....	五三
宮內省官制草案.....	六二
東宮職官制草案.....	七〇
帝室會計審查局官制草案.....	七三

目次

一

帝室林野管理局官制草案……………七五

學習院官制草案……………七七

御歌所官制草案……………七九

帝室博物館官制草案……………八一

宮内官官等俸給令草案……………八三

御下問奉答案 (伊藤博文)……………八九

東京ノ宮廷ト歐洲諸國ノ宮廷トノ間ニ於テ遵守スベキ
萬國公禮ニ關スル謹告書 (フレデリック、マーシャル)……………九五

宮内大臣ヘ回答案……………一〇〇

皇族ノ離縁又ハ離婚ニ關スル意見……………一〇五

皇親繁榮ニ關スル件……………一〇七

皇族令ニ規定スベキ重要問題……………一一三

富美宮殿下ニ上ル書 (野村靖)……………一二七

帝國議會開院式ニ付キ勅語案……………一三〇

帝室經濟意見書 (楫取素彦)……………一三四

上奏ヲ經タル諸案處理手續案……………一二九

報告覺書……………一四四

御詔勅草案……………一五〇

調査著手ノ方針 (一)……………一五一

調査著手ノ方針 (二)……………一五七

調査著手ノ方針 (三)……………一六七

總提 (渡邊千秋)……………一七三

上申案……………一八七

調査著手ノ方針 (四)……………一九〇

帝室制度調査局豫算及職員進退ニ關スル伊東巳代治ノ意見書……………一九四

現世統治者中最大ナル皇帝……………一九六

憲法及皇室典範ニ關スル伺文……………二〇〇

法典調査ニ關スル達案……………二〇二

帝室御資産ニ屬スル日本郵船株式會社株券原價拂下
ノ出願ニ關スル宮内大臣ノ垂問ニ對シ遞信大臣ノ答辯……………二〇七



秘書類纂

雜

纂

壹

目次

四

琉官上京始末……………二六

玄龍丸琉球航之儀ニ付御請……………二四

琉球藩處分方之儀伺……………二五

琉球官員へ説諭往答ノ始末……………二七

李鴻章訪問私記（竹添進一郎）……………三〇

グラント將軍御會見記……………三一

使節委任ノ全權ニ關スル諮問草案（伊藤博文）……………三〇

岩倉大使ワシントン條約談判筆記（ブルークス）……………三九

政體ニ關スル意見書（大久保利通）……………三五

再 審

憲

議 長

(墨) 一月廿七日
於高輪修正

大日本帝國憲法

第一章 天 皇

□ハ原案ニシテ、
()ハ一月二十七日高輪ニ於テ修正加筆セルモノナリ
高輪ハ當時伊藤博文ノ私邸ナリキ

第一條 大日本帝國ハ萬世一系ノ天皇之ヲ統治ス。

第二條 皇位ハ皇室典範ノ定ムル所ニ依リ皇(男)子孫之ヲ繼承ス。

第三條 天皇ハ神聖ニシテ侵スベカラズ。

第四條 天皇ハ國ノ元首ニシテ統治權ヲ總攬シ此ノ憲法ノ條規ニ依リ之ヲ施行ス(フ)。

第五條 天皇ハ帝國議會ノ(翼)(協)賛ヲ以テ立法權ヲ施行ス(フ)。

第六條 天皇ハ法律ヲ裁可シ其ノ公布及執行ヲ命ズ。

第七條 天皇ハ帝國議會ヲ召集シ其ノ開會閉會停會及衆議院ノ解散ヲ命ズ。

第八條 天皇ハ國家ノ(公共)安全ヲ保持シ(危難)又ハ(國民)ノ(其ノ)災厄ヲ避クル爲メ(緊急)ノ必要ニ由リ、帝國議會閉會ノ場合ニ於テ法律ニ代ルベキ勅令ヲ發ス。

此ノ勅令ハ次ノ會期ニ於テ帝國議會ニ提出スベシ。若議會ニ於テ(之ヲ)承諾セザルトキハ(政府)將來ニ向テ(法律)ノ(其)ノ効力ヲ失フ(ベシ)(コトヲ公布スベシ)。

第九條 天皇ハ法律ヲ執行スル爲ニ又ハ(國家)(公共)ノ安寧(秩序)ヲ(繼)(保)持シ、及臣民ノ幸福ヲ増進スル爲ニ必要ナル命令ヲ發シ、又ハ發セシム。但シ命令ヲ以テ法律ヲ變更スルコトヲ得ズ。

第十條 天皇ハ行政各部ノ官制及文武官ノ俸給ヲ定メ、及文武官ヲ任免ス。但シ此ノ憲法又ハ他ノ法律ニ特例ヲ掲ゲタルモノハ各々其ノ條項ニ依ル。

第十一條 天皇ハ陸海軍ヲ統帥ス。

第十二條 天皇ハ陸海軍ノ編制(及常備兵額)ヲ定ム。

第十三條 天皇ハ戰ヲ宣シ和ヲ講ジ及諸般ノ條約ヲ締結ス。

第十四條 天皇ハ戒嚴ヲ宣告ス。

戒嚴ノ要件及効力ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム。

第十五條 天皇ハ爵位勳章及其ノ他ノ榮典ヲ授與ス。

第十六條 天皇ハ大赦特赦減刑及復權ヲ命ズ。

第十七條 攝政ヲ置クハ皇室典範ノ定ムル所ニ依ル。

攝政ハ天皇ノ名ニ於テ大權ヲ施行ス。

第二章 臣民ノ權利義務

第十八條 日本臣民タルノ要件ハ法律ノ定ムル所ニ依ル。

第十九條 日本臣民ハ法律命令ノ定ムル所ノ資格ニ應ジ、均ク文武官ニ任ゼラレ、及其ノ他ノ

公務ニ就クコトヲ得。

第二十條 日本臣民ハ法律ノ定ムル所ニ從ヒ兵役ノ義務ヲ有ス。

第二十一條 日本臣民ハ法律ノ定ムル所ニ從ヒ納税ノ義務ヲ有ス。

第二十二條 日本臣民ハ法律ノ範圍内ニ於テ居住及移轉ノ自由ヲ有ス。

第二十三條 日本臣民ハ法律ニ依ルニ非ズシテ逮捕監禁審問處罰ヲ受クルコトナシ。

第二十四條 日本臣民ハ法律ニ定メタル裁判官ノ裁判ヲ受クルノ權ヲ奪バル、コトナシ。

第二十五條 日本臣民ハ法律ニ定メタル場合ヲ除ク外其ノ函(許)諾ナクシテ住所ニ侵入セテ
レ及搜索セララル、コトナシ。

第二十六條 日本臣民ハ法律ニ定メタル場合ヲ除ク外信書ノ秘密ヲ侵サル、コトナシ。

第二十七條 日本臣民ハ其ノ所有權ヲ侵サル、コトナシ。

公益ノ爲必要ナル處分ハ法律ノ定ムル所ニ依ル。

第二十八條 日本臣民ハ安寧秩序ヲ妨グズ及臣民タルノ義務ニ背カザル限ニ於テ信教ノ自由ヲ
有ス。

第二十九條 日本臣民ハ法律ノ範圍内ニ於テ言行著作印行集會及結社ノ自由ヲ有ス。

第三十條 日本臣民ハ相當ノ敬禮ヲ守リ別ニ定ムル所ノ規程ニ從ヒ請願ヲ爲スコトヲ得。

第三十一條 本章ニ掲ゲタル條規ハ戰時又ハ(國家ノ)事變ノ場合ニ於テ天皇大權ノ施行ヲ妨
グルコトナシ。

第三十二條 本章ニ掲ゲタル條規ハ陸海軍ノ法令又ハ紀律ニ牴觸セザルモノニ限り軍人ニ準行
ス。

第三章 帝國議會

第三十三條 帝國議會ハ貴族院衆議院ノ兩院ヲ以テ成立ス。

第三十四條 貴族院ハ貴族院令ノ定ムル所ニ依リ皇族華族及勅任セラレタル議員ヲ以テ組織ス

第三十五條 衆議院ハ選舉法ノ定ムル所ニ依リ公選セラレタル議員ヲ以テ組織ス。

第三十六條 何人モ同時ニ兩議院ノ議員タルコトヲ得ズ。

第三十七條 凡テ法律ハ帝國議會ノ〔承諾〕（協賛）ヲ經ルヲ要ス。

第三十八條 兩議院ハ政府ノ提出スル法律案ヲ議決シ及各々法律案ヲ提出スルコトヲ得。

第三十九條 兩議院ノ一ニ於テ否決シタル法律案ハ同會期中ニ於テ再ビ提出スルコトヲ得ズ。

第四十條 兩議院ハ法律又ハ其ノ他ノ事件ニ付各々其ノ意見ヲ（政府）ニ建議スルコトヲ得、

但シ其ノ採納ヲ得ザルモノハ同會期中ニ於テ再ビ建議スルコトヲ得ズ。

第四十一條 帝國議會ハ毎年之ヲ召集ス。

第四十二條 帝國議會ハ三個月ヲ以テ會期トス、必要アル場合ニ於テハ勅命ヲ以テ之ヲ延長ス

ルコトアルベシ。

第四十三條 臨時緊急ノ必要アル場合ニ於テ常會ノ外臨時會ヲ召集スベシ。

臨時會ノ會期ヲ定ムルハ勅命ニ依ル。

第四十四條 帝國議會ノ開會閉會會期ノ延長及停會ハ兩院同時ニ之ヲ行フベシ。

衆議院解散ヲ命ゼラレタルトキハ貴族院ハ同時ニ停會セラルベシ。

第四十五條 衆議院解散ヲ命ゼラレタルトキハ勅命ヲ以テ新ニ議員ヲ選舉セシメ、解散ノ日ヨ
リ五個月以内ニ之ヲ召集スベシ。

第四十六條 兩議院ハ各々其ノ總議員三分ノ一以上出席スルニアラザレバ議事ヲ開キ議決ヲ爲
スコトヲ得ズ。

第四十七條 兩議院ノ議事ハ過半數ヲ以テ決ス可否同數ナルトキハ議長ノ決スル所ニ依ル。

第四十八條 兩議院ノ會議ハ公開ス、但シ政府ノ要求又ハ其ノ院ノ決議ニ依リ秘密會ト爲スコ
トヲ得。

第四十九條 兩議院ハ各々（天皇ニ上奏スルコトヲ得）〔奏聞ノ權ヲ有ス〕

第四十九條 兩議院ハ臣民ヨリ呈出スル請願書ヲ受ク（ルコトヲ得）

第五十條 〔兩議院ハ必要トスル場合ニ於テ政府ニ對シ〕（議員ハ）文書ヲ以テ（政府ニ）質問ヲ爲スコト
ヲ得。

第五十一條 兩議院ハ此ノ憲法及議院法ニ掲グルモノノ外内部ノ整理ニ必要ナル諸規則ヲ定ム
ルコトヲ得。

第五十二條 兩議院ノ議員ハ議院ニ於テ發言シタル意見及表決ニ付院外ニ於テ責ヲ負フコトナ

シ。但シ議員自ラ其ノ言論ヲ演說刊行筆記又ハ其ノ他ノ方法ヲ以テ公布シタルトキハ一般ノ法律ニ依リ處分セラルベシ。

第五十三條 兩議院ノ議員ハ現行犯罪又ハ内亂外患ニ關スル罪ヲ除ク外、會期中其ノ院ノ承諾ナクシテ逮捕セラル、コトナシ。

第五十四條 國務大臣[次官]及政府委員ハ何時タリトモ各議院ニ出席シ及發言スルコトヲ得。

第四章 國務大臣及樞密顧問

第五十五條 國務各大臣ハ天皇ヲ輔弼シ其ノ責ニ任ズ。凡ソ法律勅令其ノ他國務ニ關スル詔勅ハ國務大臣ノ副署ヲ要ス。

第五十六條 樞密顧問ハ樞密院官制ノ定ムル所ニ依リ天皇ノ諮詢ニ應ヘ重要ノ國務ヲ審議ス。

第五章 司法

第五十七條 司法權ハ天皇ノ名ニ於テ法律ニ依リ之ヲ[施行]（フ）。

裁判所ノ構成ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム。

第五十八條 裁判官ハ法律ニ定メタル資格ヲ具フルモノヲ以テ之ニ任ズ。

裁判官ハ刑法ノ宣告又ハ懲戒ノ處分ニ由ルノ外其ノ職ヲ免ゼラル、コトナシ。

懲戒ノ條規ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム。

第五十九條 裁判ノ對審判決ハ之ヲ公開ス。但シ（公共ノ）安寧秩序又ハ風俗ヲ害スルノ虞アルトキハ法律ニ依リ又ハ裁判所ノ決議ヲ以テ對審ノ公開ヲ停ムルコトヲ得。

第六十條 特別裁判所ノ管轄ニ屬スベキモノハ別ニ法律ヲ以テ之ヲ定ム。

第六十一條 行政官廳ノ違法處分ニ由リ權利ヲ傷害セラレタリトスルノ訴訟ニシテ、別ニ法律ヲ以テ定メタル行政裁判所ノ裁判ニ屬スベキモノハ司法裁判所ニ於テ受理スルノ限ニ在ラズ

第六章 會計

第六十二條 新ニ租稅ヲ課シ及稅率ヲ變更スルハ法律ヲ以テ之ヲ定ムベシ。

但シ報償ニ屬スル行政上ノ手数料及其ノ他ノ收納金ハ前項ノ限ニ在ラズ。

修

國債ヲ起（シ及國庫ノ負擔トナルベキ契約ヲ爲ス）スハ帝國議會ノ[承諾]（協贊）ヲ經ベシ。

第六十三條 現行ノ租稅ハ更ニ法律ヲ以テ之ヲ改メザル限ハ舊ニ依リ之ヲ徵收ス。

第六十四條 國家ノ歲出歲入ハ毎年豫算ヲ以テ帝國議會ノ[承諾]（協贊）ヲ經ベシ。

豫算ノ款項ニ超過シ又ハ豫算ノ外ニ生ジタル支出アルトキハ後日帝國議會ノ承諾ヲ求ムルヲ

要ス。

第六十五條 豫算ハ前ニ衆議院ニ提出(スベ)シ其ノ議決ヲ經タル後貴族院ニ提出スベシ

貴族院ハ豫算ニ付全體ヲ議決スルニ止マリ修正スルコトヲ得ズ

第六十六條 皇室經費ハ現在ノ定額ニ依リ毎年國庫ヨリ之ヲ支出シ、將來増額ヲ要スル場合ヲ除ク外帝國議會ノ承諾(協賛)ヲ要セズ。

第六十七條 憲法上ノ大權ニ基ケル既定ノ歳出及法律ノ結果ニ由リ又ハ法律上政府ノ義務ニ屬スル歳出ハ帝國議會ニ於テ政府ノ承諾ヲ經ズ(同意ナク)シテ(帝國議會)之ヲ廢除シ又ハ削減スルコトヲ得ズ。

第六十八條 特別ノ須要ニ因リ政府ハ豫メ年限ヲ定メ繼續費トシテ帝國議會ノ承諾(協賛)ヲ求ムルコトヲ得。

第六十九條 避クベカラザル豫算ノ不足ヲ補フ爲ニ又ハ豫算ノ外ニ生ジタル必要ノ費用ニ充ル爲ニ豫備費ヲ設クベシ。

第七十條 國家ノ危難ヲ避クル(公共ノ安全ヲ保持スル爲、緊急ノ需要アル場合ニ於テ、内外ノ情形ニ因リ政府ハ帝國議會ヲ召集スルコト能ハザルトキハ、勅令ニ依リ財政上必要ノ處分ヲ爲スコトヲ得、前項ノ場合ニ於テハ次ノ會期ニ於テ帝國議會ニ提出シ其ノ承諾ヲ求ムルヲ要ス

第七十一條 帝國議會ニ於テ豫算ヲ議定セズ又ハ豫算成立ニ至ラザルトキハ、政府ハ前年度ノ豫算依リ之ヲ施行スベシ。

第七十二條 國家ノ歳出歳入ノ決算ハ會計検査院之ヲ検査確定シ、政府ハ其ノ検査報告ト俱ニ之ヲ帝國議會ニ提出スベシ。
會計検査院ノ組織及職權ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム。

第七章 補 則

第七十三條 將來此ノ憲法ノ條項ヲ改正スルノ必要アルトキハ、勅令ヲ以テ議案ヲ帝國議會ノ議ニ下附スベシ。

此ノ場合ニ於テ兩議院ハ各々其總員三分ノ二以上出席スルニアラザレバ議事ヲ開クコトヲ得ズ。出席議員三分ノ二以上ノ同意(多數)ヲ得ルニアラザレバ何等ノ改正モ之ヲ決議(決ヲ爲ス)スルコトヲ得ズ。

第七十四條 皇室典範ノ改正ハ帝國議會ノ議ヲ經ルヲ要セズ。

皇室典範ヲ以テ此ノ憲法ノ條規ヲ變更スルコトヲ得ズ。

第七十五條 憲法及皇室典範ハ攝政ヲ置クノ間之ヲ變更スルコトヲ得ズ。

第七十六條 法律規則命令又ハ何等ノ名稱ヲ用キタルニ拘ラズ、此ノ憲法ニ矛盾セザル現行ノ法令ハ總テ遵守ノ効力ヲ有ス。
 歲出上政府ノ義務ニ係ル現在ノ契約又ハ命令ハ總テ第六十七條ノ例ニ依ル。

修條

憲

議長

第二條 皇位ハ皇室典範ノ定ムル所ニ依リ皇(男)子孫之ヲ繼承ス。

第五條 天皇ハ帝國議會ノ(輔)翼(及協)贊ヲ以テ立法權ヲ行フ。

第八條 天皇ハ國家ノ危難(公共ノ安全ヲ保持シ)又ハ(其ノ)國民ノ一災厄ヲ避クル爲^ノ必(急施ヲ)要(スル緊急ノ必要)ニ由リ帝國議會開會ノ場合ニ於テ法律ニ代ルベキ勅令ヲ發ス。
 此ノ勅令ハ次ノ會期ニ於テ帝國議會ニ提出スベシ。若議會ニ於テ之ヲ承諾セザルトキハ(政府ハ)將來ニ向テ法律タル(其)ノ効力ヲ失フ(コトヲ公布ス)ベシ。

第十二條 天皇ハ陸海軍ノ編制(及常備兵額)ヲ定ム。

第三十一條 本章ニ掲ゲタル條規ハ戰時又ハ事變(内亂)ノ場合ニ於テ天皇大權ノ施行ヲ妨グ
ルコトナシ。

第三十七條 凡テ法律ハ帝國議會ノ承諾(協賛)ヲ經ルヲ要ス。

第四十九條 兩議院ハ各々奏聞ノ權ヲ有ス。

第四十九條 兩議院ハ臣民ヨリ早出スル請願書ヲ受ク(ルコトヲ得)

第五十條 兩議院(ニ於テ)ハ必要トスル場合ニ於テ政府ニ對シ文書ヲ以テ(政府ニ)質問ヲ爲スコ
トヲ得。

第六十二條 新ニ租稅ヲ課シ及稅率ヲ變更スルハ法律ヲ以テ之ヲ定ムベシ。
但シ報償ニ屬スル行政上ノ手数料及其ノ他ノ收納金ハ前項ノ限ニ在ラズ。

國債ヲ起シ(及將來ニ國庫ノ負擔トナルベキ契約ヲ爲)スハ帝國議會ノ承諾(協賛)ヲ經ベ
シ。

第六十四條 國家ノ歲出歲入ハ毎年豫算ヲ以テ帝國議會ノ承諾(協賛)ヲ經ベシ。

第六十八條 特別ノ須要ニ因リ政府ハ豫メ年限ヲ定メ繼續費トシテ帝國議會ノ承諾(協賛)ヲ
求ムルコトヲ得。

新

皇室典範

第一章 皇位繼承

第一條 大日本國皇位ハ祖宗ノ皇統ニシテ男系ノ男子之ヲ繼承ス。

第二條 皇位ハ皇長子ニ傳フ。

第三條 皇長子在ラザルトキハ皇長孫ニ傳フ、皇長子及其ノ子孫皆在ラザルトキハ皇次子及其ノ子孫ニ傳フ以下皆之ニ例ス。

第四條 皇子孫ノ皇位ヲ繼承スルハ嫡出ヲ先ニス、皇庶子孫ノ皇位ヲ繼承スルハ長系次系ノ皇嫡子孫皆在ラザルトキニ限ル。

第五條 皇子孫皆在ラザルトキハ皇兄弟及其ノ子孫ニ傳フ。

第六條 皇兄弟及其ノ子孫皆在ラザルトキハ皇伯叔父及其子孫ニ傳フ。

第七條 皇伯叔父及其ノ子孫皆在ラザルトキハ其ノ以上ニ於テ最近親ノ皇族ニ傳フ。

第八條 皇兄弟以上ハ同等内ニ於テ嫡ヲ先ニシ庶ヲ後ニシ長ヲ先ニシ幼ヲ後ニス。

第九條 皇嗣精神若ハ身體ノ不治ノ重患アリ又ハ重大ノ事故アルトキハ、皇族會議及樞密顧問ニ諮詢シ前數條ニ依リ繼承ノ順序ヲ換フルコトヲ得。

第二章 踐祚即位

第十條 天皇崩ズルトキハ皇嗣即チ踐祚シ祖宗ノ神器ヲ承ク。

第十一條 即位ノ禮ハ京都ニ於テ之ヲ行フ。

第十二條 即位ノ後大嘗祭ヲ行フコト祖宗ノ例ニ依ル。

第十三條 踐祚ノ後元號ヲ建テ一世ノ間ニ再ビ改メザルコト明治元年ノ定制ニ從フ。

第三章 成年立后立太子

第十四條 天皇及皇太子皇太孫ハ滿十八年ヲ以テ成年トス。

第十五條 前條ノ外ノ皇族ハ滿二十年ヲ以テ成年トス。

第十六條 儲嗣タル皇子ヲ皇太子ト稱フ(ス)皇太子在ラザルトキハ儲嗣タル皇孫ヲ皇太孫ト稱フ(ス)

第十七條 皇后又ハ皇太子皇太孫ヲ立ツルトキハ詔書ヲ以テ之ヲ公布ス。

第四章 敬 稱

第十八條 天皇太皇太后皇后ノ敬稱ハ陛下トス。

第十九條 皇太子皇太子妃皇太孫皇太孫妃親王妃内親王ノ敬稱ハ高殿下トス 第二十條 王妃女
王ノ敬稱ハ殿下トス。

第五章 攝 政

第二十二條 天皇未ダ成年ニ達セザルカ又ハ精神若ハ身體ノ不治ノ重患ニ由リ大政ヲ親ラスル
コト能ハザル間ハ攝政一員ヲ置ク。

第二十三條 攝政ハ成年ニ達シタル皇太子又ハ皇太孫之ニ任ズ。

第二十四條 皇太子皇太孫在ラザルカ又ハ未ダ成年ニ達セザルトキハ左ノ順序ニ依リ攝
政ニ任ズ。

第一 皇族男子 親王及王

第二 皇后

第三 皇太后

第四 太皇太后

第五 皇族女子 内親王及女王

第二十四條 皇族男子ノ攝政ニ任ズルハ皇位繼承ノ順序ニ從フ其ノ女子ニ於ケルモ亦之ニ準
ズ。

第二十五條 皇族女子ノ攝政ニ任ズルハ其ノ配偶アラザル者ニ限ル。

第二十六條 最近親ノ皇族未ダ成年ニ達セザルカ又ハ其ノ他ノ事故ニ由リ他ノ皇族攝政ニ任
ジタルトキハ、後來最近親ノ皇族成年ニ達シ又ハ其ノ事故既ニ除クト雖皇太子及皇太孫ニ對
スルノ外其ノ任ヲ讓ルコトナシ。

第二十七條 攝政又ハ攝政タルベキ者精神若ハ身體ノ重患アリ又ハ重大ノ事故アルトキハ
皇族會議及樞密顧問ノ議ヲ經テ其ノ順序ヲ換フルコトヲ得。

第六章 太 傅

第二十八條 天皇幼年ノ時ハ太傅ヲ置キ保育ヲ掌ラシム。

第二十九條 先帝遺命ヲ以テ太傅ヲ任命セザリシトキハ、攝政ヨリ皇族會議及樞密顧問ニ諮
詢シ之ヲ撰任ス。

第三十三二十九條 太傅ハ攝政及其ノ子孫之ニ任ズルコトヲ得ズ。
 第三十三條 攝政ハ皇族會議及樞密顧問ニ諮詢シタル後ニ非ザレバ太傅ヲ退職セシムルコトヲ得ズ。

第七章 皇族

第三十三一一條 皇族ト稱スルハ太皇太后皇太后皇后皇太子皇太子妃皇太孫皇太孫妃親王親王妃
 内親王王王妃女王ヲ謂フ。
 第三十三二條 皇子ヨリ皇玄孫ニ至ルマデハ男ヲ親王女ヲ内親王トシ五世以下ハ男ヲ王女ヲ女王トス。
 第三十四三條 天皇支系ヨリ入テ大統ヲ受クルトキハ、皇兄弟姉妹ノ王女王タル者ニ特ニ親王内親王ノ號ヲ宣賜ス。
 第三十五四條 皇族ノ誕生命名婚嫁薨去ハ宮内大臣ヨリ之ヲ公告ス。
 第三十六五條 皇統譜及前條ニ關スル記録ハ圖書寮ニ於テ尙藏ス。
 第三十七六條 皇族ハ天皇之ヲ監督ス。
 第三十八七條 攝政在任ノ時ハ前條ノ事ヲ攝行ス。

第三十九八條 皇族男女幼年ニシテ父ナキ者ハ宮内ノ官僚ニ命ジ保育ヲ掌ラシム。事宜ニ依リ天皇ハ其ノ父母ノ選舉セル後見人ヲ認可シ又ハ之ヲ勅選スベシ。
 第四十三九條 皇族ノ後見人ハ成年以上ノ皇族ニ限ル。
 第四十一條 皇族ノ婚嫁ハ同族又ハ勅旨ニ由リ特ニ認許セラレタル華族ニ限ル。
 第四十二一條 皇族ノ婚嫁ハ勅許ニ由ル。
 第四十三二條 皇族ノ婚嫁ヲ許可スルトキハ勅書ニ親署（ヲ付）シ宮内大臣之ニ副署ス。
 第四十三三條 皇族ハ養子ヲナスコトヲ得ズ。
 第四十三四條 皇族國疆ノ外ニ旅行セントスルトキハ勅許ヲ請フベシ。
 第四十三五條 皇族女子ノ臣籍ニ嫁シタル者ハ皇族ノ列ニ在ラズ、但シ特旨ニ依リ仍内親王女王ノ稱ヲ有セシムルコトアルベシ。

第八章 世傳御有料

第四十七六條 御料ノ土地物件ニシテ（ノ）世傳御有（料）ト定メタル者ハ分割讓與スルコトヲ得ズ。

第四十八七條 世傳御有料ニ編入スル土地物件ハ樞密顧問ノ議ヲ經（ニ諮詢シ）勅書ヲ以テ之ヲ

定メ宮内大臣ヨリ之ヲ公告ス。

第九章 皇室經費

第四十九條 皇室諸般ノ經費ハ特ニ常額ヲ定メ國庫ヨリ支出セシム。

第五十條 皇室經費ノ豫算決算検査及其ノ他ノ規則ハ皇室會計法ノ定ムル所ニ依ル。

第十章 皇族訴訟及懲戒

第五十一條 皇族相互ノ民事訴訟ハ勅旨ニ依リ宮内省ニ於テ裁判員ヲ命ジ裁判セシメ勅裁ヲ經テ之ヲ執行ス。

第五十二條 皇族ト人民トノ間ニ起ル(人民ヨリ皇族ニ對スル)民事(ノ)訴訟(ハ)初審及終審ハ(東京)控訴院ニ於テ之ヲ裁判ス、但シ皇族ハ代人ヲ以テ訴訟ニ當ラシメ訴訟ニ出ルヲ要セズ。

第五十三條 皇族ハ勅許ヲ得ルニ非ザレバ拘引シ又ハ裁判所ニ(召)喚スルコトヲ得ズ。
第五十四條 皇族其ノ品位ヲ辱ムルノ所行アリ又ハ皇室ニ對シ忠順ヲ缺クトキハ、勅旨ヲ以テ之ヲ懲戒シ、其ノ重キ者ハ皇族特權ノ一部又ハ全部ヲ停止シ若ハ剝奪スベシ。

第五十五條 皇族蕩産ノ所行アルトキハ勅旨ヲ以テ治産ノ禁ヲ宣告シ其ノ營財者ヲ任ズベシ
第五十六條 前二條ハ皇族會議ニ諮詢シタル後之ヲ勅裁ス。

第十一章 皇族會議

第五十七條 皇族會議ハ成年以上ノ皇族男子ヲ以テ組織シ、内大臣(樞密院議長)宮内大臣司法大臣(樞密院議長)大審院長ヲ以テ參列セシム。

第五十八條 天皇ハ皇族會議ニ親臨シ又ハ皇族中ノ一員ニ命ジテ議長タラシム。

第十二章 補 則

第五十九條 現在ノ皇族五世以下親王ノ號ヲ宣賜シタル者ハ舊ニ依ル。

第六十條 皇位繼承ノ順序ハ總テ(等親ノ)實系ニ依ル、現在皇養子皇猶子又ハ他ノ繼承タリシ故ヲ以テ之ヲ混ズルコトナシ。

第六十一條 親王内親王王女王ノ品位ハ之ヲ廢ス。

第六十二條 親王ノ家格(及)又ハ世襲親王ノ諸達其ノ他此ノ典範ニ牴觸スル(例規)者ハ總テ之ヲ廢ス。

第六十三條 皇族ノ財産歳費及諸規則ハ別ニ之ヲ定ム^{ベシ}。

第六十四條 將來此ノ典範ノ條項ヲ^{變更}(改正)シ又ハ増補スベキノ必要アルニ當テハ、皇族會議及樞密院顧問ニ諮詢シテ之ヲ^決(勅)定スベシ。

(參 照)

帝室制度調査局總裁奏議

臣博文帝室制度調査ノ

大命ヲ恪ミ伏シテ惟ルニ、皇室典範ハ

陛下立憲ヲ經始シタマヘル制作ノ一ニシテ、帝國憲法ト並ニ不刊ニ垂ル、而シテ國家ノ景運蒸蒸日上トシテ丕變シ、皇室ノ基礎益々鞏固ニシテ文經武緯國光洽ク寰宇ニ顯揚スルコト、今ハ迥ニ疇昔ノ比ニアラズ。加フルニ各種制度ノ秩然大ニ備ハレルアリ、必ヤ進デ時運ノ趨ク所ヲ察シ、諸ヲ事理ニ衷シテ以テ合ヲ經猷ニ求メザルベカラズ。是ニ於テ乎皇室ノ寶典モ亦聊カ其ノ未ダ備ハラザルモノヲ増補シテ以テ後昆ニ昭示スルノ必要ヲ生ズ。即チ皇族支胤ノ繁盛ト皇室費款ノ増益トニ視テ、其ノ疏通ヲ圖ルガ如キ、又皇族國法上ノ地位ヲ明ニシテ以テ其ノ權義ノ規準ヲ定ムルガ如キハ特ニ其ノ尤ナルモノニシテ、實ニ日新ノ時宜ニ鑒ミ乾健ノ宏綱ヲ進張スル所以ノ道ナルコトヲ信ズ。茲ニ別冊皇室典範増補條項ニ付キ慎

重審議ヲ畢ヘ、其ノ事由ヲ前條ノ下ニ注明セシメ謹テ上奏シ恭ク
聖裁ヲ仰グ。

明治三十七年十月十二日

帝室制度調査局總裁侯爵 臣 伊藤博文

皇室典範増補

皇室典範増補上議文案

天祐ヲ享有シタル我ガ日本帝國皇家ノ成典ハ祖宗ノ洪範ヲ紹述シテ敢テ違フコトアルナシ、而
シテ人文ノ發展ハ寰宇ノ進運ニ隨ヒ、制度ノ燦備ハ條章ノ増廣ヲ必トス、是ノ時ニ當リ朕ハ祖
宗ノ丕基ヲ永遠ニ鞏固ニスル所以ノ良圖ヲ惟ヒ、且憲章ニ由テ以テ皇族ノ分義ヲ昭ニセムコト
ヲ類シ、茲ニ皇族會議及樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ皇室典範増補ヲ裁定シ、朕ガ子孫及臣民ヲシテ
之ニ率由シテ愆ルコトナキヲ期セシム。

御名 御璽

年 月 日

國務各大臣、宮内大臣、副署

皇室典範増補

恭デ按ズルニ皇室典範ハ明治二十二年ニ於テ帝國憲法ト共ニ不磨ノ大典トシテ欽定セラレ
垂訓明鬯ニシテ貽謀深遠ナルハ素ヨリ揭焉トシテ日星ヲ瞻ルガ如シ。而シテ寰宇ノ進運日
ニ躋リ、帝國ノ光輝益々揚リ、從テ諸般ノ制度具備セルノ今日ニ於テハ、規型ヲ損益シ典
章ヲ變通スルノ必要ヲ生ゼザルコト能ハズ。寔ニ是レ時ニ隨テ宜ヲ制スルノ道ニシテ、上
ハ古先ニ紹ギ下ハ來葉ヲ開ク所以ニ外ナラザルナリ。茲ニ典範第六十二條ノ文ニ基ヅキ、
今ニ於テ其ノ増補ヲ圖ラザルベカラザルモノ約兩大端ヲ舉ゲ敬テ之ヲ下ニ臚陳ス。

皇室典範増補

皇室典範第三十一條ノ趣旨ヲ推スニ、皇族ハ子孫百世ヲ經ルモ仍其ノ身位ヲ享有ス、親親ノ恩誼焉ヨリ篤キハナシ、諸ヲ大寶ノ令ニ稽フルニ、正親司ノ掌ル所ハ四世以上皇族ノ名籍ニ止マリ、前後時ニ因革アルモ未ダ雲仍ノ遠支ニシテ永ク皇親ヲ列ニ在ル者アラズ。蓋其ノ制限洵ニ止ムヲ得ザルモノアルニ由ルナリ。今ヤ至仁ノ宏謨ハ已ニ曠古ノ特例ヲ開カレタリト雖、國運ノ進張ハ皇室ノ經用ヲ益シ、潢裔ノ繁盛ハ內帑ノ資給ヲ滋クス、歲月ノ悠久ニ隨ヒ勢無限ノ需ニ應ジ難ク、根幹ノ鞏固ヲ圖レバ或ハ均霑ノ典ヲ曠クセムコトヲ恐ル。因テ既往ニ鑒ミ將來ヲ推シテ以テ之ガ疏通ノ途ヲ開カザルベカラザルモノ是レ其ノ一ナリ。

諸般制度ノ大成ニ從ヒ、一般臣民ノ權義ハ一律ニ確定セラル、所アリ。而カモ帝國憲法ニ基ヅク普通法規ノ効力ハ之ヲ皇室典範ノ範圍ニ應ズル皇族ノ上ニ及ボスベキ限ニ在ラズ。則チ皇族ノ國法上ノ地位ハ將タ何ニ緣テ以テ之ヲ明徴ニセムトスル乎。皇室典範並ニ之ニ基ヅキテ發スル諸規則タルヤ論ナキノミ。然レドモ典範ノ制定實ニ普通法規完備ノ前ニ在ルガ故ニ、一般臣民ノ權義未ダ剖析セラレザルニ先チ此等ノ事項ヲ豫測シテ之ヲ定ムルニ由ナク、今ニシテ之ヲ觀レバ終ニ闕遺ニ類スルナキヤノ觀アリ、因テ其ノ原則ヲ增補シ以テ皇族ニ關スル各種制度ノ淵源ヲ示サルベカラザルモノ是レ其ノ二ナリ。

其ノ他特權ヲ剝奪セラレタル皇族ヲ臣籍ニ降シテ以テ皇室ノ尊嚴ヲ瀆スノ虞ヲ防ギ、又法律命令中適々之ヲ皇族ニ適用スベキモノトシタル規定ニ對シテ融洽ヲ圖リタルガ如キハ皆此ノ兩大端ノ增補ニ伴ヒ其ノ精備ヲ求ムル所以ニシテ、理甚觀易シ、乃係ケテ八條トシ序ヲ逐ヒテ其ノ下ニ分疏ス。

第一條 王ハ勅旨又ハ情願ニ依リ家名ヲ賜ヒ華族ニ列セシムルコトアルベシ。

恭デ按ズルニ大寶令ニ凡皇兄弟皇子、皆爲ニ親王、以外並爲ニ諸王、自ニ親王ニ五世、雖レ得ニ王名、不レ在ニ皇親之限トアリ、慶雲三年ノ詔ニ五世之王、在ニ皇親之限、其承レ嫡者相承爲レ王、自餘如レ令ト云ヘリ。延曆十年ニ至リ勅シテ令制ニ復ス弘仁五年ノ詔ニ曰、思_下除_ニ親王之號、賜_ニ朝臣之姓、編爲_ニ臣籍、後從事於公上、出身之初、一叙_ニ從六位、ト、天長九年ノ詔ニ曰、宜_下七世以下計_レ數、至_ニ于五世、課役蠲除_ト、貞觀十五年ノ詔ニ曰、早停_ニ王號、即賜_ニ朝臣、以節_ニ國家之經用、頗加_ニ公謙之篤情、ト抑々惠ヲ推シ德ヲ施シ以テ親親ノ恩ヲ顧念スルト、費ヲ節シ幹ヲ強クシ以テ皇室ノ尊嚴ヲ保持スルトハ共ニ列聖深意ノ存スル所ナリトス。今皇室典範ハ皇室ノ子孫累世皇族タルコトヲ失ハザラシムルノ主義ヲ取ル、此ノ增補ニ於テモ亦敢テ諸王ヲ以テ悉ク臣籍ニ列スベシトスルニ非ズ。累世皇族タル典範ノ

主義ヲ本則トシ、唯々勅旨又ハ情願ニ依リ家名ヲ賜ヒ華族ニ列セラル、コトアルベキヲ規定シ、之ガ變通ノ道ヲ開キ萬世ノ皇基ヲ鞏固ニセムトスルニ外ナラザルナリ。

皇族ニ姓ヲ賜ヒ臣籍ニ入ラシメラレタルハ先例甚多シ、聖武天皇ノ朝ニ從三位葛城王ノ請ヲ以テ之ニ橘宿禰ノ姓ヲ賜ヒ、桓武天皇ノ延暦六年ニ光仁天皇ノ皇子諸勝ニ廣根朝臣ト賜ヒ、皇子岡成ニ長岡朝臣ト賜ヒ、嵯峨天皇ノ朝ニ皇族男女三十人ニ源朝臣ト賜ヒシガ如キ最顯著ナルモノトス。今姓ニ代フルニ家名ヲ以テシタルハ今日復タ古ノ姓ヲ用キルコトナキニ由ル、又華族ニ列セラル、モノトシタルハ天潢ノ末流ハ降リテ臣籍ニ在リト雖、仍宜ク尊榮ノ地位ヲ有セシメラルベキヲ以テナリ。

第二條 王ハ勅許ニ依リ華族ノ家督相續人トナリ又ハ家督相續ノ目的ヲ以テ華族ノ養子トナルコトヲ得。

恭デ按ズルニ、王既ニ勅旨又ハ請願ニ依リテ家名ヲ賜ヒ華族ニ列セシメラル、コトアリ、則チ其ノ出デテ華族ノ家督相續人トナリ、又ハ家督相續ノ目的ヲ以テ華族ノ養子トナルコトヲ聽ザルハ事ニ於テ妨ナキノミナラズ、亦前條ノ趣旨ニ副フ所以ナリ。其ノ家督相續ヲナスノ目的以外ニ於テ、華族ノ養子トナルコトヲ聽サレザルモノトシタルハ、襲爵ニ依リ尊榮ノ地位ヲ有セシメラレムコトヲ期スレバナリ。

第三條 前二條ニ依リ臣籍ニ入りタル者ノ妻直系卑屬及其ノ妻ハ其ノ家ニ入ル。但シ他ノ皇族ニ嫁シタル女子及其ノ直系卑屬ハ此ノ限ニ在ラズ。

恭デ按ズルニ、王既ニ家名ヲ賜ヒ華族ニ列セラル、トキハ、倫序上自然其ノ妻及卑屬ハ仍留リテ皇族ノ列ニ在ルベキ理ナシ。而シテ卑屬タルモ已ニ他ノ皇族ニ嫁シタル女子ニ至テハ其ノ夫ノ身分ニ從ヒ其ノ子ハ父ノ身分ニ從フヲ當然トス因テ但書ヲ設ク。

第四條 特權ヲ剝奪セラレタル皇族ハ勅旨ニ由リ臣籍ニ降スコトアルベシ。

前項ニ依リ臣籍ニ降サレタル者ノ妻ハ其ノ家ニ入ル。

恭デ按ズルニ、王既ニ勅旨又ハ請願ニ依リ臣籍ニ入ラシメラル、コトアリ、則チ皇族ニシテ皇室典範第五十二條ニ依リ特權ヲ剝奪セラル、ガ如キコトアルトキハ、獨皇族ノ品位ヲ辱カシムルノミナラズ、事態ニ依リテハ皇室ノ尊嚴ヲ汚スコトナキヲ保セズ。此ノ場合ニ於テ之ヲ臣籍ニ降スノ道ヲ啓クハ至當ノ措置タルヲ認ム。續日本紀天平寶字五年ノ條ニ、茅原王罪アリ、帝淳仁宗室ノ故ヲ以テ法ニ致スニ忍ビズ、因テ王名ヲ除キテ姓ヲ龍田真人

ト賜ヒ、多嶽島ニ配流セラレ、此ノ餘宗室ニシテ除名賜姓ノ譴ヲ蒙ル者史冊ニ散見セリ、固ヨリ敢テ新例ヲ創ムルニ非ザルナリ。

第五條 第一條第二條第四條ノ場合ニ於テハ皇族會議又樞密顧問ノ諮詢ヲ經ベシ。

恭デ按ズルニ、皇族ニシテ降リテ臣籍ニ入ルハ事體極テ重シ、即チ皇族會議又樞密顧問ノ諮詢ヲ經ルハ微ヲ防ギ濫ヲ杜クニ在リ。

第六條 皇族ノ臣籍ニ入リタル者ハ皇族ニ復スルコトヲ得ズ。

恭デ按ズルニ、上下ノ名分一タビ定リテ復タ變易スベカラザルハ我が肇國以來ノ通義トス中世一二臣列ニ降リシ皇族ニシテ復タ親王トナリ或ハ竟ニ皇祚ヲ踐ミタマヒシ宇多天皇例ナキニ非ズト雖、以テ永世率由スベキ恒範ト爲スベカラズ。故ニ本條ハ分義ノ正キニ從ヒ、宗潢ノ貴ト雖降リテ臣籍ニ入リタル者ハ再皇族ニ降ヲ容サルノ制ヲ取レリ。

第七條 皇族ノ身位其ノ他ノ權義ニ關スル規程ハ此ノ典範ニ定メタルモノノ外別ニ之ヲ定ム。

皇族ト人民トニ涉ル事項ニシテ各々適用スベキ法規ヲ異ニスルトキハ前項ノ規程ニ依ル。
恭デ按ズルニ、皇族ノ國法上ノ地位ハ宜ク皇室典範及之ニ基ヅキ發スル準則ニ依リテ定マルベキモノナリ。然ルニ典範中第六十一條ヲ除ク外此ノ主意ヲ推知シ得ベキ條項ヲ缺キ而シテ第六十一條中ニ諸規則トアルモ之ニ重ヲ繋ケタルノ文義ニアラザルニ視テ、普通ノ法律命令ト對衡スベキ身位其ノ他公私ノ權利義務ニ關スル諸規則ヲ指示シタルモノニ非ザルコト自ラ明ナリ。是ヲ以テ從來此ノ點ニ關スル解釋區々ニ出テ法制亦歸一セザルノ實アリ故ニ本條ヲ置キ皇族ノ國法上ノ地位ヲ明ニシ以テ皇族ニ關スル各種制度ノ根本ヲ定ム。皇族ノ身位其ノ他公私ノ權利義務ハ時トシテ人民ト相涉リ互ニ其ノ據ルベキノ準則ヲ異ニスルコトアリ、此ノ場合ニ於テ干格ヲ來スノ虞ナカラシメムガ爲ニ特ニ第二項ヲ設ク。

第八條 法律命令中皇族ニ適用スベキモノトシタル規定ハ此ノ典範又ハ之ニ基ヅキ發スル規則ニ別段ノ條規ナキトキニ限り之ヲ適用ス。

恭デ按ズルニ、皇族ノ國法上ノ地位ハ皇室典範及之ニ基ヅキ發スル準則ニ依リテ定マルベキモノナルモ、法律命令ノ規定中現ニ皇族ニ適用スベキモノトシテ定メラレタルモノナキニ非ズ。之ヲ適用シテ敢テ不可ナキニ於テハ、此ノ典範ニ基ヅキ發スル諸規則ニ於テ一一之ト重複スルノ條規ヲ設クルノ必要ナシ。且將來ニ於テ普通法令ノ規定ヲ適用スルヲ以テ

便トスルモノニアラムコトヲ豫期シ茲ニ併セテ其ノ準則ヲ定ム。

(參照)

市制 (明治二十一年四月法律第一號)

第九十八條 前二條ノ外市税ヲ免除ス可キモノハ別段ノ法律勅令ニ定ムル所ニ從フ、皇族ニ係ル市税ノ賦課ハ追テ法律勅令ヲ以テ定ムル迄現今ノ例ニ依ル。

町村制 (明治二十一年四月法律第一號)

第九十八條 前二條ノ外町村税ヲ免除ス可キモノハ別段ノ法律勅令ニ定ムル所ニ從フ、皇族ニ係ル町村税ノ賦課ハ追テ法律勅令ヲ以テ定ムル迄現今ノ例ニ依ル。

府縣制 (明治三十二年三月法律第六十四號)

第一百條 府縣税ヲ賦課スルコトヲ得ザルモノニ關シテハ法律勅令ヲ以テ別段ノ規定ヲ設クルモノヲ除ク外市町村税ノ例ニ依ル。

北海道地方費法 (明治三十四年三月法律第三號)

第七條 勅令ヲ以テ別段ノ規定ヲ設クルモノノ外北海道地方税ノ賦課徴收ニ關スル事項ニ付テハ府縣税ニ關スル規定ヲ準用ス、但シ其ノ規定中府縣參事會ノ職務ハ北海道廳長官之ヲ行ヒ市町村又ハ市町村會トアルハ區町村又ハ區町村會及之ニ準ズベキモノニ該當ス。

北海道區制 (明治三十年五月勅令第一百五十八號)

第八十五條 皇族ニ係ル區税ノ賦課ハ追テ法律勅令ヲ以テ定ムルマデ現今ノ例ニ依ル。

北海道一級町村制 (明治三十年五月勅令第一百五十九號)

第八十五條 皇族ニ係ル町村税ノ賦課ハ追テ法律勅令ヲ以テ定ムルマデ現今ノ例ニ依ル。

北海道二級町村制 (明治三十五年二月勅令第三十七號)

第四十三條 皇族ニ係ル町村税ノ賦課ハ追テ法律勅令ヲ以テ定ムル迄現今ノ例ニ依ル。

沖繩縣區制 (明治二十九年三月勅令第十九號)

第七十一條 皇族ニ係ル區稅ノ賦課ハ追テ法律勅令ヲ以テ定ムルマデ現今ノ例ニ依ル。

地所名稱區別

明治七年十一月
第百二十號布告

明治六年^三月第百十四號布告地所名稱區別左ノ通改定候條此旨布告候事。

官有地

第一種「地券ヲ發セズ」地租ヲ課セズ地方稅ヲ賦セザルヲ法トス(十二年第三十四號布告ヲ以テ區入費ヲ地方稅ト改ム)

第二種「地券ヲ發シ」地租ヲ課セズ、地方稅ヲ賦セザルヲ法トス「尤府縣所有ノ地ハ地券ヲ

發セズ、唯帳簿ニ記入ス」(八年第百十四號布告ヲ以テ但書共改正十二年第三十四號布告ヲ以テ區入費ヲ賦スルトアルヲ地方稅ヲ賦セザルト改ム)

但此地ニ在ル官舎ヲ賃渡スル時ハ借地料ヲ賦スベシ。

一 皇族賜邸

一 官用地

「官」院省「使」寮「司」府「藩」縣本廳裁判所警視廳陸
海軍本支管其他政府ノ許可ヲ得タル所有ノ地ヲ云フ

徵 發 令 (十五年第四十三號布告)

第十四條 第十二條第二項中徵發ノ免除ヲ受ク可キモノ左ノ如シ。

一 皇族所用ノ車馬

第十五條 第十二條第四項中徵發ノ免除ヲ受クベキモノ左ノ如シ。

一 公務ニ屬スル廳舎

二 皇族ノ邸宅

關稅定率法 (明治三十年三月法律第十四號)

第五條 左ノ物品ハ輸入稅ヲ課セズ。

第一 御料品

狩 獵 法 (明治三十四年四月法律第三十三號)

第四條 左ニ掲グル場所ニ於テハ狩獵ヲ爲スコトヲ得ズ。

一 御獵場

土地收用法施行令 (明治三十三年三月勅令第九十九號)

第三條 起業者ガ内閣ノ認定ヲ受ケムトスル場合ニ於テ起業地内ニ左ニ掲ゲタル土地アルトキハ其ノ土地ニ關スル調書及圖面ヲ申請書ニ添付スベシ。

一 御陵墓地及御料地

耕地整理法 (明治三十二年三月法律第八十二號)

第五條 御料地、國有地又ハ官ノ用ニ供スル土地ハ主務官廳ノ認許アルニアラザレバ之ヲ整理地區ニ編入スルコトヲ得ズ。

鑛業條例 (明治二十三年法律八十七號)

第二十四條 宮城、離宮、神宮、皇陵、陸海軍所轄城堡、軍港、要港、火藥製造所、火藥庫及彈藥庫ノ周圍三百間以内ノ場所ハ試掘又ハ採掘若ハ鑛業上使用スルコトヲ得ズ。但軍港、要港ハ其鎮守府司令長官ノ許可ヲ得タル場合ニ於テハ此限ニアラズ。

裁判所構成法 (明治二十三年法律第六號)

第三十八條 皇族ニ對スル民事訴訟ニ付第一審及第二審ノ裁判權ハ東京控訴院ニ屬ス、但シ第一審ノ訴訟手續ニ付テハ地方裁判所ノ第一審手續ヲ適用ス。
第五十條 大審院ハ左ノ事項ニ付裁判權ヲ有ス。

第二 第一審ニシテ終審トシテ、

刑法第二編第一章及第二章ニ掲ゲタル重罪並ニ皇族ノ犯シタル罪ニシテ禁錮又ハ更ニ重キ刑ニ處スベキモノノ豫審及裁判。

民事訴訟法 (明治二十三年法律第二十九號)

第二百九十六條 皇族證人ナルトキハ受命判事又ハ受託判事其所在ニ就キ訊問ヲ爲ス。

刑事訴訟法 (明治二十三年法律第九十六號)

第二十八條 從犯ハ正犯ヲ管轄スル裁判所ヲ以テ其ノ管轄ナリトス。

數個ノ裁判處ノ管轄ニ屬スル從犯數名アルトキハ其中ニテ最初豫審又ハ公判ニ著手シタル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス。

裁判處構成法第五十條第二號ニ記載シタル皇族ノ犯罪ニ付テハ其正犯、從犯ハ身分ノ如何ヲ問ハズ大審院ニ於テ之ヲ管轄ス。

第三百十條 皇族證人ナルトキハ豫審判事其所在ニ就キ訊問ヲ爲ス可シ。

第三百十條 裁判所構成法第五十條第二號ニ記載シタル大審院ノ特別權限ニ屬スル犯罪ニ付テ

ハ檢事總長其搜查ヲ爲ス可シ。

地方裁判所、區裁判所ノ檢事及ビ司法警察官モ亦其犯罪ニ付キ搜查ヲ爲シ檢事總長ニ報告ス可シ。

第三百十一條 前條ニ記載シタル犯罪ノ現行犯アル場合ニ於テ急速ヲ要スルトキハ地方裁判所
區裁判所ノ檢事及司法警察官ハ第四百四十四條及第四百四十七條第一項ノ規定ニ從ヒ豫審處分ヲ
爲スコトヲ得、但豫審判事ニ通知スルコトヲ要セズ。

第三百十二條 前條ノ場合ニ於テハ地方裁判所檢事ヨリ證憑書類ニ意見書ヲ添へ速ニ之ヲ檢事
總長ニ送致ス可シ。

行政裁判法 (明治二十三年六月法律第四十八號)

第三十八條 行政裁判所ハ原告被告及第三者ニ出廷ヲ命ジ並ニ必要ト認ムル證憑ヲ懲シ證人及
鑑定人ヲ召喚シ審問ニ應ジ證明及鑑定ヲ爲サシムルコトヲ得、證人又ハ鑑定人トシテ審問ニ
應ジ證明及鑑定ヲ爲スベキ義務ニ關シテハ民事訴訟ノ規程ヲ適用ス。其ノ義務ヲ盡サル場
合ニ於テ處分スベキ科罰ハ行政裁判所自ラ之ヲ判決ス。

行政裁判所ハ口頭審問ニ於テ舉證ノ手續ヲ爲シ又ハ評定官ニ委任シ若クハ通常裁判所又ハ行
政廳ニ囑託シテ之ガ調査ヲ爲サシムルコトヲ得。

森林法 (明治三十年四月法律第四十六號)

第一章 總則

第一條 此ノ法律ニ於テ森林ト稱スルハ御料林、國有林、部分林、公有林、社寺林及私有林ヲ
謂フ。

皇室典範增補審査報告

今回御諮詢ノ皇室典範增輔ヲ審査スルニ、本案ハ皇室典範ノ條項中今後其ノ實行ニ困難ナルモノニ關シテ不備ヲ補足シ、併セテ皇族ノ身位及權義ヲ明ニスル爲ニ必要ナル條項ヲ增補セントスルモノナリ。其ノ增補ノ條項中ニハ自ラ民法其ノ他ノ法律施行ノ範圍ニ對シ、幾分ノ變更及制限ヲ加フルモノアルヲ免レズト雖、元來皇室典範中既ニ普通ノ法律ノ除外タル條項少カラズ。而シテ憲法第七十四條ニ牴觸セザル限り、既ニ皇室典範第六十二條ニ依リ修正增補ノ手續ヲ豫見シタルモノアルガ故ニ、他ノ法律ニ牴觸シ、其ノ結果自ラ臣民ノ權義ヲ變更若ハ制限スルニ至ルモ法理上支障ナキ所ナリトス。更ニ其ノ各條ニ就テ之ヲ觀ルニ、皇室典範第三十一條ハ皇子ヨリ皇玄孫ニ至ルマデハ男ヲ親王、女ヲ内親王トシ、五世以下ハ男ヲ女王ヲ女王トスト規定シ、以テ皇室ノ子孫ハ累世皇族タルノ主義ヲ取ル。然レドモ皇族支胤ノ繁盛ニ伴ヒ皇室經費ノ無限ノ膨脹ヲ來タスノミナラズ、皇族ノ範圍萬一廣大ニ失スルガ如キコトアルニ至ラバ或ハ反テ事態ノ不完備ヲ來タスノ虞ナキヲ保セザルヲ以テ、豫メ如此場合ニ備ヘムガ爲メ、茲ニ疏通ノ途ヲ開キ、第一條ニ於テ王ハ勅旨又ハ請願ニ依リ家名ヲ賜ヒ華族ニ列セシムルコトアルベキ

ヲ規定シ、尙ホ同一ノ趣旨ニ基キ第二條ニ於テ王勅許ニ依リ華族ノ家督相續人トナリ又ハ家督相續ノ目的ヲ以テ華族ノ養子トナルヲ得ルコトヲ規定セリ。王既ニ勅旨又ハ請願ニ依リ臣籍ニ入ラシメラル、コトアリトセバ、典範第五十二條ニ依リ特權ヲ剝奪セラレタル皇族ハ場合ニ依リ之ヲ臣籍ニ降スノ途ヲ開クハ皇室ノ尊嚴ヲ維持スルニ於テ至當ノ措置ナルヲ以テ之ヲ第四條ニ掲ゲタリ。凡ソ皇族ノ權利義務ハ理宜ヲ皇室典範及之ニ基キ發スル規程ニ依リ之ヲ定ムベキモノトス。典範實ニ此ノ明條ヲ缺ク、依テ第七條ニ於テ皇族ノ法律上ノ地位ヲ明ニシ、以テ皇族ニ關スル各種制度ノ淵源ヲ示シ、且ツ事皇族ト臣民トニ涉リ而モ各々適用スベキ法規ヲ異ニスル場合ニハ何レノ法規ニ依ルベキヤ之ヲ一定スルノ要アルヲ以テ、此ノ如キ場合ニ方リテハ典範ニ基キテ制定セラレタル規程ニ準據スベキコトヲ規定セリ。

要スルニ本案ハ累世皇族ノ原則ニ對シ疏通ノ途ヲ啓キ且ツ皇族ノ法律上ノ地位ヲ明ニシ、以テ皇族ニ關スル諸制度ノ淵源ヲ定メトスルニ在リ。其ノ趣旨何レモ至當ニシテ其ノ條項ニ至リテモ亦何等支障アルヲ見ザルノミナラズ、今ニ於テ典範ノ備ハラザルヲ補足セントスルハ寔ニ已ムヲ得ザル所ナリト認ム。

右審査ノ結果ヲ報告ス。

能ハズ。爲ニ從前ノ法令中間々其ノ効力ヲ皇室ニ及ボスモノトシタルモノアルニ至レリ。此ノ餘皇室ノ事務ニシテ國務大臣ノ職務ニ關連スルモノアリ、國務大臣ノ職務ニシテ皇室ノ事務ト相渉ルモノアリ、此等共ニ未ダ一定ノ規準トスベキモノアラズ。茲ニ帝室ノ制度ヲ調査スルニ當リ、先根本ノ解釋ヲ定メ、且其ノ公布ノ式様ヲ示スニ非ザレバ左右窒碍シテ其ノ進行ヲ圖ルコト能ハズ。顧フニ公布ノ式様ニ關シテハ曩者大體ノ趣旨ニ付豫メ認可ヲ經テ公式令ヲ起案シ以テ主權發令ノ規模ヲ明徴ニスル所アリ。又憲法上臣民ノ權利ニ屬スル請願ノ事ニ至リテモ皇室ノ事務ニ渉ルモノ多キヲ以テ、本局ニ於テ之ヲ查定シテ請願令トシ、並ニ既ニ認可ヲ了シ成案ヲ具セリ。而シテ今ヤ偶々皇室典範ニ於テ五世以下ノ皇族ノ臣籍ニ列スルコトヲ許スノ特例ヲ開カムトスルニ際シ、併セテ皇室ト普通法令トノ關係ヲ明ニスルノ條規ヲ增補シ、以テ其ノ大綱ヲ揭擧スルヲ便トス。此ノ大綱ニシテ明確ナルトキハ、皇室ノ諸令ハ順次其ノ緒ニ就キ復々根本問題ノ爲ニ動搖ヲ受クルノ患ナキヲ得ム乎。而シテ將ニ制定セラレムトスル諸令中其ノ普通法令ト對衡スベキモノニ付テハ、更ニ立案ノ要旨ヲ議定シ之ニ基キ各案ノ起草ニ着手セシメムトス。因テ別冊皇室典範增補案及皇室親族令皇室財産令皇室遺言令皇族身位令皇族後見令皇室訴訟令ノ立案要旨ヲ提供シ、併セテ普通法令ト皇室諸令トノ關係ヲ示セル目錄表ヲ附シ參考ニ資ス。

附 言

- (一) 皇族會議令ハ各般ノ皇室令ヲ制定セララルルニ當リテ皇室會議ニ諮詢セララルベキ必要アルニ因リ、卒先起案シテ其ノ召集及議事ニ關スル事項ヲ查定シ亦已ニ認可ヲ經テ成案ヲ具セリ。
- (二) 皇室婚嫁令及皇室誕生令ハ時須ノ急ニ應ジテ制定セラレ既ニ公布ヲ經タリト雖、別表ニ示セル如ク天皇及皇族ノ親族關係ニ關スル事項ヲ規定セララル、ニ於テハ婚嫁、誕生共ニ當然皇室親族令中ニ包有セシムベキモノト認ム。因テ之ヲ裁併シタリ。

官制改正案要旨

一 歐米諸國ト大使ヲ更換シ、益々相互ノ交際ヲ輯睦ナラシメラル、ノ時機ニ際シ、直接ニ

天皇皇后兩陛下ニ奉仕スル宮内官ニ長タル者ノ位置ハ、宜ク至高優殊ノ地ニ置キ、以テ帝室ノ尊嚴ヲ顯揚シ、彼我ノ對衡ヲ得セシムベシ。實際ノ事ニ當ル者ニ於テ殊ニ然リトス。從テ是等宮内官ニ長タル者ハ之ヲ親任トナスノ要アリ。既ニ之ヲ親任トナス、勢ヒ宮内大臣ノ指揮監督ノ下ニ屬セシムベキニ非ズ。是レ茲ニ侍從職皇后宮職式部職及主馬寮主獵局ヲ宮内大臣ノ管理ヨリ分離シ、主馬寮ヲ主馬職、主獵局ヲ主獵職ト改メ、内大臣府ト共ニ内廷ニ直隸セシメ、別ニ内廷宮内官官制ヲ制定スル所以ナリ。其ノ寮ヲ職ト改メタルハ、大寶ノ制職ハ寮ノ上ニ在リ、故ニ一方ニハ内廷官職ハ即チ宮内省各寮ノ上ニ在ルコトヲ示シ、他ノ一方ニハ内廷ノ各職中互ニ上下ナキヲ現ハシ、以テ統一ヲ保タムトスルニ在リ。

二 内廷宮内官官制ハ宮内省官制ト分離シ、別ニ之ヲ定ムト雖、内廷宮内官ノ進退身分ニ關スル事項ハ、宮内大臣旨ヲ奉ジ、又ハ所屬長官ノ申牒ニ基ヅキ、一切ノ手續ヲナスベキモノトシ、又内大臣府及内廷各職ノ會計調度ニ關スル事項ハ、宮内省ニ於テ之ヲ掌理セシムルコトトシタリ。蓋シ奏任以上ノ宮内官ノ進退身分ニ關スルコトハ、公式令ノ規定ニ關係ヲ有スルノミナラズ、此等ノ處措ヲシテ多岐ニ涉ラシムルハ、冗費ヲ節シ平衡ヲ保スル所以ニ非ズ。故ニ斷ジテ之ヲ一律ニ歸セシメタリ。

三 現行宮内省官制ハ省中ノ各部局恰モ獨立官衙タルノ組織ヲ有シ、宮内大臣統理ノ下ニ在ルノ本旨ヲ缺クノ嫌ヒアリ。因テ其ノ組織ヲ改メ、官制上ニ其ノ本旨ヲ明畫ナラシムムコトヲ期シ、大要左ノ三點ニ付キ釐革ヲ加ヘタリ。

(イ) 現行宮内省官制中、内事外事調査ノ三課ヲ廢シ、新ニ總務寮ヲ置キ、各寮中各課ノ廢置分合ハ宮内大臣ニ一任シタル事。

(ロ) 現行官制中奏任官判任官ヲ舉ゲテ共ニ各部局ノ官吏トナセルヲ改メテ之ヲ各部局ニ分屬スルモノトナシタル事例ハ内藏寮主事内藏屬爵位局主事爵位局屬トアルヲ、一律ニ宮内主事宮内屬トシテ其ノ部局ニ分屬セシムルコトトシタルガ如シ。但シ特ニ其ノ部局ニ於テ設置スル官職ハ此ノ限ニ在ラズ。

(ハ) 各部局ノ名稱ヲ總テ寮ト改メタル事、蓋シ現行ノ官制ハ各部局ノ名稱ヲ或ハ寮トシ或ハ職トシ或ハ局トス。要スルニ大寶以來存續スルモノアリ。又新設ニ係ルモノアルガ爲ニ此ノ區別ヲ生ゼルノミニシテ、別ニ旨趣ノ存スルアルニ非ザルモノノ如

シ。考フルニ大寶ノ制ハ職ハ寮ノ上ニ在リ、寮職本ト同順位ノ官司ニ非ズ。然ルニ現今ノ如キ同順位ノ官司ニ於テ却テ斯ノ如ク區々ノ名稱ヲ用キルハ頗ル不便ナルノミナラズ、恰モ相互ノ間上下ノ區別アルガ如キ觀アリ。故ニ今改メテ總テ寮ト稱シ之ヲ内廷各職ニ區別シタリ。從テ從來局長ト稱シタルモノヲ總テ頭トシ。助ト稱シタルモノヲ總テ主事トシタリ。

四 宮中顧問官文事秘書局ヲ廢シ、文事ニ關スル事務ハ之ヲ内大臣府ノ主管ニ屬セシム。蓋從來宮中顧問官ノ制ハ名實相叶ハズ、單ニ勳功者ヲ優遇スルノ途トセバ別ニ其ノ方法ヲ設クルコトヲ至當トス。又既ニ内大臣府アル以上ハ文事ニ關スル事務ハ其主管ニ屬セシムルコト寧ロ當然ノ措置ナルベキナリ。

五 宮内官官等俸給令ヲ制定ス。蓋シ現行宮内省官制中ニハ、宮内官ノ官等俸給等ヲ合セ規定スト雖モ、内廷宮内官ヲ宮内省官制中ヨリ分離スル以上、別ニ宮内官官等俸給令ヲ制定スルノ要アルヲ以テナリ。

六 現行宮内省各部局中調度局諸陵寮及内苑局ヲ廢ス。蓋シ調度ノ事務ハ會計ト密著ノ關係ヲ有スルヲ以テ、内藏寮ノ主管ニ屬セシメ、陵墓ノ事務ハ別ニ之ガ爲ニ一部局ヲ設クルノ要ナキヲ以テ、陵墓管守ノコトヲ總務寮ノ主管トシ、陵墓籍ノコトヲ圖書寮ノ主管ニ歸セシム、又庭苑ノコトニ至リテハ既ニ土木ト密著ノ關係ヲ有スルノミナラズ、又別ニ之ガ爲ニ一部局ヲ置クノ必要ヲ見ズ。因テ舉テ之ヲ内匠寮ノ主管ニ屬セシムルコトトシタリ。

七 華族女學校ヲ廢シ學習院ノ女子部トス。蓋シ學習院ノ組織既ニ改マリ、大學部及高等科ヲ廢シタル以上ハ、其ノ管理事務頗ル縮少シタルニ依リ、華族女學校ヲ其ノ女子部トシテ同一院長ノ主管ニ屬セシムルモ妨ゲナキナリ。

八 主馬寮主管ノ牧場ハ之ヲ廢ス。蓋シ牧場ノコトタル之ヲ創置シタル當時ニ在リテハ獎勵ノ主旨ニ出タルハ明ナルモ、今日ニ於テハ特ニ宮内省ニ斯ノ如キモノヲ設ケ獎勵スルノ必要ナキナリ。

九 御料局ヲ帝室林野管理局ト改メ、東宮職帝室會計審査局學習院博物館御歌所ト共ニ各々格別ノ官制トナシ、宮内大臣ノ管理ニ屬セシム。蓋シ是等各部局ハ自ラ特權ノ組織權限ヲ必要トスレバナリ。

十 女官ヲ官制中ニ加フ。蓋シ女官モ亦宮内官ナリ。從來ノ如ク之ヲ内定ノモノトスルハ今日ニ於テハ甚ダ理由ナケレバナリ。

十一 現行ノ官制中ニハ准判任待遇及等外ノ職員ヲモ之ヲ掲ゲタリト雖、甚ダ煩雜ニ失スルヲ以テ、其ノ職制ハ宮内大臣ニ於テ定ムベキモノトシ、官制中ヨリ之ヲ除キタリ。

内廷宮内官官制草案

第一條 内廷ニ内大臣府及左ノ各職ヲ置ク。

侍從職

皇后宮職

式部職

主馬職

主獵職

第二條 内大臣府ニ於テハ御璽國璽ヲ尙藏シ、及旨ヲ奉ジ詔書勅書其ノ他内廷ノ文書ノ事ヲ掌ル。

第三條 内大臣ハ一人親任トス常侍輔弼シ兼テ内大臣府ヲ統轄ス。

第四條 内大臣府ニ左ノ職員ヲ置ク。

文事秘書官長

文事秘書官

内大臣秘書官

内大臣府屬

第五條 文事秘書官長ハ一人勅任トス。内大臣ノ命ヲ承ケ文書ノ事ヲ掌理ス。

第六條 文事秘書官ハ二人奏任トス。上官ノ命ヲ承ケ文書ノ事ヲ分掌ス。

第七條 内大臣秘書官ハ一人奏任トス。内大臣ニ專屬シ庶務ヲ掌理ス。

第八條 内大臣府屬ハ一人判任トス。上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス。

第九條 侍從職ニ於テハ御服御物及常御座所ノ事ヲ掌ル。

第十條 侍從職ニ左ノ職員ヲ置ク。

侍從長官

侍從次官

侍從

次侍從

侍從屬

第十一條 侍從長官ハ一人親任トス。常侍奉仕扈從シ便宜事ヲ奏シ旨ヲ宣シ兼テ侍從職ヲ統轄ス。

第十二條 侍從次官ハ一人勅任トス。侍從長官ヲ輔ケ侍從長官事故アルトキハ其ノ職務ヲ代理ス。

第十三條 侍從ハ十五人奏任トシ内二人ヲ勅任トナスコトヲ得。側近ニ奉仕扈從シ兼テ上官ノ命ヲ承ケ御服御物及常御座所ノ事ヲ分掌ス。

第十四條 次侍從ハ奏任トシ侍從ノ定員内ヲ以テ之ヲ置ク侍從ヲ助ク。

第十五條 侍從屬ハ 人判任トス。上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス。

第十六條 皇后宮職ニ於テハ宮闈ニ關スル事ヲ掌ル。

第十七條 皇后宮職ニ左ノ職員ヲ置ク。

皇后宮大夫

皇后宮亮

皇后宮屬

第十八條 皇后宮大夫ハ一人親任トス。常任供奉シ便宜事ヲ啓シ令ヲ宣シ兼テ皇后宮職ヲ統轄ス。

第十九條 皇后宮亮ハ一人奏任トス。皇后宮大夫ヲ助ケ皇后宮大夫事故アルトキハ其ノ職務ヲ代理ス。

第二十條 皇后宮屬ハ 人判任トス。上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス。

第二十一條 皇后宮職ニ内侍部ヲ置ク。

内侍部ニ於テハ御服御物及常御座所ノ事ヲ掌ル。

第二十二條 内侍部ニ左ノ職員ヲ置ク。

尙 侍

典 侍

權典侍

掌 侍

權掌侍

命 婦

權命婦

女 孀

權女孀

第二十三條 尙侍ハ一人勅任トス。常侍奉仕扈從シ便宜事ヲ啓シ令ヲ傳シ兼テ部員ヲ監督ス。

第二十四條 典侍ハ 人奏任トス。側近ニ奉仕扈從シ上官ノ命ヲ承ケ御服御物及常御座所ノ

事ヲ分掌ス。

尙侍闕員トナリ又ハ事故アルトキハ首席ノ典侍其ノ職務ヲ代理ス。

第二十五條 權典侍ハ 人奏任トス。典侍ヲ助ク。

第二十六條 掌侍ハ 人奏任トス。側近ニ奉仕扈從シ命ヲ承ケ上官ヲ助ク。

第二十七條 權掌侍ハ 人奏任トス。掌侍ヲ助ク。

第二十八條 命婦ハ 人奏任トス。常御座所ニ奉仕シ上官ノ命ヲ承ケ庶務ニ從事ス。

第二十九條 權命婦ハ 人奏任トス。命婦ヲ助ク。

第三十條 女孀ハ 人判任トス。常御座所ニ奉仕シ上官ノ指揮ヲ承ケ雜務ニ從事ス。

第三十一條 權女孀ハ 人判任トス。女孀ヲ助ク。

第三十二條 式部職ニ於テハ帝室ノ典式及交際ノ事ヲ掌ル。

第三十三條 式部職ニ左ノ職員ヲ置ク。

式部長官

式部次官

式部官

式部職翻譯官

式部屬

舍 人

第三十四條 式部長官ハ一人親任トス祭儀典式ニ供奉シ兼テ式部職ヲ統轄ス。

第三十五條 式部次官ハ一人勅任トス。式部長官ヲ輔ケ式部長官事故アルトキハ其ノ職務ヲ代

理ス。

第三十六條 式部官ハ二十八人内五人ヲ勅任二十三人ヲ奏任トシ名譽官トナスコトヲ得。上官

ノ命ヲ承ケ典式及接待ノ事ヲ分掌シ兼テ祭儀典式ニ供奉ス。

第三十七條 式部職翻譯官ハ五人内二人ヲ奏任三人ヲ判任トス。上官ノ命ヲ承ケ外國文書ノ翻

譯及通譯ノ事ヲ分掌ス。

第三十八條 式部屬ハ 人判任トス上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス。

第三十九條 舍人ハ 人判任トシ、宮内省判任官ノ内ヨリ兼任ス上官ノ指揮ヲ承ケ典式接待

ノ雜務ニ從事ス。

第四十條 式部職ニ掌典部及樂部ヲ置ク。

掌典部ニ於テハ祭典ヲ掌リ樂部ニ於テハ樂事及樂生教授ノ事ヲ掌ル。

第四十一條 掌典部ニ左ノ職員ヲ置ク。

掌典長

掌典次長

掌典

掌典補

第四十二條 掌典長ハ一人勅任トス。祭典ヲ掌理シ兼テ部員ヲ監督ス。

第四十三條 掌典次長ハ奏任トス。掌典長ヲ助ケ掌典長事故アルトキハ其ノ職務ヲ代理ス。

第四十四條 掌典ハ八人奏任トシ名譽官トナスコトヲ得、上官ノ命ヲ承ケ祭典ニ從事ス。

第四十五條 掌典補ハ一人判任トス。掌典ヲ助ク。

第四十六條 樂部ニ左ノ職員ヲ置ク。

樂師長

樂師

樂手

第四十七條 樂師長ハ二人奏任トス。樂事及樂生教授ノ事ヲ掌理シ兼テ部員ヲ監督ス。

第四十八條 樂師ハ一人判任トス。上官ノ指揮ヲ承ケ奏樂及樂生ノ教授ニ從事ス。

第四十九條 樂手ハ一人判任トス。樂師ヲ助ク。

第五十條 主馬職ニ於テハ御料車馬ニ關スル事ヲ掌ル。

第五十一條 主馬職ニ左ノ職員ヲ置ク。

主馬長官

主馬職主事

主馬屬

第五十二條 主馬長官ハ一人親任トシ主馬職ヲ統轄ス。

第五十三條 主馬職主事ハ一人奏任トス主馬長官ヲ助ケ主馬長官事故アルトキハ其ノ職務ヲ代理ス。

理ス。

第五十四條 主馬屬ハ一人判任トス。上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス。

第五十五條 主馬職ニ車馬監部ヲ置ク。

車馬監部ニ於テハ車馬裝具ノ管守及馬匹ノ飼養調習醫療ニ關スル事ヲ掌ル。

第五十六條 車馬監部ニ左ノ職員ヲ置ク。

車馬監

調馬師

馬醫師

馬 醫

第五十七條 車馬監ハ一人奏任トス。部務ヲ掌理シ部員ヲ監督ス。

第五十八條 調馬師ハ三人奏任トス。乘馬調習ニ從事ス。

第五十九條 馬醫師ハ一人奏任トス。馬匹醫療ノ事ヲ指揮監督ス。

第六十條 馬醫ハ一人判任トス。馬匹醫療ニ從事ス。

第六十一條 主獵職ニ於テハ狩獵及獵場ノ事ヲ掌ル。

第六十二條 主獵職ニ左ノ職員ヲ置ク。

主獵長官

主獵職主事

主獵官

主獵屬

第六十三條 主獵長官ハ一人親任トス。旨ヲ奉ジ狩獵ニ從事シ兼テ主獵職ヲ統轄ス。

第六十四條 主獵職主事ハ一人奏任トス。主獵官ノ内ヨリ之ヲ兼任シ主獵長官ヲ助ケ主獵長官

事故アルトキハ其ノ職務ヲ代理ス。

第六十五條 主獵官ハ十五人内二人ヲ勅任十三人ヲ奏任トシ共ニ名譽官トス。旨ヲ奉ジ狩獵ニ

從事シ主獵長官ノ命ヲ承ケ獵場ノ事ヲ分掌ス。

第六十六條 主獵屬ハ 人判任トス。上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス。

第六十七條 内廷宮内官ノ進退身分ニ關スル事項ハ所屬長官ニ於テ宮内大臣ニ申牒スベシ。

第六十八條 内廷宮内官各部ノ長官ハ豫算ノ定限内ニ於テ雇員ヲ使用スルコトヲ得。

第六十九條 内大臣府及各職屬ノ登用ハ宮内屬登用規程ニ依ル。

第七十條 各職ニ准判任待遇及等外ノ職ヲ置クコトヲ得。

准判任判任待遇及等外ニ關スル職制ハ宮内大臣之ヲ定ム。

第七十一條 内大臣府及各職ノ會計調度ニ關スル事務ハ宮内省ニ於テ之ヲ掌理ス。

附 則

第七十二條 本令ハ 日ヨリ施行ス。

第七十三條 従前ノ内大臣並宮中顧問官及内大臣秘書官官制文事秘書局官制ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス。

宮内省官制草案

第一條 宮内大臣ハ一人親任トス。内廷宮内官ノ職權ニ屬スルモノヲ除クノ外帝室ニ關スル一切ノ事務ヲ管理シ兼テ華族ヲ監督ス。

二條 宮内大臣ハ主管ノ事務ニ關シ其ノ責ニ任ズ。

主管ノ明瞭ナラザル事務ニシテ内廷宮内官ト關涉スルモノアルトキハ勅裁ヲ經テ其ノ主管ヲ定ム。

第三條 宮内大臣ハ皇室令ノ施行規則ヲ定ムルコトヲ得。但シ其ノ重要ナルモノハ勅裁ヲ經ベシ。

第四條 宮内大臣ハ主管ノ事務ニ關シ省令ヲ發シ及臣民ニ命令告示スルコトヲ得。

第五條 宮内大臣ハ主管ノ事務ニ關シ地方長官及華族ニ指令又ハ訓令ヲ下スコトヲ得。

第六條 宮内大臣ハ所部ノ官吏ヲ統督シ奏任官及奏任待遇職員ノ進退ハ之ヲ上奏シ判任官以下ノ進退及奏任官以下ノ俸給定限内ノ増減ハ之ヲ專行ス。

内廷宮内官ノ進退ニ關シテハ旨ヲ奉ジ又ハ所屬長官ノ申牒ニ基ヅキ前項ニ準ジ其ノ手續ヲナスベシ。

第七條 宮内大臣ハ宮内官華族及士民ノ叙位ヲ上奏シ及内閣總理大臣ヲ經テ宮内官華族ノ叙勳ヲ上奏ス。

第八條 宮内大臣ハ主管ノ事務ニ關シ臨時ノ須要ニ應ジテ勅奏任官其ノ他ノ者ニ委員顧問員評議員ヲ命ズルコトヲ得。但シ所部外ノ官吏ニ付テハ豫メ所屬長官ノ承諾ヲ經ベシ。

第九條 宮内大臣ハ所部ノ官吏及主管ノ事務ニ關係アル者ニ報賞スルコトヲ得。但シ報賞ノ奏任官以上及奏任以上ノ待遇ニ屬スル者ニ係ルトキハ勅裁ヲ經ベシ。

内廷宮内官ノ賞與ニ關シテハ所屬長官ノ申牒ニ基ヅキ前項ニ準ジ其ノ手續ヲナスベシ。

第十條 宮内大臣ハ事故アルトキハ皇室典範皇室令及勅令ニ規定スルモノ並ニ省令ヲ發シ訓令ヲ下スコトヲ除ク外其ノ職務ヲ次官ニ代理セシムルコトヲ得。

第十一條 宮内大臣ハ所管各部局内ノ分課ヲ廢置シ及其ノ處務規程ヲ定ムルコトヲ得。

第十二條 宮内大臣ハ事務ノ現況ニ依リ所部官吏ニ休職又ハ復職ヲ命ズルコトヲ得。但シ其ノ奏任以上ニ係ルモノニ付テハ勅裁ヲ經ベシ。

内廷宮内官ノ休職又ハ復職ニ關シテハ所屬長官ノ申牒ニ基ヅキ前項ニ準ジ其ノ手續ヲナスベシ。

休職ノ期間ハ二年トス。此ノ期間ヲ經過シタルトキハ其ノ官ヲ免ゼラレタルモノトス。

第十三條 宮内大臣ハ別ニ定ムル懲戒規程ニ依リ宮内職員ヲ懲戒スルコトヲ得。

前項ノ懲戒規程ハ勅裁ヲ經テ宮内大臣之ヲ定ム。

第十四條 宮内大臣ハ帝室會計審査ノ實務ニ關涉スルコトヲ得ズ。

第十五條 宮内省ニ大臣官房及左ノ各寮ヲ置キ省務ヲ分掌セシム。

總務寮

內藏寮

爵位寮

圖書寮

侍醫寮

大膳寮

主殿寮

內匠寮

第十六條 大臣官房ニ於テハ機密ニ屬スル事務及職員ノ進退身分ニ關スル事務ヲ掌ル。

第十七條 總務寮ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル。

一、御寫眞ニ關スル事項、

二、行幸啓ニ關スル事項、

三、皇族ニ關スル事項、

四、恩賜進獻及報賞ニ關スル事項、

五、法規其ノ他重要ナル公文ノ起草審査ニ關スル事項、

六、帝室經濟會議ニ關スル事項、

七、公文書類及成案文書ノ接授發送ニ關スル事項、

八、統計報告ノ調製ニ關スル事項、

九、恩給扶助退官賜金及退職死亡救助手當ニ關スル事項、

十、陵墓ノ管守ニ關スル事項、

十一、前各號ノ外各寮ノ主管ニ屬セザル事項、

第十八條 內藏寮ニ於テハ理財及豫算決算其ノ他會計調度ニ關スル事務ヲ掌ル。

第十九條 爵位寮ニ於テハ爵位及華族ニ關スル事務ヲ掌ル。

第二十條 圖書寮ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル。

一、皇統譜ニ關スル事項、

宮内省官制草案

二、圖書記錄ニ關スル事項、

三、天皇及皇族實錄ノ編修ニ關スル事項、

四、陵墓籍ニ關スル事項、

第二十一條 侍醫寮ニ於テハ診候醫藥及衛生ニ關スル事務ヲ掌ル。

第二十二條 大膳寮ニ於テハ供御及饗宴ニ關スル事務ヲ掌ル。

第二十三條 主殿寮ニ於テハ宮殿離宮東宮御所御用邸ノ管守及皇宮警察ニ關スル事務ヲ掌ル。

第二十四條 内匠寮ニ於テハ宮内ノ土木庭苑及廳舍ノ管守ニ關スル事務ヲ掌ル。

第二十五條 宮内省ニ左ノ職員ヲ置ク。

次 官

寮 頭

秘書官

書記官

主 事

屬

第二十六條 次官ハ一人勅任トス。大臣ヲ輔ケ省務ヲ整理シ各寮ノ事務ヲ監督ス。

第二十七條 各寮頭ハ一人勅任トス。

大臣ノ命ヲ承ケ其ノ主務ヲ掌理シ及寮員ヲ指揮監督ス。

總務寮頭ハ次官之ニ兼任シ侍醫寮頭ハ侍醫ノ内ヨリ之ヲ兼任ス。

第二十八條 秘書官ハ二人奏任トス。大臣ノ命ヲ承ケ大臣官房ノ事務ヲ掌理ス但シ省務ノ現況

ニ依リ寮務ヲ補助セシムルコトアルベシ。

第二十九條 書記官ハ 人奏任トス。總務寮ニ屬シ上官ノ命ヲ承ケ寮務ヲ分掌ス。

第三十條 主事ハ 人奏任トス。内藏寮以下ノ各寮ニ分屬シ上官ノ命ヲ承ケ寮務ヲ掌ル。

侍醫寮ニ分屬スル主事ハ侍醫ノ内ヨリ之ヲ兼任ス。

第三十一條 屬ハ 人判任トス。大臣官房及各寮ニ分屬シ、上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス。

第三十二條 圖書寮ニ編修官三人ヲ置ク奏任トス。上官ノ命ヲ承ケ編修ノ事務ニ従事ス。

第三十三條 侍醫寮ニ侍醫侍醫補醫員藥劑師長及藥劑師ヲ置ク。

侍醫ハ十六人勅任又ハ奏任トス診候醫藥及衛生ノ事ヲ掌ル。

侍醫補ハ奏任トシ侍醫ノ定員内ヲ以テ之ヲ置ク侍醫ヲ助ク。

醫員ハ 人判任トス。上官ノ指揮ヲ承ケ醫務ニ従事ス。

藥劑師長ハ一人奏任トス。藥品ノ製造試験及調劑ノ事ヲ掌ル。

藥劑師ハ 人判任トス。藥劑師長ノ指揮ヲ承ケ藥品ノ製造試驗及調藥ニ從事ス。

第三十四條 大膳寮ニ膳部長膳部次長膳部及膳部補ヲ置ク。

膳部長ハ一人奏任トス。膳差調進ノ事ヲ掌ル。

膳部次長ハ 人判任トス。膳部長ヲ助ク。

膳部ハ 人判任トス。膳差調進ニ從事ス。

膳部補ハ 人判任トス、膳部ヲ助ク。

第三十五條 主殿寮ニ皇宮警視皇宮警部及皇宮警部補ヲ置ク。

皇宮警視ハ一人奏任トス。宮殿離宮東宮御所御用邸ノ守門防火警察ノ事ヲ掌ル。

皇宮警部ハ 人判任トス。宮殿離宮東宮御所御用邸ノ守門防火警察ニ從事ス。

皇宮警部補ハ 人判任トス。皇宮警部ヲ助ク。

第三十六條 内匠寮ニ技監技師及技手ヲ置ク。

技監ハ二人勅任又ハ奏任トス。内一人ハ營繕土工ノ實業ヲ掌リ一人ハ庭苑及園藝ノ實業ヲ掌ル。

技師ハ三人奏任トス。内二人ハ營繕土工ノ實業ニ從事シ一人ハ庭苑及園藝ノ實業ニ從事ス。

技手ハ 人判任トス。技師ヲ助ク。

第三十七條 宮内省所管各部局内分課ノ課長ハ所屬判任官ヲ以テ之ニ充テ、其ノ部局長官之ヲ命ズ 但シ宮内大臣へ繼伺ノ上所屬高等官ヲ以テ之ニ充ツルコトヲ得。

第三十八條 宮内省所管各部局長官ハ主管ノ事務ニ關シ其ノ名ヲ以テ諸官衙ト文書ヲ往復スル

コトヲ得。

第三十九條 宮内書記官宮内主事宮内省所管部局ノ主事ニ登用スル者ハ別段ノ規定アルモノヲ除ク外文官高等試験ヲ經テ及第證書ヲ有スル者ニ限ル。

第四十條 宮内屬及宮内省所管部局ノ屬ニ登用スル者ハ別ニ定ムル登用規程ニ依ル。

前項ノ登用規程ハ宮内大臣之ヲ定ム。

第四十一條 宮内大臣ハ第三十九條ノ資格アル者ニ奏任官試補ヲ命ジ前條ノ資格アル者ニ判任官見習ヲ命ズルコトヲ得。

第四十二條 宮内大臣及宮内省所管各部局長官ハ豫算ノ定限内ニ於テ雇員ヲ使用スルコトヲ得

第四十三條 宮内大臣ハ准判任判任待遇及等外ノ職員ヲ置クコトヲ得。准判任判任待遇及等外ニ關スル職制ハ宮内大臣之ヲ定ム。

附 則

第四十四條 本令ハ 日ヨリ施行ス。

宮内省官制草案

東宮職官制草案

第一條 東宮職ハ宮内大臣ノ監督ニ屬シ宮事ヲ掌ル。

第二條 東宮職ニ左ノ職員ヲ置ク。

東宮大夫

東宮侍從長

東宮侍從

東宮侍講

東宮主事

東宮屬

第三條 東宮大夫ハ一人勅任トス。常仕供奉シ便宜事ヲ啓シ令ヲ宣シ、兼テ東宮職ノ事務ヲ整理シ、職員ヲ監督ス。

第四條 東宮侍從長ハ一人勅任トス。常侍奉仕扈從シ便宜事ヲ啓シ令ヲ傳シ東宮大夫事故アルトキハ其ノ職務ヲ代理ス。

第五條 東宮侍從ハ五人奏任トス側近ニ奉仕扈從シ兼テ上官ノ命ヲ承ケ御服御物及常御座所ノ事ヲ分掌ス。

第六條 東宮侍講ハ五人勅任又ハ奏任トス進講ノ事ヲ分掌ス。

第七條 東宮主事ハ二人奏任トス東宮大夫ノ命ヲ承ケ庶務ヲ掌ル。

第八條 東宮屬ハ 人判任トス上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス。

第九條 東宮職ニ左ノ女官ヲ置キ皇太子妃ニ附屬セシム。

東宮職女官長

東宮女官

東宮女孀

第十條 東宮女官長ハ一人奏任トス常侍奉仕扈從シ便宜事ヲ啓シ令ヲ傳シ兼テ東宮女官東宮女孀ヲ監督ス。

第十一條 東宮女官ハ 人奏任トス。

側近ニ奉仕扈從シ上官ノ命ヲ承ケ御服御物及常御座所ノ事ヲ分掌ス。

第十二條 東宮女孀ハ 人判任トス常御座所ニ奉仕シ上官ノ指揮ヲ承ケ雜務ニ從事ス。

第十三條 東宮職ニ准判任判任待遇及等外ノ職員ヲ置クコトヲ得。

准判任判任待遇及等外ニ關スル職制ハ宮内大臣之ヲ定ム。

第十四條 東宮大夫ハ豫算ノ定限内ニ於テ雇員ヲ使用スルコトヲ得。

附 則

第十五條 本令ハ 日ヨリ施行ス。

第十六條 東宮職ニ關係ノ事項ニシテ本令ニ別段ノ規定ナキモノハ總テ宮内省ニ於テ掌理ス。

帝室會計審査局官制草案

第一條 帝室會計審査局ハ宮内大臣ノ管理ニ屬シ會計ノ監督審査ニ關スル事務ヲ掌ル。

第二條 帝室會計審査局ニ左ノ職員ヲ置ク。

長 官

審 查 官

審 查 官 補

屬

第三條 長官ハ一人勅任トス局務ヲ整理シ局員ヲ監督ス。

第四條 審査官ハ五人奏任トス長官ノ命ヲ承ケ局務ヲ分掌ス。

第五條 審査官補ハ奏任トシ審査官ノ定員内ヲ以テ之ヲ置ク審査官ヲ助ク

第六條 屬ハ 人判任トス、上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス。

第七條 帝室會計審査局ノ職員ハ他ノ官職ヲ兼ヌルコトヲ得ズ。

第八條 帝室會計審査局長官ハ主管ノ部長官ニ會計ノ監督審査上必要ナル書類ノ提出ヲ求メ

又ハ様式ヲ示シテ必要ノ報告ヲ求ムルコトヲ得。

第九條 帝室會計審査局長官ハ會計上不明瞭又ハ不合规ノ件アルコトヲ認メタルトキハ主管ノ部局長官ニ推問書ヲ發シ辯明ヲ求ムルコトヲ得。

第十條 主管ノ部局長官ニ於テ前條ノ求メニ應ズルコトヲ怠リ又ハ様式ヲ守ラザルコトアルトキハ帝室會計審査局長官ハ之ヲ宮内大臣ニ具申スルコトヲ得。

第十一條 帝室會計審査局長官ハ審査官又ハ審査官補ヲシテ主管ノ部局ニ就キ會計書類帳簿計表及現金物件ノ現在額其ノ他土木工事ノ實況等ヲ檢査セシムルコトヲ得。

第十二條 帝室會計審査局長官ハ宮内大臣ヲ經テ毎年審査ノ成績ヲ上奏シ及會計ニ關シ改正ヲ必要トスル事項アルコトヲ認メタルトキハ併セテ意見ヲ上奏スルコトヲ得。

第十三條 審査官審査官補ニ登用スベキ者ハ文官高等試験ヲ經テ合格證書ヲ有スル者ニ限ル。

第十四條 帝室會計審査局長官ハ豫算ノ定限内ニ於テ雇員ヲ使用スルコトヲ得。

第十五條 會計審査ニ關スル細則ハ宮内大臣之ヲ定ム。

附 則

帝室林野管理局官制草案

第十六條 本令ハ 日ヨリ施行ス。

第十七條 帝室會計審査局ニ關係ノ事項ニシテ本令ニ別段ノ規定ナキモノハ宮内省官制ニ依ル

第一條 帝室林野管理局ハ宮内大臣ノ監督ニ屬シ御料ニ屬スル林野管理ノ事ヲ掌ル。

第二條 帝室林野管理局ニ左ノ職員ヲ置ク。

長 官
主 事
屬

第三條 長官ハ一人勅任トス、局務ヲ整理シ職員ヲ監督ス。

第四條 主事ハ 人奏任トス、上官ノ命ヲ承ケ局務ヲ分掌ス。

第五條 屬ハ 人判任トス、上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス。

第六條 帝室林野管理局ニ技監技師及技手ヲ置ク。

技監ハ一人勅任又ハ奏任トス、林野管理ノ實業ヲ掌リ兼テ技師及技手ヲ監督ス。

技師ハ 人奏任トス、上官ノ命ヲ承ケ林野管理實業ニ従事ス。

技手ハ 人判任トス、技師ヲ助ク。



第七條 帝室林野管理局ノ事務ヲ分掌セシムル爲支廳ヲ置クコトヲ得。前項支廳ノ職制及待遇ハ宮内大臣之ヲ定ム。

第八條 帝室林野管理局長官ハ豫算ノ定限内ニ於テ雇員ヲ使用スルコトヲ得。

附 則

第九條 本令ハ 日ヨリ施行ス。

第十條 帝室林野管理局ニ關係ノ事項ニシテ本令ニ別段ノ規定ナキモノハ總テ宮内省ニ於テ掌理ス。

學習院官制草案

第一條 學習院ハ宮内大臣ノ監督ニ屬シ、學習院教育ノ主旨及學制ニ依リ學生育成ノ事ヲ掌ル。

第二條 學習院ニ左ノ職員ヲ置ク。

院 長
主 事
屬

第三條 院長ハ一人勅任トス、院務ヲ整理シ兼テ職員ヲ監督ス。

第四條 主事ハ 人奏任トシ、教授ノ内ヨリ之ニ兼任ス上官ノ命ヲ承ケ庶務ヲ分掌ス。

第五條 屬ハ 人判任トス、上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス。

第六條 學習院ニ教授學監及助教授ヲ置ク。教授ハ 人勅任又ハ奏任トシ、院長ノ命ヲ承ケ

學生教授ノ事ヲ分掌ス。

學監ハ 人奏任トシ、教授ノ内ヨリ之ニ兼任ス。院長ノ命ヲ承ケ學生ノ紀律ニ關スル事ヲ分掌ス。

助教授ハ 人判任トス、教授ヲ助ク。

第七條 學習院長ハ教授上必要アルトキハ豫算ノ定限内ニ於テ講師ヲ囑托スルコトヲ得、但シ其ノ奏任以上ノ待遇ニ係ルモノニ付テハ宮内大臣ニ具狀スベシ。

第八條 學習院長ハ學生ノ衛生ヲ掌ラシムル爲豫算ノ定限内ニ於テ醫員ヲ囑托スルコトヲ得、但シ其ノ奏任以上ノ待遇ニ係ル者ニ付テハ宮内大臣ニ具狀スベシ。

第九條 學習院長ハ豫算ノ定限内ニ於テ雇員ヲ使用スルコトヲ得。

附 則

第十條 本令ハ 日ヨリ施行ス。

第十一條 學習院ニ關スル事項ニシテ本令ニ別段ノ規定ナキモノハ總テ宮内省ニ於テ掌理ス。

御歌所官制草案

第一條 御歌所ハ宮内大臣ノ管理ニ屬シ御製御歌及歌御會ノ事ヲ掌ル。
第二條 御歌所ニ左ノ職員ヲ置ク。

所 長
主 事
屬

第三條 所長ハ一人勅任トス、御製御歌ノ事ヲ祇承シ兼テ所務ヲ統理シ所員ヲ監督ス。

第四條 主事ハ一人奏任トス、庶務ヲ掌理ス。

第五條 屬ハ 人判任トス、庶務ニ從事ス。

第六條 御歌所ニ寄人七人參候十五人ヲ置ク、勅任又ハ奏任ノ待遇トシ共ニ名譽職トス。
寄人ハ和歌ノ編纂撰述ニ從事シ參候ハ歌御會ノ儀式典例ニ從事ス。

附 則

第七條 本令ハ 日ヨリ施行ス。

御歌所官制草案

第八條 御歌所ニ關スル事項ニシテ本令ニ規定ナキモノハ總テ宮内省官制ニ依ル。

帝室博物館官制草案

第一條 帝室博物館ハ宮内大臣ノ管理ニ屬シ東京京都及奈良ニ之ヲ置ク。

第二條 東京帝室博物館ニ帝室博物館總長一人ヲ置ク勅任トス。各帝室博物館正倉院上野公園上野動物園ノ事務ヲ整理シ兼テ所部職員ヲ統督ス。

第三條 東京帝室博物館ニ主事一人ヲ置ク奏任トス。總長ノ命ヲ承ケ庶務ヲ掌ル。

第四條 京都帝室博物館及奈良帝室博物館ニ館長各々一人ヲ置ク奏任トス。總長ノ命ヲ承ケ館務ヲ掌理シ所部職員ヲ監督ス。

第五條 各帝室博物館ニ左ノ職員ヲ置ク。

部 長

部 次 長

屬

技 手

第六條 部長ハ東京帝室博物館四人京都及奈良帝室博物館各々三人共ニ奏任トス。總長又ハ館

長ノ命ヲ承ケ列品部門ノ別ニ從ヒ部務ヲ分掌ス。

第七條 部次長ハ東京帝室博物館四人京都及奈良博物館各々三人共ニ判任トス。部長ヲ助ク。

第八條 屬ハ 人判任トス。上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス。

第九條 正倉院ニ關スル事務ハ奈良博物館ニ於テ掌理ス。

附 則

第十條 本令ハ 日ヨリ施行ス。

第十一條 帝室博物館ニ關スル事項ニシテ本令ニ別段ノ規定ナキモノハ總テ宮内省官制ニ依ル

宮内官官等俸給令草案

官 等

第一條 宮内官ノ官等ハ親任ノ官ヲ除ク外高等官ヲ分テ八等トシ親任ノ官及一等二等ヲ勅任トシ三等以下ヲ奏任トシ判任官ヲ分テ六等トス。

第二條 宮内官ノ等位ハ別表ニ依ル其ノ官制ニ規定シタル兼任ノ官職ニシテ別表ニ之ヲ略スルモノハ本官ノ等位ニ從フ。

第三條 宮内官同等内ノ順序ハ任官ノ前後ニ依リ任官同日ナルトキハ前官ノ順序ニ依リ其ノ前官ナキモノハ年齢ノ長少ニ依ル。

宮内待遇職ハ勅任待遇ハ高等官二等ノ次ニ奏任待遇ハ八等ノ次ニ准判任判任待遇ハ判任官六等ノ次ニ班ス

第四條 宮内官ノ初任ハ高等官六等以下判任官三等以下トシ其ノ他官廳ヨリ轉任スルハ前官ノ官等ニ依ル即チ前官ニ在テ轉任現時ノ官等ニ在ルコト第七條在職年數ノ定限以上ナル者ハ一

等ヲ陞叙スルコトアルベシ。

第五條 宮内官ノ再任ハ前官ノ官等以下トス其ノ前官最終ノ官等ニ在ルコト第七條在職年數ノ定限以上ナル者ハ一等ヲ陞叙スルコトアルベシ。他官廳ノ退官者ヲ任用スルモ亦同ジ。

第六條 左ニ列記スル官ニ任用スルハ前二條ノ例ニ依ラズ。

勅任官

文事秘書官

侍從

典侍

權典侍

掌侍

權掌侍

式部官

式部職翻譯官

掌典次長

圖書寮編修官

侍醫

東宮侍講

東宮侍從

東宮女官長

東宮女官

第十條 宮内官ノ官等ハ高等官六等以上及判任官五等以上ハ每等在職二年ヲ踰ユルニ非ザレバ之ヲ陞叙セズ。

俸給

第八條 宮内官ノ俸給ハ高等官ハ年俸トシ判任官ハ月俸トシ其ノ定限ハ別表ニ依ル。

第九條 親任官ノ俸給ハ内大臣宮内大臣ニ一級俸ヲ賜ヒ侍從長官皇后宮大夫式部長官ニ二級俸以下ヲ賜ヒ主馬長官主獵長官ニ三級俸ヲ賜フ。

第十條 勅任官奏任官ノ俸給ハ侍從次官侍從次侍從式部次官式部官式部職翻譯官掌典長掌典次長圖書寮編修官皇宮警視東宮侍從御歌所長ニ二級俸以下ヲ賜ヒ自餘ハ一切俸給表ニ依テ之ヲ賜與ス。

第十一條 調馬師馬醫師馬醫侍醫補藥劑師長藥劑師膳部長膳部次長膳部膳部補學習院教授助教授ニハ技術官ノ俸給ヲ賜フ。

第十二條 技術官及之ニ同キ俸給ヲ受クベキ者ニハ業務ノ繁閑ニ依リ其ノ官等相當最低額以下ノ俸給ヲ賜與スルコトアルベシ。

第十三條 兼官アル者ノ俸給ハ其ノ多キ方ニ就テ之ヲ賜與ス。

第十四條 他官廳ヨリ宮内官ヲ兼ヌル者ニハ兼官相當俸給額ノ三分一以内ヲ賜フコトアルベシ

第十五條 宮内官ノ俸給ハ每級在職一年ヲ踰ユルニ非ザレバ之ヲ増加セズ但月俸二十五圓未滿ノ俸給ヲ給スルハ此ノ限ニ在ラズ。

第十六條 宮内奏任官判任官其ノ官ノ極位ニ陞リ相當俸給ノ最高額ヲ受ケ五年以上ヲ經テ勤勞顯著ナル者ニハ特ニ一級ヲ加俸シ其ノ判任官ニシテ月俸七十五圓ヲ受ケタル者ニハ加俸シテ百圓ニ至ルコトアルベシ。

第十七條 年俸ハ十二分シテ毎月之ヲ支給ス

第十八條 俸給ノ支給ハ新任轉任増俸減俸總テ發令ノ翌日ヨリ之ヲ計算ス其ノ官制及俸給令ノ

改正ニ由リ新ニ賜與スベキ俸給ハ新令施行ノ日ヨリ之ヲ計算ス

第十九條 休職廢官退官及死亡シタル者ニハ其ノ月々俸ノ全額ヲ支給ス其ノ年俸モ亦月割ノ全

額ヲ支給ス。

休職廢官退官ノ者同月内ニ有給ノ職ニ就キタルトキハ就職ノ日ヲ限トシ前項俸給ノ支給ハ日割ヲ以テ之ヲ計算ス。

第二十條 休職廢官退官ノ者事務引繼殘務整理ノ命ヲ承ケテ公務ニ從事スル期間ハ仍從前ノ俸給ヲ支給ス。

第二十一條 病ニ由リ執務セザルコト九十日ヲ踰エ私事ノ故障ニ由リ執務セザルコト三十日ヲ踰ユル者ニハ俸給月額ノ半額ヲ減ズ其ノ公務ニ因ルノ傷痍疾病若ハ喪ニ服シ流行病豫防規則

ニ依リ出勤ヲ停メラレタル者及賜暇休養ハ此ノ限リニ在ラズ。

第二十二條 宮内官休職ヲ命ゼラレタル者ニハ休職中俸給月額三分ノ一ヲ支給ス其ノ有給ノ職ニ就キタルトキハ之ヲ停ム。

第二十三條 宮内高等官判任官ニシテ國庫ヨリ恩給ヲ受クル者ハ支給スベキ俸給額ヨリ恩給額ヲ控除シテ之ヲ支給ス。

第二十四條 宮内官ニシテ豫備後備又ハ補充兵役ニ在ル者陸軍給與令ニ依リ俸給ヲ受クル間ハ宮内官俸給ノ支給ヲ停止ス但シ其ノ額宮内官俸給額ヨリ寡少ナルトキハ其ノ不足額ハ宮内官

俸給ヨリ之ヲ補充ス。

宮内官官等俸給令草案

第二十五條 宮内高等官死亡シタルトキハ在職最終年俸三分ノ一ヲ遺族ニ賜ヒ判任官ニ在テハ三ヶ月ノ月俸ヲ給ス其ノ休職者モ亦本俸ニ依ル。

待遇職及御用掛勤務ノ類等外傭員等死亡シタルトキハ奉職一年未滿ニハ俸給一ヶ月分滿一年以上ニハ二ヶ月分滿二年以上ニハ三ヶ月分ヲ賜與ス其ノ別ニ規定アルモノハ此ノ限ニ在ラズ

第二十六條 本令ノ在職年數ハ月ヲ以テ之ヲ計算ス。

第二十七條 俸給支給ニ關スル細則及官制外ノ職員ニ支給スル俸給規則ハ宮内大臣之ヲ定ム。

附 則

第二十八條 本令ハ 日ヨリ之ヲ施行ス。

第二十九條 従前ノ規程ニ依リ非職休職ヲ命ゼラレ未ダ滿期ニ至ラザル者ハ第二十三條ヲ適用セズ。

第三十條 従前宮内官官等俸給ノ規定ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス。

御下問奉答案

一、『服喪令ハ樞府監視ニ附セラルベキヤ』

謹テ按ズルニ元老院ニ在テハ議案ヲ其ノ檢視ニ附セラル、ノ制アリタリト雖、樞密院ニ對シテハ斯ル制アルコトナシ。再查皇室服喪令ハ他ノ皇室諸令調査ノ進捗ニ因リ、彼此對照シテ更ニ多少ノ修正ヲ加ヘタルモノナルニ依リ、更メテ樞密顧問ニ御諮詢在ラセラレ然ルベキモノト信ズ。

二、『成年ハ十八年ノ處結婚ハ十七年ニテモ宜シトシ成年式ヲ結婚後ニ舉グルハ如何理由』

謹テ按ズルニ結婚ハ風土慣習ト身體發育ノ程度トヲ參酌シ、普通ノ成年以外ニ格別ノ適齡ヲ定ムルコト諸國殆ド其ノ軌ヲ一ニス。現ニ我國民法ニ於テモ第三條ニ滿二十年ヲ以テ成

御下問奉答案

年トストアルニ拘ラズ、婚姻ニ付テハ第七百六十五條ニ男ハ滿十七年女ハ滿十五年ニ至ラザレバ婚姻ヲ爲スコトヲ得ズトアリ。又皇室典範ニ於テモ天皇及皇太子皇太孫ハ滿十八年ヲ以テ成年トシ、爾餘ノ皇族ハ滿二十年ヲ以テ成年トストアルニ拘ラズ、現行皇室婚嫁令第一條ニ、大婚禮ハ天皇滿十七年ニ達シタル後ニ於テ之ヲ行フトシ、第二十一條ニ皇族ノ婚嫁ハ男子滿十七年女子滿十五年ニ達スルニ非ザレバ之ヲ成スコトヲ得ズトス。皇室親族令第二十條亦實ニ之ニ依レルナリ。蓋普通ノ成年未成年ノ區別ハ公私ノ權義ヲ行使スルニ付テノ能力ノ有無ヲ定ムルノ標準ニシテ、結婚ノ適齡ヲ定ムルトハ全然其ノ旨趣ヲ異ニスルモノタリ。故ニ結婚後成年式ヲ舉ゲラルルモ何等妨グルモノニ非ザルナリ。若夫レ大婚ノ適齡及皇太子皇太孫婚嫁ノ適齡ヲ成年ト定メラレタル年齢ト同ジカラシメムカ、普通皇族ニ在テモ亦同ク婚嫁ノ適齡ヲ成年ト定メラレタル年齢即チ滿二十年トセザルベカラザルガ如シ。是レ風土慣習ト身體發育ノ程度ニ伴ハズ、況ヤ成年未成年ノ區別ハ男女ニ依リテ差異アルコトナキニ於テオヤ。

三、『皇太子即位ノ上大婚式ヲ舉ゲザルコト既婚後ニ依テナリ。附式ニ書置ク事』

謹デ按ズルニ皇太子皇太孫踐祚スルトキハ其ノ妃ハ當然皇后トナルヲ以テ、更ニ大婚ノ式ヲ舉ゲラルベキニ非ズ。登極令第十一條ニ「即位ノ禮ヲ行フ期日ニ先ダテ天皇神器ヲ奉ジ皇后ト共ニ京都ノ皇宮ニ移御ス」ト云ヒ、第十六條ニ「即位ノ禮及大嘗祭訖リタルトキハ天皇皇后ト共ニ神宮熱田神宮神武天皇山陵並前帝四代ノ山陵ニ謁ス」ト云ヒ、並ニ第十七條ニ「即位ノ禮及大嘗祭訖リテ東京ノ宮城ニ還幸シタルトキハ天皇皇后ト共ニ皇靈殿神殿ニ謁ス」トアリ。此ノ皇后ハ即チ曾テ皇太子妃又ハ皇太孫妃タリシ皇后ヲ包含スルコト論ヲ待タズ。此ノ規定ニ基ヅキ其ノ附式中ニハ賢所御親祭ノ儀ニ於テ皇后ノ御服ヲ著御シ天皇ニ隨テ御拜アラセラレ、又紫宸殿ニ於ケルノ儀ニモ皇后高御座ノ掖御座ニ出御アラセラルルコトヲ儀注トスル見込此ニ由テ皇后正位ノ義ハ自カラ昭ナルヲ認ム。但シ附式ハ目下起草中ナリ。

四、『遺言令ノ事後世子孫ノ爲設ケ置ニ停ルヤ』

謹デ按ズルニ遺言ハ身后ノ處分ヲ定ムルニ在ルヲ以テ、其ノ規型ヲ嚴ニシ、其ノ効力ヲ固

カラシメ、以テ他日ノ疑竇ヲ杜クテ必要トスルコトハ一般臣民ニ於テ既ニ然リ、故ニ民法第五編第六章ニ遺言ニ關シ七十條ノ詳細ナル規定ヲ置クヲ見ル。況ヤ皇室ノコトニ付テハ其ノ繫ル所重大ナリ。皇室遺言令ノ制定ヲ必要トシタル所以實ニ茲ニ存ス。現ニ皇室典範第二十七條ニ先帝遺命ヲ以テ太傅ヲ任ゼザリシトキ云々トアリ。又第三十七條中事宜ニ依リ天皇ハ其ノ父母ノ選舉セル後見人ヲ認可シ云々トアリ。而シテ其ノ所謂選舉中ニハ遺言ニ依リ選舉セル場合ヲモ包含スルコト言フ俟タズ。然ルニ皇室典範ハ遺命及遺言ニ關シ何等規型ヲ設クルコトナキナリ。即チ遺言令ハ獨後世子孫ノ爲ノミニ必要ナルニ非ザルナリ但遺命若クハ遺言ナキ場合ニ本令ノ適用ヲ見ザルハ明白ナリ。

五、『喪儀令第二十二條、皇族靈代ヲ皇靈殿へ御移シハ用捨シ内廷ニ在ル御靈殿ニ御移ハ不苦桂宮ノ御靈未移』

謹デ按ズルニ右第二十二條ニ「皇族ノ靈代ハ之ヲ其ノ殿邸ニ安置シ一周年祭ヲ訖リタル後之ヲ皇靈殿ニ移ス」トアルハ明治九年太政官布告第六十號及明治十一年太政官達第十二號ニ基ヅキ之ヲ規定シタルモノニシテ、即チ御歴代皇親皇靈御合祀被仰出タルノ旨趣ニ副フ所以ナリ。一年ノ誄祭ヲ訖リタル後之ヲ皇靈殿ニ移スコトトシタルハ、一年以後ノ御祭典ハ吉祭ニ屬スルヲ以テ、皇靈殿ニ於テセラレルヲ至當ト認メタルニ由ル。蓋本令第十一條ニ故太皇太后故皇太后故皇后ノ靈代移御ヲ一周年祭ヲ訖リタル後ニ於テスト規定シタルト其ノ軌ヲ同クセルモノニシテ、英照皇太后ノ御例亦然リ。又現今内廷ニ在ル御靈殿ノ儀ハ本令第十一條ニ掲ゲタル權殿ニ類似スルモノニシテ、永久ノ制トシテ之ヲ昭示スベキ限ニ在ラズ。故ニ本令ニハ總テ之ヲ皇靈殿トシタリ。但シ御思召ニ依リ三后以外ノ皇族ニ屬スル分ハ、一周年祭ヲ訖リタル後其ノ移靈ノ期日ヲ更ニ勅定セラレベキコトニ規定セラレルモ亦碍ゲナキヲ認ム。

六、『國葬令第三條國家ノ偉勳者跡ニ條モ同文ニテハ如何皇族ニ非ザルト云文甚紛ラハシ改メ』
謹デ按ズルニ皇族國葬ノ場合ニ廢朝ノコトニ付テハ、皇室喪儀令第十七條ニ規定アリ、又臣民喪ニ服スルコトニ付テハ皇室服喪令第十六條ニ規定アリ。蓋是等ノコトハ其ノ性質皇

室令ニ於テ規定セラルベキモノタルヲ以テナリ。故ニ勅令ヲ以テ制定セラルベキ國葬令第三條ハ、皇族ニ非ラズシテ國家ニ偉勳アル者ノ國葬ノ場合ニ於ケル廢朝及臣民服喪ノコトヲ規定シタルノミ。要ハ皇族ニ關スルコトハ皇。室。令。ヲ。以。テ。定。ム。ル。ニ。在。レ。バ。ナ。リ。

右恭テ御下問ニ奉答ス

臣 大勳位侯爵 伊 藤 博 文
(自署)

明治四十年二月十四日

東京ノ宮廷ト歐洲諸國ノ宮廷トノ 間ニ於テ遵守スベキ萬國公禮ニ關 スル謹告書

肅啓東京ノ宮廷ト歐洲諸國ノ宮廷トノ間ニ於テ遵守スベキ萬國公禮ニ關シ、其詳細ヲ閣下ニ謹告セント欲シ、原大山兩氏ト熟議ノ後竟ニ本書ヲ呈スルコトニ決シタリ。實例ヲ擧ゲテ本題ノ報告ヲ閣下ニ奉ツルノ要ヲ悟リタルモノハ、輒近歐洲人ノ喪アル時ニ方リ、東京ノ宮廷ト政府トハ爲メニ其敬意ヲ致シ其感情ヲ表サレタルニ、某ノ事ハ歐洲ニ於テ同時ニ用ヒタル通例ヨリモ鄭重ニ過ギ、又某ノ事ハ各國互相ノ難問ヲ惹起スモノアレバナリ。夫レ萬國ノ公禮ハ其原旨ニ依リ全ク彼我互相ニ外ナラザルノミ。故ニ我ヨリ彼ニ對シ能ク其禮ヲ重クシテ彼ヨリ我ニ對スルノ禮ニ超ユルモノハ未ダ嘗テ之レ有ラズ(余ノ聞キ得タル所ニ據レバ)今日マデ歐洲諸國ノ宮廷ヨリ互相ノ事ヲ約束シタルモノナキガ如シ。是余敢テ本題ニ關シ鄙言ヲ閣下ニ奉ズルヲ憚ラザル所以ナリ。

萬國宮廷ノ公禮ハ大約三種ノ類別アリト謂フ得ベシ。

- 一、各國宮廷ヨリ其皇族ノ生死婚姻ヲ他國ノ宮廷ヘ親書ヲ以テ報知スルコト。
 - 二、他國皇族ノ凶事アル時自國ニテ其喪ニ服スルコト。
 - 三、皇室ノ禮儀殊ニ婚姻葬儀祭典等アルトキ他國ノ皇族若クハ其名代人參會スルコト。
- 右ノ外尙附言スベキモノハ駐劄國ニテ死亡スル外國公使ノ葬儀ニ外國ノ君主皇族或ハ政府ノ名代人會葬ノコト是ナリ。

已上開列ノ問題ニ付數條ノ的例ト注意ノ事アリ、請フ之ヲ左ニ述ベシ。

- 一、生死婚姻ノ報知ニ付テハ各國宮廷ニテ此報知ヲ爲スベキ爲メ一定セル各國宮廷ノ名簿アリ而其名簿ニ記載セザル諸國ヘ報知セザルコトハ余竊ニ其確實ナルヲ信ズ。曩者大山氏英國ニ於テ其名簿中ニ日本ヲ記入セシムルコトヲ得タリ。爾後倫敦ヨリ正當ノ式ヲ以テ日本ニ報知書ヲ贈ルナラン。但他ノ諸國ニ於テモ亦同様ノ相談整ヒタルヤ否ハ余未ダ之ヲ知ルニ及バズ。若シ他國ニ於テ如此キノ相談未ダ整ハザラン乎、則或ハ恐ル他國ヨリハ日本ニ報知ナカランコトヲ。聖上ヨリ西班牙皇帝崩御報知ニ對スル御返翰ハ（馬德里府ニ轉達ノ爲メ）未ダ當公使館ニ到達セズ。故ニ余竊ニ疑フ生ジ自ラ余ニ問フニ馬德里府ヨリ妥當ノ式ヲ以テ東京ヘ報知アリシヤ如何トノコトヲ以テセリ。

二、歐洲宮廷ニ於テ互ニ他國ノ爲メニ服喪スルコトハ（千八百八十五年一月宮廷服喪ニ關スル余ノ報告書中ニ記スルガ如シ）是迄ハ歐洲ニテ耶蘇教ヲ奉ズル諸國ノ宮廷ノミニ限リタリ。土耳其皇帝ハ歐洲中ノ君主ナレドモ此外ニ在リ。歐洲外ノ諸國ノ君主ハ（ブラジル皇帝ヲ除クノ外）此部中ニ入ルヲ得ズ。

三、皇族ニシテ他國皇族ノ婚姻葬儀ニ參會スルコトハ（特別ノ事情アルノ外）親族或ハ親密ノ交情アルモノニ限ル。例ヘバ西班牙皇帝ノ葬儀ニハ皇族ニシテ參會スルモノ唯二人アリシノミ即チ皇后ノ兄弟ナル澳國ノ大公某ト葡萄牙皇太子ナリ。蓋シ皇太子ハ格別ノ親友ニシテ、其國ハ則隣接ナルヲ以テナリ。元來如此キ大禮ニ當リテハ諸大國ハ（千八百八十六年一月二日ノ報告書中ニ記シタル如シ）各其大使ヲシテ名代タラシメ、他ノ國ニハ特差使節或ハ駐劄公使ヲシテ其名代タラシムルヲ例トス。

他國君主ノ爲メニ執行スル宗教上ノ儀式ニ皇族ノ臨會スルハ常例ニ非ズ。西班牙故皇帝ノ爲メニ倫敦ニ於テ營ミタル喪祭ニハ、英國皇帝並皇太子ハ各宮中騎馬官ニ命ジ、又外務大臣ハ其次官ヲシテ名代タラシメタリ。英國ノ皇族及ビ諸大臣其他政府ノ重官ハ一人トシテ參會シタルモノナシ。同一ノ喪祭ヲ巴里ニ於テ執行シタルトキ、大統領ハ傳令使ナル佐官一名ヲ以テシ、外務大臣ハ儀式課長ヲ以テ各其名代タラシメ、各省大臣ノ内一人モ會シタルモノナシ。又巴里ニ

於テ露國故皇帝皇后ノ喪祭ヲ執行シタル時亦同ジ。

最後ノ論題ニ係ル歐洲ニ於テ皇族ガ外國公使ノ葬儀ニ會シタルコト(余ノ聞得タル所ニ據レバ)未ダ嘗テ之レ有ラズ。昨年四月十七日白耳義駐劄露國公使ブロンドフ伯ノ葬儀ニ、白耳義皇帝及皇弟フランドル伯ハ各其侍中武官ヲシテ名代タラシメ、各省大臣多ク皆會葬シタルハ事實ナレドモ、余ハ之ガ説明トシテ言ハントス。ブロンドフ伯ハ多年同國ニ駐劄シ外交官ノ上席ナリシヲ以テナリ。是ヨリ先キ千八百八十年十二月巴里ニ於テ鮫島氏ノ葬儀ニ佛國大統領ハ傳令使ナル大佐一名ヲ以テシ、外務大臣ハ儀式課長ヲ以テ名代トシテ會葬セシメタリ。此二人共ニ葬送ノ列ニ加リタレドモ、公使館ヨリ行クコト凡三四丁ニシテ止ミタリ。各省大臣或ハ政府ノ重官ハ一人トシテ會葬シタルモノナシ。

然ルニ此書ノ首ニ記スル如ク、日本ハ近頃歐洲人ノ葬儀アルニ方リ其禮意ヲ致サレタルコト歐洲人ガ前述ノ例ニ沿ヒ互ニ表シタルモノヨリモ過重ナリシガ如シ。是ノ故ニ原大山兩氏ト十分討議同意ノ上(兩氏トモ此書ヲ讀ミ之ヲ可トセリ)謹デ數言ヲ閣下ニ呈セントス。請フ閣下寛恕セラレヨ。抑一國品位ノ高低ハ間接ニ本題ニ連結スルヲ以テ、凡日本ヨリ歐洲諸國ノ爲メニセント欲スルコトハ歐洲諸國ニ於テモ亦當サニ日本ニ對シテ悉ク之ヲ爲スベシトノコトヲ確知セザル間ハ、日本ヨリ歐洲人ニ對シ非常ノ友情ヲ表スル勿クシテ可ナルニ似タリ。右ノ目的ニ依リ萬國宮廷公禮ニ關シテハ總テ日本ト全ク互相ニスベキヤ否ヲ各國ノ宮廷ニ秘問シ、各宮廷ト共ニ嗣後互ニ用フベキ禮式ヲ確定セバ則可ナラン。如此クシテ而後日本ノ宮廷ト政府ハ懸念ナク斷行スルヲ得ベク、且今日我ヨリ禮意ヲ表スルモ彼或ハ之ガ報酬ヲ爲サズシテ止マンモ亦未ダ知ルベカラズト云如キ危險ノ事ハ將來復タ之ヲ爲スニ及バズ。請フ閣下諒照アランコトヲ。恐惶敬具

千八百八十六年五月二十一日

巴里ニ於テ

フレデリツキ マルシヤル

伯爵 伊 藤 閣 下

宮内大臣へ回答案

明治三十五年十月三十一日

宮内大臣へ回答案

去十月十六日付ヲ以テ御回附相成候大藏大臣提出地租ヲ課セザル土地ニ關スル法律案審議ノ末別冊朱書ノ通修正相成候間右當局意見トシテ及御回答候也。

總 裁 心 得

大藏大臣ヨリ地租ヲ課セザル土地ニ關スル法律案別紙之通照會有之候ニ付及御廻付候右ハ大藏省ニ於テ至急ヲ要スル趣ニ有之候間可成速ニ貴局御意見承知致度此段申進候也。

明治三十五年十月十六日

宮内大臣子爵 田 中 光 顯

帝室制度調査局總裁心得

伯爵 土方 久 元 殿

地租ヲ課セザル土地ニ關スル法律案第十六議會ニ提出シタルニ貴族院ニ於テ修正意見有之調査中會期經過議了ニ至ラズ候ニ付今般貴族院ノ意見ヲ斟酌シ別紙之通更ニ第十七議會ニ提出致度候處御料地ニ關スル規定モ有之候ニ付一應貴省之意見承知致度此段及御照會候也。

明治三十五年十月十五日

大藏大臣男爵 曾 禰 荒 助

宮内大臣子爵 田 中 光 顯 殿

宮内大臣へ回答案

迫而明日御面會之節更ニ詳細可申述候也

第一條 左ニ掲ゲタル土地ニハ地租ヲ課セズ。

一、世傳御料地

二、神宮地及其ノ附屬地

三、御陵地 及其ノ附屬地並御陵墓傳説地、御陵墓參考地

四、離宮地御料邸地及 皇族賜邸地

五、皇室ニ於テ公共ノ用ニ供スル御料地

〔五〕六、國有地

〔六〕七、國、府、縣、郡、市、町、村其ノ他勅令ヲ以テ指定スル公共團體ニ於テ公用又ハ公共

ノ用ニ供スルモノ但シ有料借地ハ此ノ限ニ在ラズ

〔七〕八、神社、建物アル遙拜所、寺院、佛堂、祠宇及耶蘇教會堂ノ境内地ニシテ借地ニ非ザル

モノ

〔八〕九、共同墓地及共同火葬場敷地

〔九〕十、道路敷地、鐵道用地、河川敷地、運河敷地、水道用地、下水道用地、公共溝渠敷地及

堤塘敷地

〔十〕十一、用惡水路敷地、井溝敷地及溜池敷地

〔十一〕十二、保安林

第二條 府、縣、郡、市、町、村其ノ他ノ公共團體ハ前條ノ土地ニ租稅其ノ他ノ公課ヲ課スル
コトヲ得ズ但シ所有者以外ノ者前條第一號又ハ第五〔五〕六號ノ土地ヲ前條第七號乃至第十一號
ノ目的以外ニ使用スル場合ニ於テ其ノ土地ニ對シ使用者ニ租稅其ノ他ノ公課ヲ課スルハ此ノ
限ニ在ラズ

第三條 府、縣、郡、市、町、村其ノ他勅令ヲ以テ指定スル公共團體ガ公用又ハ公共ノ用ニ供
スベキモノト定メタル其ノ所有地又ハ其ノ目的ヲ以テ取得シタル土地ニ付テハ前二條ノ規定
ヲ準用ス但シ命令ノ定ムル期間内ニ公用又ハ公共ノ用ニ供セザルトキハ此ノ限ニ在ラズ

前項ノ規定ハ御料地ニ之ヲ準用ス

第四條 第一條又ハ第三條ニ該當セザル土地ニシテ之ニ該當スルニ至リタルトキハ其ノ以後ノ
納期ニ於テ徵收スベキ租稅其ノ他ノ公課ヨリ之ヲ徵收セズ

第一條又ハ第三條ニ該當スル土地ニシテ之ニ該當セザルニ至リタルトキハ其ノ以後ノ納期ニ
於テ徵收スベキ租稅其ノ他ノ公課ヨリ之ヲ徵收ス

宮内大臣へ回答案

第五條 本法ハ明治三十六年四月一日ヨリ之ヲ施行ス但シ北海道ヲ除クノ外未ダ地租條例ヲ施行セザル地ニ付テハ其ノ施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス

第六條 地所名稱區別其ノ他從前ノ法令中本法ノ規定ト牴觸スル規定ハ總テ之ヲ廢止ス

第七條 本法施行前ヨリノ御料地ハ其ノ御料地タル間世傳御料地ニ準ズ

皇族ノ離縁又ハ離婚ニ關スル意見

侯爵 伊藤博文

離縁又ハ離婚ノ事由ハ裁判ニ依ル場合ノ外千種萬態ナルベキヲ以テ、豫メ其ノ事由ヲ揣摩シ、之ヲ皇室令ノ正條ニ明掲スベキニ非ズ。事由既ニ千種萬態ナリ、從テ其事由ノ如何ニ依リ茲ニ爵又ハ財産ヲ賜フベキ場合ト否トヲ區別スルニ由ナシ。然レドモ協議ニ依ル離縁又ハ離婚ハ從前内容ニ於テ重大ナル過失ニ基ヅクモノト爲スコトアルモ、是レ唯々認定ニ過ギズシテ、裁判ニ依ル場合ノ如ク事ノ公然ト爲ルコトナキノミナラズ、其ノ事實ノ存在ヲ確定セルモノト爲スベカラザルガ故ニ、其事由ヲ認定如何ニ拘ラズ、時ニ臨ミ特旨ヲ以テ爵又ハ財産ヲ賜フコトアルニ於テ亦不可ナルヲ見ズ。獨リ裁判ニ依ルモノニ至テハ事已ニ顯揚シ事實モ亦確定セルモノト爲サルベカラザルヲ以テ、其犯罪又ハ重大ナル過失ニ基ヅキタル場合ニハ「爵又ハ財産」ヲ賜與セラル、ノ恩典ニ浴スル能ハザルモ、其生活上資産ノ依ルベキナキモノニ限り一時又ハ終身扶助料トシテ金員ヲ給與セラル、コトノ一項ヲ内規ニ掲ゲ、以テ萬一ニ應ズルモ妨ゲナカル

ベシ」

皇族ヨリ華族ノ養子トナリタル者離縁ノ場合及皇族ヨリ華族ニ降嫁シタル者離婚ノ場合ニ
關スル内規

第一、伊東巳代治奉答文ノ通り

第二、前同斷

第三、離縁離婚ノ場合ニ於テ爵又財産賜與ノ可否ニ付テハ第一第二ニ規定シタルモノニ依ル
モ其離縁離婚事故ノ如何ニ關セズ、資産ノ依ルベキナキモノニ終身扶助料ヲ賜與セラル、
ハ右規定ノ限外タルベシ。

右謹デ奉答ス

明治四十年五月廿三日

侯爵 伊 藤 博文

皇親繁榮ニ關スル件

謹デ按ズルニ皇室典範ニ於テ皇族ハ親等ノ親疎若クハ世數ノ遠近ニ依リ皇親ニ制限ヲ立ツルノ
明文ナシ。故ニ男系ノ皇族ハ應サニ子々孫々長ク其身分ヲ享有セラルベキモノニシテ、典範第
三十條第三十一條ノ精神モ亦百世皇族ノ主義ヲ採用セラレタルモノト謂ハザル可カラズ。惟フ
ニ皇室連枝ノ繁榮ハ所謂ル親々ノ義倍々見ハル、所以ニシテ、素ヨリ欽仰スベキノ事タルト雖
モ、皇位ニ遠隔セル傍系皇族ノ蕃衍スルハ、皇室ガ皇族ヲ統督監護スル點ヨリスルモ、將タ其
品位ヲ維持シ其榮譽ヲ保有セシムル點ヨリスルモ、深思熟慮ヲ要スベキノ事タリ。蓋シ將來益
益皇族ノ繁盛ニ趣クニ於テハ、之ガ給養ニ莫大ノ費用ヲ要シ、到底皇室費ノ能ク負擔シ得ル所
ニアラザルノ恐レナシト謂フベカラズ。故ニ皇位ノ繼承ニ萬一ノ虞ナキノ成算確立スルニ於テ
ハ、或ハ令制ニ鑑ミ五世以下ハ臣籍ニ入ラシムルカ、或ハ慶雲ノ制ニ依リ五世王マデヲ皇親ト
シ、其嫡ヲ承クル子孫ニ限り尙ホ王タラシムルカ、又ハ七世若クハ十世ヲ限り其以下ハ華族ニ
列セシムルカノ制度ヲ立ツルヲ便トスルモノニ似タリ。然レドモ典範制定以來年所猶ホ淺ク、
獨リ皇族ノ狀況未ダ其制定ノ當時ト大ニ其趣ヲ異ニスル所アルヲ見ザルノミナラズ、典範ノ改

正増補ハ最モ之ヲ慎重ニセザル可カラズ。況ヤ皇位繼承ニ重大ノ關係ヲ有スル皇族ノ制度ニ於テヲヤ。試ニ皇族ノ制度ニシテ令制ニ依リ世襲親王家等ノ制ナカリシモノト假定センカ、皇族今日ノ狀態果シテ如何ナルカヲ知ルベカラズ。今若シ不確定ナル基礎ニ依リ、永遠ノ規準ヲ立テンカ、其レ或ハ遺算ナキヲ保セズ。曩ニ宮内省ニ於テ皇族増加ノ歩合ニ付推算ヲ立タルコトアリ、即チ明治十二年ハ皇族現在員三十四人ニシテ、明治二十一年ハ四十一人ナリシヲ以テ、此ノ十ヶ年間ニ皇族七人増加セシ事實ニ基キ、且ツ右十ヶ年ノ中間ニ位セル明治十六年、成年皇族男子ノ現在員九人ナリシ實際ニ照シ、成年男子九人ニシテ、十ヶ年ニ七人ヲ増殖セルモノト假定シ、明治二十四年ノ皇族現在員ヲ基礎トシ、之ヲ推算シテ四十年ヨリ四十五年迄ノ間ニ人員倍加ノ計算ヲ見タリ。此推算ニ依リ五十年ニハ成年男子二十二名、百年ニハ四十八人トナレバ、又明治十六年ノ成年男子ハ九人ニシテ、十七年後ノ今日ハ十二人ナリ。此今日ノ狀況ヨリ推シテ二十年後ノ成年男子ヲ計算スルニ十九人ノ數ヲ得タリ。此等ノ推算ハ遺算ナキヲ保シ難ク、從テ精確ナリト斷言スル能ハザルモ、亦以テ其大體ヲ察知スルニ足ルベシ。此ニ由テ之ヲ看レバ將來皇族蕃衍ノ速度未ダ甚ダ過大ナリト謂フ可カラズ。從テ之ガ制限ヲ議スルハ稍々早計ニ失スルヤノ恐アリ。翻テ歳費ノ點ヨリ觀察スルモ、現在歳費(御賄料及特別給ヲ包含ス)ヲ受クル皇族男子ハ十二人ニシテ、其ノ金額三十一萬六千五百圓、一人平均二萬六千三百七十

五圓、之ヲ假リニ一人平均二萬五千圓ヲ受クルモノト定メ、前記二十年後ノ人員ニ乘ズルニ四十七萬五千圓(三萬圓トスレバ五十七萬圓)ニシテ、五十年ナレバ五十五萬圓(三萬圓トスレバ六十六萬圓)百年ナレバ百二十萬圓(三萬圓トスレバ百四十五萬圓)トナル計算ナリ。此計算タル成年男子ノ歳費ノミニシテ、女子ノ嫁資ヲ含マズト雖モ、嫁資ノ如キハ一時ノ支出ニ止マリ、假リニ平均二萬五千圓ヲ給セラル、モノトシ、一年平均三人出嫁スルトナスモ、前記ノ金額ニ七萬五千圓ノ増加ヲ見ルニ過ギズ。果シテ然ラバ歳費給養ノ點ニ於テ今日ヨリ其設備ヲ爲スニ於テハ將來遽ニ皇室費ニ鉅大ノ負擔ヲ來シ、之ガ支出ニ應ズル能ハザルニ至ルモノト謂フ可カラザルガ如シ。

皇族増加ノ問題ニ關シ講究ヲ缺ク可カラザルモノハ庶出ノ皇族ナリ。典範ニ於テハ已ニ庶出ヲ認メタリト雖モ、私生子ヲ認知シテ庶子ト爲スニハ相當ノ内規ヲ設ケザル可カラズ。蓋シ皇室ガ庶出ノ根本タル皇族ノ側室ニ對シ、相當ノ内規ヲ設クルハ皇位繼承ノ統屬ニ神聖純潔ナル血系ノ保存ヲ擁護スル所以ナリト謂ハザルベカラズ。幸ニ現在成年皇族ノ賢明ナル、品位ト榮譽トヲ重ンゼラル、ヨリ近年新タニ側室ヲ置カル、ノ事アルヲ聞カズト雖ドモ、豫メ之ガ制限ヲ立ルハ實ニ彝倫ト榮譽トヲ重ンゼラルベキ皇室ノ執ルベキ至當ノ道ナリト謂フコトヲ得ベシ。即チ妃ノ健康狀態ニアラザル場合ノ外ハ側室ヲ置クヲ許サル事トシ、止ムヲ得ズ之ヲ置

クトキハ其身分操行ヲ撰擇スル事トシ、若シ許可ヲ得ズシテ側室ヲ置キタル場合ノ如キハ其庶出子女ハ之ヲ認知スルヲ許サズ。況ンヤ其他ノ場合ノ如キ斷ジテ之ヲ排斥セラル、ノ方針ヲ執ルニアリ。

皇族増加ノ速度甚ダ過大ナラズ、歳費ノ供給亦敢テ皇室費ニ重大ノ負擔ヲ來スモノニアラズトスルモ、到底限リアル皇室費ニ於テ年々歳々其支出額ヲ増加スルハ蓋シ皇室財政經理上最モ困難ヲ感ズルヤ疑フベキニアラズ。果シテ然ラバ相當ノ方法ヲ設ケ、成ルベク皇室ノ煩累ヲ避ケザル可カラズ、之ヲ攝理スルノ策他ナシ、皇族ノ世數ニ應ジ、歳費給與ニ制限ヲ設クルニアリ。即チ皇位ニ近邇スル四世以上ノ皇族ニハ其ノ成年ニ達スレバ悉ク歳費ヲ給スルモノトシ、五世以下ノ皇族ニハ歳費ヲ給セズ、五世ノ皇族男子成年ニ達スレバ邸宅ヲ賜與若クハ貸與シ、且ツ基本財産トシテ五十萬乃至百萬圓ヲ給シ、其收入ヲ以テ自營シ且其統屬ヲ扶養セシメ、猶ホ不動産給與ノ必要アラバ相當ノ御料林ヲ付與セラレテ可ナリ。蓋シ殖産ノ術日進月歩ノ今日ニアリテ林業ノ確實鞏固ニシテ相當ノ收益アルヤ、最モ基本財産タルノ資質ニ恰當セルヲ以テ、基本財産ノ一部トシ之ヲ付與セラル、ハ策ノ得タルモノトス。而シテ其基本財産ノ相續及義務ニ關シテハ大凡ソ左ノ標準ニ依ルベキ乎。

一、基本財産ハ五世皇族男子成年ニ達スルトキ之ヲ賜フ。

一、基本財産ハ勅許ヲ經ルニアラザレバ分割讓與スルコトヲ得ズ。

一、基本財産ハ嫡長ノ順序ニ依リ直系男系ノ子孫之ヲ相續ス。

一、直系男系ノ子孫絶エタルトキハ嫡長ノ順序ニ依リ始メテ基本財産ヲ受ケタル者ヨリ出デタル傍系男系ノ子孫之ヲ相續ス。

一、直系傍系ノ男系子孫皆絶エタルトキハ基本財産ハ皆皇室ニ歸屬ス。此場合ニ於テ直系又ハ傍系ニ寡婦若ハ女子アルトキハ皇室ニ於テ之ヲ給養セラル、モノトス。

一、基本財産ヲ有スル皇族ハ始メテ基本財産ヲ受ケタルモノヨリ出タル直系傍系ノ男女ヲ給養スルノ義務ヲ負フモノトス。

備考

四世五世ヲ以テ歳費給養ニ制限ヲ付スルトキハ四世皇族薨去シ寡婦及未成年ノ男子未嫁ノ女子アル場合ニ於テハ寡婦ハ終身男子ハ成年マデ女子ハ出嫁マデ皇室ニ於テ之ヲ給養セザル可カラズ。

今皇族ノ世數ニ依リ歳費若クハ基本財産ヲ給スル制ヲ設ケンカ皇位ニ遠隔ノ皇族ヲ給養スルノ煩累ヲ免カル、ノミナラズ、皇族ヲシテ自立自營ノ精神ヲ涵養シ百事皇室ニ依頼シ庇護ヲ受ケントスルガ如キノ弊ヲ杜絶スベク、從テ皇族全體元氣ノ振刷ヲ見ルヲ得ン。

本議ヲ決スルニ方リ先ヅ現在皇族ノ處分ヲ定メザルベカラズ。即チ現在各宮ノ當主ハ之ヲ五世王ニ準ジ此ノ際九家ニ基本財産ヲ給スルニアリ。今其ノ給額ヲ五十萬圓乃至百萬圓ト假定スレバ平均七十五萬圓總計六百七十五萬圓ノ支出ヲ要ス。之レ現在皇室御資部財産ノ狀況ニ照スニ敢テ難事ニアラザルガ如シ。然レドモ一時ノ支出ハ財産經理上困難ナリトセバ、十年若クハ二十年ニ支出スルモ可ナリ。假リニ毎年三十萬圓ヲ別途ニ蓄積シ、五分ノ重利ニテ利殖計算スルモノトセバ十八年後ニハ裕ニ之ガ支出ニ應ズルコトヲ得ベシ。

皇族令ニ規定スベキ重要問題

立家ノ事ニ付甲案

一、皇族ハ單ニ宮ノ稱號ヲ賜フノ外、一家即チ一戸ヲ認メズ、其男子（皇太子皇太孫ヲ除ク）成年ニ至レバ嫡庶親等ノ親疎世數ノ遠近ニ從テ皇室經費ヨリ歳費ヲ賜フベキカ。

皇族ハ總テ皇室經費ヨリ俸祿ヲ受クルノ特典アルニ因リ、其特典ハ成年期ヨリ初マルモノトナスベキモノノ如シ。

未成年ノ間ハ其父タル皇族ニ於テ養育アラセラル、コトハ通義ニシテ必シモ皇族タルノ特典ト看做スベカラザルベシ。

右ノ如ク皇室ノ家憲上家ヲ認メズ、成年ニ至テ各々歳費ヲ賜ハ、隨テ當然一經濟ヲ立テ、且一宮殿ニ住スベシト雖ドモ、必竟別居ニ過ギズ。故ニ其家ノ世襲財産ヲ設クルノ必要ナキニ至ルベシ。其私産ニ至テハ皇室ノ關係スル限ニアラザルベシ。

一、家ヲ認メザレバ皇族ニハ家督相續ナク、財産相續ノミアルベシ。蓋シ家督相續ヲ要セズ、

成年ニ至レバ各自皇族ノ特典ヲ享有スベキモノト爲スベキカ。

一、皇族ノ女子ハ婚齡ニ至レバ男子同様親等ノ親疏嫡庶世數ノ遠近ニ從ヒ相當ノ歳費ヲ賜ヒ、其結婚スルニ至テモ猶歳費ヲ減少シテ賜ハリ且嫁資ヲ賜ハルベキカ。

立家ノ事ニ付乙案

一、皇族ノ男子成年ニ至レバ勅旨ヲ以テ一家即チ一戸ヲ立テシメ、其家主ニ對シテノミ嫡庶親等ノ親疏世數ノ遠近ニ從テ皇室經費ヨリ歳費ヲ賜ハリ、其子孫成年ニ至ルモ別ニ一家ヲ立ルノ勅旨ナキニ於テハ、悉皆家主ニ於テ養育扶持スベキモノトスベキカ。但シ繼嗣ノミハ成年後若干ノ歳費ヲ賜ハルベキカ。

一、右ノ如ク一家ヲ立ツベキモノトスルモ、聊カ制限ヲ加ヘ勳功アル者ノミ一家ヲ立テシメラレ、且世襲財産ヲ創設シ、其基本トシテ一時歳費ノ外ニ御資部若クハ御料部ヨリ若干ノ動産若クハ不動産ヲ賜ハルベキカ。

一、若シ世襲財産ヲ創設スルモノトスルモ宮内省ノ管理ニ一任シ、人民ニ對シ効力ヲ及ボスノ必要ナカルベキカ。

家族ヲ擧テ家主ノ給養スベキモノト爲スモ女子ノ嫁資ノミハ別ニ賜ハルベキカ。

以上乙案

一、庶出ヲ認ムルニハ勅許ヲ要スベキカ。

正婚以外ニ生レタル子女ヲ認メテ庶出ト爲スニ勅許ヲ要スルモノトシ聊カ檢束ノ力トナサントス。

一、再婚離縁ハ典範ニ明文ナキヲ以テ民法ニ於テ許スベキ場合ニ於テハ勅許ヲ請テ爲シ得ベキカ。

一、養子タルヲ禁ズルノ明文ナキニ因リ、諸王ハ華族ニ限り勅許ヲ請ヒ其養子タルコトヲ得セシムベキカ。

一、皇室ノ御私有ニ屬スル御遺産ハ御遺命ナキニ於テハ悉皆皇位繼承者世傳御料ニ併セテ相續スベキカ。

一、皇位ニ屬スル財産ヲ相續スルト御私有ニ屬スル財産ノ相續トハ二事ニシテ、同一繼承者ニ歸スベキモノノ如シト雖ドモ或ハ御私産ノ處分ハ民法ノ規定ニ從ヒ贈與遺贈トモニ其定分ニ依ルベキカ。

一、兩后ノ御遺産ハ御遺命ナキニ於テハ皇室ニ歸スベキモノトスベキカ。

皇族令ニ規定スベキ重要問題

一、一般皇族ノ私有財産ハ普通法ニ從ヒ處分シ、惟ダ其相續者ナク又遺言ナキトキハ皇室ニ歸スベキカ。

一、皇子女御直宮別居スルトキハ皇室所屬ノ宮殿ニ住シ、他ノ皇族成年後別居スルトキハ本住ノ宮殿ヲ賜フベキカ。又ハ貸與アルベキカ。但宮殿ヲ賜フトセバ其建築費ヲ賜フハ便宜ニ從フ。又貸與トセバ現今ノ賜邸モ總テ貸與ト爲スベキカ。

一、皇族ハ皇室ノ徽章菊花章ヲ用ユベキカ、維新後裏菊ヲ用ユルノ制ナルモ、親王ノ家格ヲ廢セラレタル典範ノ精神ヲ推ストキハ、皇族ハ皇室ト同徽章ヲ用ヒラルベキカ、或ハ又皇后皇太子皇太孫ヲ除クノ外ハ現今ノ裏菊ヲ用ユベキカ、旗章ハ別ニシテ既ニ海軍旗ノ如キハ其制アルヲ以テ、爰ニ所謂徽章ハ紋章ノミヲ指ス。

一、懲戒ハ輕キハ特權ノ一部ヲ停止シ、即チ參内ヲ停止シ、歳費ヲ減少シ、重キハ特權ヲ剝奪シ、即チ優遇ヲ禁止シ、痛ク俸祿ヲ減ジ、最モ重キハ謹慎ニ至ルベキカ。

懲戒トシテハ實刑ヲ要セズ、其特權ノ一部又ハ全部ヲ停禁シテ足ルベキモ、若シ犯罪ノ重キニ涉ルコトアルトキハ謹慎即チ私宅禁錮ニモ至ラザルヲ得ザルベシ。

富美宮殿下ニ上ル書

子爵 野村 靖

靖謹白

今回中學御卒業ニ至リ玉ヒシトイヘドモ、向後尙ホ撰科ノ御修學ヲ要スルハ言ヲ俟タズ。然レドモ凡ソ普通學ヲ了レバ其ノ境遇ニ應ジ、特ニ身ヲ立ツルノ方向ヲ定メ、以テ修學ノ行路ヲ撰バザレバ、空シク徒勞ニ屬スルノミナラズ、或ハ其身ヲ誤ルニ至ル。此際 殿下モ亦特ニ立身ノ方向ヲ定メ、以テ修學ノ行路ヲ撰ミ玉ハザルベカラズ。是ヲ以テ左ニ陳述シテ 御採擇ヲ仰ギ奉ル。

御立身方向ノ事

一、内親王ハ淑徳ヲ修メテ婦女子ノ模範トナラセ玉ハザルベカラズ。

蓋シ淑徳ノ意ハ孝友貞信和順敬愛仁慈禮讓高潔嫺美ナルモノヲ云フ。故ニ内親王ハ淑徳ヲ以テ天職ト爲シ玉フコト今更ニ申述ルノ必要ナシトイヘドモ、此機ニ當リテハ特ニ慎重ノ

御考慮ヲ仰ギ奉ラザルヲ得ズ。

御修學行路ヲ擇ム事

- 一、向後御修學ノ行路ハ主トシテ史書ヲ講讀シ淑女ノ言行ヲ拔抄シ玉フヲ要ス。試ニ拔抄事項ヲ別紙ニ附記ス。蓋シ拔抄ニ依リ裨益スルモノヲ舉グレバ、
- 一、國初以來ノ淑女言行ヲ拔抄セバ毎事自カラ警ムルノ念ヲ生ズ。
- 二、淑女ノ事項ニシテ 御感深キトキハ之ニ歌詠又ハ贊辭ヲ與ヘ其ノ記憶ヲ深フス。
- 三、講讀ニ依リ文學ノ力ヲ增加ス。
- 四、殿中侍女其他奉仕者優美盛徳ノ餘澤ヲ蒙ル。
- 五、拔抄積ンデ冊ヲナシ以テ之ヲ編纂シ世ニ公ケニスルヲ期スルハ自他ノ益太ダ大。

一、拔抄積ンデ冊ヲナシ以テ之ヲ編纂スルノ事業ハ尋常臣下婦女ノ能ク爲シ得ルモノニアラズ
タトヘ文學ノ才奮發ノ力アリトイヘドモ其ノ拔抄ニノミ關スルモ恐ラクハ數年ノ日子及幾多
ノ金額ヲ費ヤサン且其身已ニ嫁セバ家事ニ關ハリ日モ亦足ラズ、到底其ノ望ミヲ達スルヲ得
ベカラズ。然ルニ 内親王ノ位置ハ素ヨリ其ノ境遇ヲ異ニシ玉ヒ、 御慶事後トイヘドモ寧
ロ閑散ニ苦シミ玉フノ狀ヲ拜觀ス。然ラバ則チ 殿下天賦ノ才ヲ以テ勤勉ノ力ヲ奮ヒ、淑徳
ノ美ニ基キ文藻ノ章ヲ揮ヒ、以テ斯業ニ從事シ玉ハバ其功實ニ古今ニ秀デ、而シテ 皇室ノ

光彩ヲ發揚シ、世道人心ヲ感化スルニ足ラン。果シテ然ラバ此業タル誠ニ 殿下立身ノ方向
ニ適ヒ修學ノ行路ヲ得玉フモノト云フベシ。

一、殿下御年已ニ十八御慶事ノ期太ダ遠カラザルベシ。和氣洋洋四時は春トイヘル御家庭ヲ整
フルヲ得玉フコトハ偏ニ淑徳ヲ涵養シ玉フノミニ在リ。サレバ御慶事ノ後トイヘドモ素ヨリ
此ノ修學ノ行路ヲ進ミ玉ハザルベカラズシテ益々斯業ノ完成ヲ期シ玉ハザルベカラズ。

一、以上ノ如ク方向及行路ヲ明ラカニシ、撓マズ挫ケズ中心自守ルトキハ、則チ胸間恒ニ餘地
ヲ生ジ、腦裡自ラ爽快ヲ覺ヘ、他ノ御復習其外御遊戯ノ際自然ニ其美ヲ顯ハシ、其節ニ當ル
ヲ得玉フベシ。若シ之ニ反スルトキハ則チ心地時ニ亂レ、言行或ハ差ヒテ徳器ノ完全ヲ傷フ
ニ至ラン。懼レテ慎マザルベカラズ。靖徳薄ク才拙クシテ叨リニ重職ヲ瀆スコト誠ニ恐懼ノ
至リニ堪ヘズトイヘドモ、衷心偏ヘニ 殿下ヲ保護シ奉ラント欲スルノ微忠已ムヲ得ザルモ
ノアリ。忌諱ヲ顧リミズ、敢テ腹心ヲ吐露シ以テ 御意志ヲ伺ヒ奉ル。

明治四十一年七月

帝國議會開院式ニ付キ勅語案

朕既ニ乾綱ヲ總攬シ國家中興ノ偉業ヲ成シ茲ニ進ンデ立憲ノ大政ヲ施行ス今帝國議會ヲ召集シテ開會ノ式ヲ行フ朕ハ卿等ガ朕ト上下交泰ノ喜ヲ俱ニスルコトヲ信ズ

朕即位以來二十年間ノ經始スル所内治諸般ノ制度粗々其ノ綱領ヲ舉ゲタリ庶幾クバ皇祖皇宗在天ノ靈祐ニ倚リ卿等ト俱ニ憲法ノ美果ヲ收メ前ヲ繼ギ後ヲ啓キ規模ヲ恢弘シ將來ニ益々我が帝國ノ光輝ヲ宣揚シ我が臣民忠貞ノ懿德ト特立進爲ノ氣象トヲシテ中外ニ表明ナラシムル事ヲ得ム

朕又夙ニ宇内ノ大局ヲ察シテ盟交ヲ修メ通商ヲ廣メ國勢ヲ振張セムコトヲ期ス幸ニ締盟各國トノ和好ハ日々ニ益々厚キヲ加ヘタリ陸海ノ軍備ハ國家資力ノ堪フル所ニ從ヒ歲ヲ積ミテ完實ヲ要期セザルベカラズ

明治二十四年度ノ豫算及般法律案ノ議會ノ議ニ付スベキ者ハ朕既ニ廷臣ニ命ジテ準備スル所アラシメタリ朕ハ卿等ガ公平慎重以テ審議協贊スル所アルコトヲ期シ併セテ本年ニ於ケル議會ノ創設ニ際シ將來ニ繼グベキノ模範ヲ貽サムコトヲ望ム

朕祖宗ノ遺烈ヲ承ケ萬世一系ノ帝位ヲ繼ギ朕ガ親愛スル所ノ臣民ハ即チ朕ガ祖宗ノ惠撫慈養シタマヒシ所ノ臣民ナルヲ思ヒ其康福安寧ヲ保護シ其德性智能ヲ自由ニ發達セシメント願ヒ又宇内變遷ノ世運ニ當リ往古來今ノ大局ヲ察シ我が臣民ト俱ニ文明ニ進行スルノ必要ヲ認メ而シテ公議ノ府ヲ設ケ臣民ニ諮詢スルノ便宜ヲ廣メンコトヲ欲シ乃明治十四年十月二十四日ノ詔命ヲ履踐シ茲ニ國ノ大典ヲ宣布シ首メニ統治大權ノ大義ヲ明カニシ次ニ臣民ノ權義ヲ揭ゲ及帝國議會ノ組織權限ヲ定メ又行政司法諸部ノ制インスチユション置ヲ條舉シ各々踰ユベカラザルノ範圍ヲ劃シ以テ朕ガ俯就率由スル所ヲ示シ朕ガ後嗣及臣民及臣民ノ子孫タル者ヲシテ愆ラズ遺レズ永遠ニ循守スル所ヲ知ラシム

國ノ大權ハ朕ガ之ヲ祖宗ニ承ケテ之ヲ子孫ニ傳フル所ナリ朕及朕ガ子孫ハ將來此ノ憲法ノ條章ニ循ヒ之ヲ施行シ及施行セシメントス

朕ハ我が臣民ノ身體財產ノ安全ニ向テ國家ノ安寧及公益ノ爲ニ又ハ戰機時變ノ爲ニ必要ナル制限ヲ除クノ外ハ之ヲ貴重シ之ヲ保護シ又一般ニ臣民ノ公權及私權ノ享有ヲ完全ナラシメ其幸福ヲ増進セシメンコトヲ期望ス

帝國議會ハ二十三年ノ冬期ヲ以テ之ヲ召集シテ二十四年度豫算ヲ議スルニ適當ノ時間ヲ誤ラザ

ラシムベシ開會以後ニ制定スベキ諸般ノ法律及新ニ租稅ヲ徵シ國債ヲ起スノ類ハ朕自發議^{イニシアチフ}ノ權ニ據リ議案^{プロゼット}ヲ草セシメ之ヲ議會ノ議ニ付スベシ

將來若シ此ノ憲法ノ中或ル條章ヲ改正スルノ必要ナル事宜ヲ見ルニ至ラバ朕及朕ガ繼統ノ子孫ヨリ發議ノ權ヲ執リ起案ヲ以テ之ヲ議會ニ付シ議會ハ此ノ憲法ニ定メタル要件ニ依リ之ヲ議決スルノ外朕ガ子孫及臣民ハ敢テ容易ニ紛更ヲ試ルコトヲ得ザルベシ

朕ハ國家ノ昌榮ト臣民ノ幸福トヲ以テ朕ガ中心ノ欣榮トシ上ハ祖宗ニ對シ謹デ盟誓ヲ宣ベ下ハ朕ガ現在及將來ノ忠實ナル臣民ノ爲ニ不磨ノ寶典ヲ宣布ス自今朕ガ在廷ノ大臣ハ朕ガ爲ニ此ノ憲法ヲ施行スルノ責ニ任ズベク朕ガ現在及將來ノ臣民ハ此ノ憲法ニ對シ朕ガ繼統ノ子孫ニ對スルト同ク永遠ニ從順ノ義務ヲ負フベシ

惟フニ我が祖我が宗及我が臣民ノ祖先ハ相與ニ心ヲ叶ヘカヲ合セテ以テ我が帝國ヲ肇造シ以テ今日ニ至リ國ノ光榮ハ恒久ニ失墜アルコトナシ、此レ乃獨我が國體ノ美ナルニ由ルノミニアラズ又我が臣民ノ賦性醇厚ニシテ國ヲ愛スルニ專ニ、私ヲ棄テ公ニ殉ヒ、合同一致ノ力、以テ此ノ光輝アル史乘ノ事跡ヲ宇内ニ貽シタルナリ朕ガ臣民ハ即チ祖宗ノ忠實勇武ナル臣民ノ子孫ナルヲ回想シ朕ガ意ヲ奉體シ朕ガ事ヲ獎順シ相與ニ心ヲ一ニシ和衷叶同ノ方嚮ヲ取り文明安富ノ軌道ニ就キ相議シ相謀テ益々我が帝國ノ昌榮ヲ中外ニ宣揚シ祖宗ノ遺業ヲ無窮ノ久シキニ鞏固

隆盛ナラシムルノ希望ヲ同クシ此ノ大事ノ負擔ヲ分ツニ堪フルコトヲ信ズルナリ

帝室經濟意見書

輯 取 素 彦

我國内ノ經濟土地ニ資ラザルハナシ。土地ニ資リ遺利ナカラシム。理財何ゾ必シモ窮乏ヲ困マ
ン。方今百揆擴張年ニ月ニ駸々乎トシテ進歩ノ域ニ嚮ヒ、全國ノ面目昔日ノ比ニ非ザルモ、獨
リ經濟ノ實ニ至リテハ遺憾ナキ能ハズ。何ヲ以テ之ヲ謂フ。曰ク經濟ノ土地ト干涉ノ密ナル、
或ハ之ヲ講究ニ疎ナリト謂フ亦何ゾ不可ナラン。今試ニ其說ノ妄誕ナラザルヲ證明センニ、國
内荒蕪不毛ノ地ヲ算スレバ町歩ノ巨大ナル殆ンド勝ゲテ數フ可カラザル者アリ。大抵外國ノ富
饒亦土地ニ資リ遺利ナキニ原因スルハ人々ノ知ル所、蓋シ曾テ之ヲ人ニ聞ク、佛蘭西ノ全地面
五千三百三十四萬町歩ニシテ耕地ノ段別ハ二千六百十萬餘ニ至レリ。而シテ葡萄園牧畜地森林
ハ之ニ與カラズ。日耳曼ニ在リテハ全地面五千四百九十萬町歩ニシテ、既ニ耕地トナルモノ二
千六百六十八萬町歩ニ餘レリ。亦葡萄園牧場森林ハ之ニ與カラズ。以太利ノ如キハ全地面二千
九百八十四萬六千六百六十町歩ニシテ、耕地ノ段別一千二百二十三萬七千七百三十町餘、此外葡

萄園牧地森林合シテ一千二百十二萬四千町歩ヲ得ト云フ。然ルヲ我日本ニ在リテハ全地面三千
七百零二萬二千九百九十七町餘ニシテ、耕地ノ段歩ハ三百二十六萬六千八百六十二町餘ニ止ル。
葡萄園牧地ハ處々ニ散在スト雖、各國ニ比シテ記スルニ足ルモノ無シ。森林ノ如キハ固有ノ地
籍巨萬ノ段別アリト雖、亦各國ニ比例シテ收利ヲ語ル可カラズ蓋樹植看護其他林政ノ諸項主務
省中其方案ヲ講ズルモ、施設ノ日尙淺ク未ダ其結果ヲ見ルニ至ラズ。隨テ其段歩ノ詳亦知ル可
カラザル也。嗚呼我日本ハ古昔ヨリ農ヲ以テ國ヲ建テ瑞穂ノ稱アルニ至ル。農事ハ萬國ニ冠タ
ル者ト自カラ許セシモ、今日之ヲ回省スレバ豈ニ慨嘆ノ至ニ非ズ哉。抑モ理財ノ根源タル土地
ニシテ、耕地ノ町歩ハ僅ニ全地面十分ノ一ニ過ギズ。經濟ノ方向ニ由リテ立ン。某此ニ苦思焦
慮スル已ニ年アリ、然リト雖、理財ノ負擔、農事ノ交渉主務省ノ在ルアリ、區々何ゾ某等ガ杞
憂ヲ俟タン。獨 帝室ノ經濟ナルモノ黙々ニ忍ビザルモノアリ。方今皇運隆邇各國ノ交際盛美
ヲ競フノ日ニ當リ、切ニ恐ル經濟ノ繼續セザルトキハ隆邇ノ運モ萎靡シテ、盛美ナル者モ亦陵
夷ニ歸セントス。是汲々致々隆邇盛美ヲ維持スル方法講ズベキノ秋ニ非ズ哉。某又之ヲ人ニ聞
ク、英國政府ノ歲入ハ十億五千萬圓ニシテ、此内帝室費額トシテ二百六十八萬五千圓ヲ引去リ
露國ノ歲入ハ五億三千万圓ニシテ、此内ヨリ帝室費トシテ一千二百二十五萬圓ヲ引去ルト。我
帝室費ハ統計表ノ記スル所ニ據ルトキハ、其概略ヲ知ルニ足ル。夫レ日本歲入ノ英露額ト比ス

ベカラザルハ論ヲ俟ズト雖 帝室ノ交際贈遺各國ト相並ンデ不釣合ナカラシムルハ建國ノ急務ナレバ、之ヲ計畫スル頃刻モ遲緩ス可ケンヤ。今姑ラク身ヲ計畫主任ノ地ニ措キ之ヲ論ズルニ貿易通商其贏利ヲ收メテ 帝室費ノ幾分ヲ補ハンカ、風船蒸氣外國ニ往復シ得ルモノ幾何有ル。況ンヤ人民ノ資力巨萬ノ物品ヲ舶載シテ海外ニ航シ收利ヲ計ルヤ。是ニ於テ 帝室費ヲ補充スルハ固有ノ土地ニ就キ百計拮据遺利ヲ收拾スルノ外其策アルヲ見ザル也。此時ニ當リテ荒蕪地開拓セザル可カラズ。殖林方着手セザル可カラズ。牧畜ノ業勸誘セザル可カラズ。水産ノ禁令嚴ニセザル可カラズ。然リ而シテ政府地租改正ノ舉アリシヨリ、全國ノ耕宅地及ビ山林原野苟モ地租ノ負擔ヲ荷フベキモノハ大藏省ノ原簿ニ入り、容易ニ之ヲ左右ス可カラズ、乃チ帝室ノ所用ト雖モ原簿中ヨリ輕々分割スベカラザルハ勢ヒ當サニ然ルベシ。嘗テ某ノ見ル所ニテハ、原簿ニ記載ノ外猶許萬町歩ノ地アリ、蓋シ官民有不定地並ニ共有秣場是也。之ヲ各地方ニ令シ調査セシメバ幾萬町歩ノ額ニ上ル可シ。是 帝室費ノ支出ヲ計ル理財ノ源泉トナルベキモノニシテ、之ヲ處分スル至急ヲ要セザル可ケン哉。然リト雖モ土地ニ生ズル利ハ歲月ヲ積ムノ久キニ非レバ其効ヲ奏スル能ハズ。曩ニハ某ガ職ヲ地方ニ奉ズル日、二百町以上ノ原野調査ノ達ヲ受ケタリ。某等喜ンデ以爲ラク、該地ノ調査ハ他日 帝室費途ニ充ツルナランカ、果シテ然ラバ某平素ノ持論ニ冥合スルモノノ如ク、既ニシテ該件ハ中止ノ姿トナリ、今日ニ至ルマデ莫

然トシテ聞ク所アラズ。或ハ曰フ官民有不定地多クハ共有秣場ニシテ、輕々處分スルトキハ頑民ノ疑惑ニ涉リ、甚キハ竹槍席旗所在嘯聚頗ル地方ノ安寧ヲ害スル者アリ、政府亦遲疑シテ輒スク處分方ヲ令スル能ハザル所以ト。是亦理アリト雖、某ハ則謂フ、是乃過慮ニ出テ百年ノ事業ヲ姑息ニ消阻セラレ、策ノ得タルモノト謂フ可カラザル也。抑十七年度ノ豫算ヲ閱スルニ 帝室費宮内省經費ヲ合シテ二百二十二萬千六百五十六圓ノ額ヲ記セリ。此額ヲ以テ全國ノ歲入ニ割合スレバ 帝室ノ經費少額トセズ。萬世一系ニシテ特ニ 皇室ヲ重ズルノ國風ナレバ、其經費ノ巨額ナル何ゾ恠シムニ足ラン。其經費猶年ヲ追ヒ増加スレバ之ニ應ジテ支出ノ途モ亦深ク慮ラザル可カラズ。方今 天皇陛下内外ノ交際ヨリシテ皇城離宮皇族ノ宮第及ビ園囿庭池瓦斯ナリ電話ナリ其他祭祀恩恤社寺ノ寄附興業ノ獎勵等國庫支辨ノ名義ニ牴觸スル者毎々御手許金ヲ以テ支出アリ 帝室ノ經費昔日ノ小規模ニ非ザル推テ知ル可キ也。現今十七年度ノ豫算ダニ二百二十萬ニ超過セリ。自今以往國勢進歩ニ隨ヒ尙幾百萬圓ニ超上スル固ヨリ當然ニ之レアリ。 帝室ノ爲メニ遠大ヲ慮ル者之ヲ支辨スルノ策尤モ急務ニ非ズ哉。乃チ之ガ計ヲ爲ス者地ニ資ルノ經濟アル而已。嗚呼官民有不定地及ビ共有秣場等ヲ區處シテ 皇宮所屬ノ名稱ヲ判然タラシメ、開拓殖林牧畜其他地味ノ宜シキニ隨ヒ、作業ヲ課シ開拓地ハ年期ノ緻下ヲ許シ殖林地ハ歩分木ノ如キ制ヲ定メ、牧畜地ハ拜借料ヲ上納セシメバ、年ヲ追ヒ巨額ノ料金ヲ實收スル

必然ニ之レ有リ。其間不定地並ニ秣場ノ處分等多少頑民ノ紛議ヲ來スハ免カル可カラザルモ、全國人民誰カ皇室ヲ尊ブヲ知ラザラン。原野林丘鹵付池沼皇領ニ編入スルモ其所用ニ至リテハ民ト利ヲ同スルノ意ヲ推シ、地民ノ盡スベキ義務ヲ丁寧反覆示諭スルノ曉、誰カ感觸ヲ起サハル者アラシ哉。是頑民ノ紛議何ゾ意トスルニ足ラン。某ガ平素見込ム所全ク此ニ在リ。今也日清葛藤ヲ釋キ内閣紛錯アルヲ聞カズ、意フニ帝室ノ經濟ヲ議スル是時ヲ然トス。政府固ヨリ已ニ其全策ヲ講ジテ局外思想ノ及バザル者アル可キハ勿論ト雖、區々ノ鄙衷陳述シテ以聞ス。幸ニ採擇ヲ賜ヘ。

明治十八年五月

從四位 楫 取 素 彦

宮内卿伯爵 伊藤博文 殿

上奏ヲ經タル諸案處理手續案

第一 皇室令案ハ約ソ左ノ順序ヲ以テ

叡覽ノ後追次宮内大臣ニ御下付相成リ可然ト認ム。

- 一、皇統譜令
- 二、華族令
- 三、皇族身位令
- 四、皇室親族令
- 五、皇室財産令
- 六、皇室裁判令
- 七、皇室後見令
- 八、皇室遺言令
- 九、皇室服喪令
- 十、皇室會計令

上奏ヲ經タル諸案處理手續案

- 十一、位階令
- 十二、登極令
- 十三、立儲令
- 十四、攝政令
- 十五、皇室成年式令
- 十六、皇族就學令
- 十七、皇室喪儀令
- 十八、皇室祭祀令
- 十九、皇族歲費令
- 二十、皇室陵墓令

第二 前項ニ依リ御下付アリタルトキハ宮内大臣ハ意見ヲ附シ更メテ御裁可ヲ奏請スベキ儀ト認ム。但シ國務大臣ノ職務ニ關連スル皇室令案ハ關係國務大臣ト俱ニ上奏スベキハ當然ナリ。

第三 左記ノ皇室令案ハ國務大臣ノ職務ニ關連セザルモノナルニ依リ、御裁可ノ後ハ宮内大臣ノ副署ノミヲ以テ發布相成ルベキ儀ト認ム。

一、皇族會議令

- 二、皇統譜令
- 三、華族令
- 四、皇族後見令
- 五、皇室遺言令
- 六、皇室成年式令
- 七、皇族就學令
- 八、皇室祭祀令
- 九、皇族歲費令
- 十、皇室陵墓令
- 十一、皇室會計令

第四 左記ノ皇室令案ハ國務大臣ノ職務ニ關連スルモノナルニ依リ、御裁可ノ後ハ宮内大臣及關係國務大臣ノ副署ヲ以テ發布相成ルベキ儀ト認ム。

- 一、皇族身位令
- 二、皇室親族令
- 三、皇室財産令

上奏ヲ經タル諸案處理手續案

四、皇室裁判令

五、皇室服喪令

六、位階令

七、登極令

八、立儲令

九、攝政令

十、皇室喪儀令

第五 皇室令案ヲ御裁可アルニ先チ、皇族會議ニ御諮詢アルト否トハ固ヨリ一ニ

聖斷ニ依ルト雖、御諮詢アルモノトセバ左記ノ諸案ナルベキヲ認ム。蓋此ノ諸案ハ皇族ノ身分財産及教育ニ直接ノ關係アルヲ以テナリ。

一、皇族身位令

二、皇室親族令

三、皇室財産令

四、皇族後見令

五、皇室遺言令

六、皇族就學令

第六 皇室令案ヲ御裁可アルニ先チ樞密顧問ニ御諮詢アルト否トハ前項ト同ク一ニ

聖斷ニ依ルハ言ヲ俟タズト雖、御諮詢アルモノトセバ左記ノ諸案ナルベキヲ認ム。蓋此ノ諸案ハ或ハ事ノ重大ナルアリ或ハ國務大臣ノ職務ニ關連スルモノアルヲ以テナリ。

一、前項ニ掲ゲタル諸皇室令

二、皇統譜令

三、登極令

四、立儲令

五、攝政令

六、皇室成年式令

七、皇室喪儀令

八、皇室祭祀令

九、皇室服喪令

十、皇室陵墓令

第七 請願令案(勅令案)及華族世襲財産法案(法律案)ハ

上奏ヲ經タル諸案處理手續案

叡覽ノ後宮内大臣ニ御下付ノ上同大臣ノ意見ヲ徵セラレ更ニ政府へ御下付相成ルベキ儀ト認ム。

第八 國葬令案（勅令案）中ニハ皇室喪儀令案ト關連スル事項アルヲ以テ皇室喪儀令發布ノ後政府へ御下付相成ルベキ儀ト認ム。

第九 皇室親族令又ハ皇族身位令ノ規定ニ依リ一家ヲ創立シタル場合ニ關スル法律案ハ皇室親族令案及皇族身位令案ト關連スルモノナルヲ以テ、此ノ兩令發布ノ後宮内大臣ニ御下付同大臣ノ意見ヲ徵セラレ更ニ政府へ御下付相成ルベキ儀ト認ム。

第十 皇室令施行規則案ハ本令案ヲ宮内大臣ニ御下付ト同時ニ御下付アリテ可然儀ト認ム。

立儲令上奏文案

臣博文帝室制度調査ノ

大命ヲ恪ミ伏シテ惟ルニ皇儲立坊ノ儀ハ皇室典範ノ精神蓋古來ノ典禮ヲ酌存シ此ニ由テ以テ天序ノ崇嚴ヲ豐ニシ國棟ノ瞻仰ヲ盛ニスルニ在リ茲ニ此ノ精神ニ基ツキ立儲令ヲ査定シ附スルニ其ノ儀注ヲ以テス乃謹デ上奏シ恭シク
聖鑒ヲ仰グ

明治三十九年六月 日

帝室制度調査局總裁侯爵（姓名自署）

皇族就學令上奏文案

臣博文帝室制度調査ノ

大命ヲ恪ミ伏シテ惟ルニ幼年皇族教育ノ制度ハ風教ノ繫ル所至テ大ナリ故ニ其ノ學齡就學ノ所及學齡者ノ保護者等ヲ條規ニ昭著シ臣民ヲシテ奉ジテ儀表トナサシメ皇室即チ風化ノ根源タルヲ明徴ニスルハ亦以テ義務教育ノ精神ヲ恢張スルノ道タルコトヲ信ズ因テ皇族就學令ヲ査定ス乃謹デ上奏シ恭シク
聖鑒ヲ仰グ

明治三十九年六月 日

帝室制度調査局總裁侯爵（姓名自署）

上奏ヲ經タル諸案處理手續案

再查皇室服喪令上奏文案

臣博文帝室制度調査ノ

大命ヲ恪ミ伏シテ惟ルニ皇室服喪令ハ往年臣ガ再ビ總裁タルノ
 鈎旨ヲ奉ズルニ先チ局議ノ決スル所ヲ以テ上奏シ、既ニ樞府ノ諮詢ヲ經タリ。惟ニ皇室諸令調
 査ノ進捗ニ因リ、彼此ヲ對照セバ或ハ更ニ査校ヲ加フルノ必要アラムコトヲ慮リ、前ニ原案
 ノ御下付ヲ奏請シ特ニ
 允許ヲ賜フ爾來反覆推較スルニ果シテ多少ノ修正ヲ施スニ已ムコト能ハザルヲ發見シタリ。今
 之ヲ下ニ備陳ス。

第一 原案ハ臣籍ニ在ル親族ノ爲ニスル服喪ノコトヲ別ノ規程ニ讓リタリ。然レドモ皇室
 親族令既ニ六親等内ノ血族及三親等内ノ姻族ヲ以テ親族ノ範圍トシ其ノ臣籍ニ在ル者ト
 否トニ於テ逕庭スル所ナキヲ以テ、此ノ特別ノ規定ヲ設クルハ彼此ノ權衡ヲ得ザルコト。
 第二 原案ニハ心喪ノ規定アリ。然レドモ心喪ハ純ラ衷情ニ根シ、道義ニ顧ミル繩墨ヲ以
 テ之ヲ律スベキニ非ズ。且既ニ外部ニ表章スルモノニ非ザルトキハ之ガ規準ヲ設クルモ
 亦竟ニ空文タルノミ。殊ニ其ノ期日ヲ限域スルガ如キハ所謂心喪ノ本義ニ協ハザルコト。

第三 原案ハ大喪ノ場合ノ外臣民服喪ノ條規ヲ見ズ。然レドモ皇太子皇太孫皇太
 孫妃薨去ノ場合及親王親王妃内親王妃女王國葬ノ場合ニ在テハ臣民喪ヲ服スルヲ至當
 ト認メタリ。但シ國葬ニ關スル規定ハ皇室喪儀令ニ關連セル勅令案トシテ別ニ之ヲ査定
 シタルヲ以テ本令ニ於テハ唯々之ト鈎衡ヲ保ツノ必要アルコト。
 以上ノ理由ニ基ヅキ更ニ條文ヲ釐修シ茲ニ之ヲ査定シタルハ精益求精ヲ加ヘムコトヲ期スル
 ニ外ナラズ。但シ原案ニ附シタル喪服規程ハ事纖微ニ涉リ今尙未ダ案ヲ具スルニ及バズ、日
 ヲ改メテ更ニ
 叡覽ニ供スベキナリ。乃謹デ上奏シ恭シク
 聖裁ヲ仰グ

明治三十九年六月 日

帝室制度調査局總裁侯爵 (姓名自署)

皇室喪儀令及國葬令上奏文案

臣博文帝室制度調査ノ

大命ヲ恪ミ伏シテ惟ルニ皇室送終ノ禮ハ服喪ノ制ト相待テ一定ノ規準ニ依リ其ノ儀文ヲ詳定スルコトヲ要ス。而シテ大喪儀及皇嗣皇嗣妃ノ喪儀ハ亦宜ク國家ノ凶禮トシテ國資ヲ以テ其ノ一切斂葬ノ需ニ供スベシ。其ノ他ノ皇族及臣僚ニシテ國家ニ偉勳アル者ニ特ニ國葬ヲ賜フノ制モ此ヨリ前キ唯々之ヲ事例ニ徵見スルノミ。其ノ實未ダ一定ノ條規ノ據テ以テ準的トナスベキモノアラズ。是レ茲ニ皇室喪儀令ヲ査定スルト同時ニ又勅令案トシテ國葬令ヲ具審シタル所以ナリ。但シ儀喪令ニ附隨スベキ儀注ハ洪纖悉ク舉ゲザルベカラザルヲ以テ、刻下尙調査中ニ屬ス。附式ノ未ダ案ヲ具スルニ及バザルニ先チ、謹デ本令二案ヲ以テ上奏シ乙夜ノ覽ニ供スルモノハ皇室服喪ノ再查ト彼此關連シ未ダ其ノ一隅ヲ以テ他ノ三隅ヲ反スルコト能ハザルガ故ナリ、恭シク聖鑒ヲ賜ハムコトヲ請フ

明治三十九年六月 日

帝室制度調査局總裁侯爵 (姓名自署)

位階令上奏文案

臣博文帝室制度調査ノ

大命ヲ恪ミ伏シテ惟ルニ位階ハ至尊榮譽ノ源泉ニ發シ國家ニ勳功アリ、又ハ表彰スベキ效績アル者其ノ他有爵者官者等ニ敍賜セラルベキ優典ニシテ之ヲ史冊ニ徵スレバ其ノ由テ來ル所極メテ遠シ。然ルニ現行敍位條例ハ簡疏ニシテ莊重ナラズ。且十數年前ノ規定ナルヲ以テ、罅漏從テ多ク未ダ以テ其ノ榮典タルノ義ヲ明徵ニスルニ足ラザルヲ憾トス。臣因テ局僚ニ命ジ勅令案トシテ位階令ヲ起草セシメ、慎重審議茲ニ其ノ成案ヲ具スルコトヲ得タリ。本令ハ固ヨリ皇室典範ニ基ヅク準則ニ非ズト雖、本局ノ進デ之ヲ倡議シタルハ敍位ハ凡テ宮内大臣之ヲ奉行スルモノナルヲ以テナリ。乃謹デ上奏シ恭シク聖明ノ採拜ヲ仰グ

上奏ヲ經タル諸案處理手續案

明治三十九年六月 日

帝室制度調査局總裁侯爵 (姓名自署)

華族世襲財産法改正案外二則上奏文案

一、華族世襲財産法改正案(法律案)

一、華族令施行規則(宮内省令案)

一、華族世襲財産法施行規則(宮内省令案)

右案ヲ具シ謹デ上奏ス蓋華族令改正案ニ付テハ臣前ニ

諮詢ヲ辱クシ局議ヲ以テ奉答スル所アリ。因テ惟フニ華族世襲財産法モ亦憲法制定以前ノ法令ニ係リ日進ノ時會ト相伴フコト能ハザルヲ以テ、之ヲ改正シテ他ノ法規ト鈎衡セシムルノ必要アルハ固ヨリ論ヲ待タズ。華族令及華族世襲財産法ノ施行規則ニ至テハ即チ此ノ勅令及法律ノ運用ヲ完全ナラシムルニ資スル所以ナリ。其ノ宮内省令案トシテ査定シタル諸則ニ各條ノ下復タ疏注ヲ加ヘザルハ概ネ瑣微ノ手續ニシテ説明ヲ施スノ必要ナキニ由ル。伏シテ

聖鑒ヲ賜ハムコトヲ請フ。

明治三十九年六月 日

帝室制度調査局總裁侯爵 (姓名自署)

皇統譜令施行内則上奏文案

一、皇統譜令施行規則(宮内省令案)

右案ヲ具シ謹デ上奏ス。願フニ皇統譜ハ大統及宗室ニ關スル至重ノ典籍タルヲ以テ皇統譜令ヲ施行スルノ細規ハ最縝密ヲ致サザルベカラザルモノアリ。伏シテ聖鑒ヲ賜ハムコトヲ請フ

明治三十九年六月 日

帝室制度調査局總裁侯爵 (姓名自署)

上奏ヲ經タル諸案處理手續案

一、公式令ノコト

現行ノ公文式ハ明治十九年ノ制定ニ係レリ。爾後帝國憲法及皇室典範制定セラレ、請般ノ制度革新アリタルニ拘ラズ、公文式ニ至テハ之ニ件フノ改正アリタルコトナシ。即チ(一)法律ト命令トニ依リ施行ノ猶豫期間ニ均衡ヲ失スルモノアリ(二)詔勅ノ方式ナシ(三)帝國憲法皇室典範改正ノ場合ニ於ケル公式ナシ(四)國際條約歲計豫算ノ如キ重要公文ニ付テモ公式ナシ(五)爵記官記位記勳記等ニ關シテモ率由スベキ常軌ヲ示サズ(六)皇室典範ニ基ヅキ發スル諸規則ハ官廳及人民ニ對シテモ有効ノ公文タラシメザルベカラザルニ、公文式ハ之ニ關シ毫モ式様ヲ提明セザルナリ。刻下皇室典範ヲ増補シ、及典範ニ基ヅク諸規則ヲ制定セラレムトスルニ際シ、公式令ノ制定ハ最モ之ヲ急ニセザルベカラザルノ必要アリ。政府ニ於テ速カニ審議ヲ盡サレンコトヲ望ム。

二、華族令改正案ノコト

現行ノ華族令ハ明治十七年宮内省達ヲ以テ發布セラレタルモノナリト雖、同令ハ其ノ實質ニ於テ授爵ノ榮典ニ關スルコトヲ規定シタルモノナルヲ以テ、事務ハ宮内省ニ於テ主管スルニ拘ラズ、位階令ト同ク勅令ヲ以テ公布セラルベキモノナリ。今ヤ該令ヲ改正スルノ必要アルニ際シ、前記公式令ニシテ定マラズムハ勅令ヲ以テ之ヲ改正スルコト能ハズ。

三、請願令ノコト

請願令制定ノコトハ從來屢々衆議院ノ建議シタル所ナルノミナラズ、帝國憲法又實ニ其ノ規程ヲ別ニ定ムルコトヲ明示セリ。而シテ其ノ規程ハ天皇ニ對スル請願ノ事ヲ包含スベキノ故ヲ以テ、帝室制度調査局ニ於テ調査ノ上上奏シタリ。今該案ハ已ニ政府ニ下付セラレタリト聞ク、速ニ決定アラムコトヲ望ム。

四、皇室令ノコト

公式令ニシテ提案ノ如ク決定セムカ、帝室制度調査局ニ於テ既ニ調査ヲ終ヘ、又現ニ調査シツツアル皇室令中内閣總理大臣ノ副署ヲ要スベキモノ少カラズ。是等ハ公式令ニ關シ政府ノ議定ヲ待テ更ニ協定スルコトヲ要スベシ。

報告覺書

茲ニ審議ヲ結了シタル議案左ノ如シ

- 一、皇族身位令
- 二、皇室親族令及附式
- 三、成年式令及附式
- 四、皇室財産令
- 五、皇族後見令
- 六、皇室遺言令

以上六種ノ法案ト曩ニ上奏ヲ經タル皇室典範増補及皇族會議令トノ關係ヲ示セバ左ノ如シ。

(一) 皇室典範増補トノ關係

皇室典範増補ハ既ニ王ノ華族ニ列シ、又ハ華族ノ家督相續人トナルノ途ヲ啓キ、又其ノ第七條及第八條ニ於テ皇族ノ身位其ノ他ノ權利義務ニ關シテハ皇室典範ニ基テキ發セラルル規則

ニ依リテ定マルベキモノニシテ、普通ノ法令ハ原則トシテ皇族ニ適用ナキコトヲ明ニシ、併セテ皇族ト人民トニ涉ル事項ニシテ各々適用スベキ法規ヲ異ニスルトキハ、皇室典範ニ基ツキ發セラレタル規則ヲ適用スベキコトヲ定メタリ。此ノ六案中皇族ニ關スルモノハ或ハ典範増補ノ明文ニ依リテ調節ヲ備ヘ、或ハ其ノ趣旨ニ基ツキテ規則ヲ定ム。要スルニ準據ヲ此ノ兩條ニ取ラザルハナキナリ。

(二) 皇族會議令トノ關係

以上六條ノ皇室典範増補ニ基ツクモノナルコト上述ノ如シ。而シテ典範増補ハ必皇族會議ノ諮詢ニ須ツモノナルガ故ニ、一切ノ確定ヲ見ルハ總テ皇族會議發布ノ後ナラザルベカラズ。且六案中皇族會議ニ諮詢シタル後勅裁セラルベキモノトシタル事項多ク、加之普通法ヲ皇族ノ上ニ準用スベキモノトシタルモノ亦少カラザルヲ以テ、其ノ關繫重キモノハ發布ニ先チ自ラ皇族會議ニ諮詢セラル、ノ要アルベク、已ニ皇族會議ニ諮詢セラル、ニ於テハ從テ樞府諮詢ノ必要ヲ生ズルモノモアルベキナリ。

右六案ノ大要左ノ如シ。

- 一、皇族身位令ハ皇族身位ニ關スル重要ノ事項ヲ規定シタルモノニシテ分チテ六章トス。

第一章 班位

第二章 敍勳任官

第三章 失踪

第四章 降下

第五章 懲戒

第六章 雜則

班位ハ皇族ノ序列ヲ昭ニシ、敍勳任官ハ皇族ノ身位ニ相當スル優典ヲ示ス。失踪ハ生死不明ノトキニ於ケルノ措置ヲ定メ、降下懲戒ハ典範及典範増補ノ明條ヲ疏明スルノ詳節ナリ。雜則ハ身位ニ關スル重要ノ事項ニシテ前各章ニ繫クルコト能ハザルモノヲ匯收シタリ。

二、皇室親族令ハ皇室ノ親族關係ヲ條定セルモノニシテ分チテ五章トシ婚嫁及誕生ニ關スル儀式ヲ附ス。

第一章 總則

第二章 婚嫁

第三章 親子

第四章 親權

〔第一節〕大婚
〔第二節〕皇族ノ婚嫁

〔第一節〕皇子
〔第二節〕皇族ノ子

第五章 親族會

總則ハ親族ノ範圍ヲ定メ、婚嫁ハ現行皇室婚嫁令ヲ再查シ大婚及皇族ノ婚嫁ニ關スル事項ヲ規定シ、親子モ亦現行皇室誕生令ヲ再查シ主トシテ皇子及皇族ノ子ノ誕生ニ關スル事項ヲ規定ス。親權ハ皇室典範第三十七條ノ趣旨ニ基ヅキ未成年ノ子ニ對スル親ノ權義ヲ定メ、親族會ハ親權ヲ行フ者ナキ未成年者其ノ他無能力者ノ爲必要ナル監督機關ノコトヲ定ム。
三、皇室成年式令ハ元服ノ古禮ニ相當スル成年式ノ規定ニシテ分チテ二章トシ其ノ儀式ヲ附ス。

第一章 天皇成年式

第二章 皇族成年式

成年式ハ應ニ親族令中婚嫁誕生ノ諸式ト相對スベキモノナリ。特ニ親族令中ニ編入スルコト能ハザルニ由リ之ヲ別行ス。

四、皇室財産令ハ御料及皇族財産ニ屬スル財産管理其ノ他法律關係ヲ規定シタルモノニシテ章節ヲ分ツ左ノ如シ。

第一章 御料

〔第一節〕總則
〔第二節〕世傳御料
〔第三節〕普通御料

第二章	皇族財產	第一節	總則
		第二節	治產能力
		第三節	遺留財產
		第四節	遺產相續

第三章 皇室經濟會議

五、皇族後見令ハ皇室典範ノ成文ニ基ツキ後見ノ細規ヲ定メタルモノニシテ、凡ソ十二條ヨリ成リ章節ヲ分タズ。

六、皇室遺言令ハ遺命及皇族ノ遺言ニ關スル條規ニシテ要ハ其ノ規型ヲ嚴ニシ其ノ効力ヲ固カラシムルニ在リ分チテ二章トス。

第一章 遺命

第二章 皇族ノ遺言

備考

親族令及成年式令ニ附隨スルノ儀式ハ主トシテ古例ニ憲リ本朝宮掖ノ典故ヲ酌存シテ之ヲ定メタリト雖、朝廷ノ大禮ハ詔盟列國トノ交際ニ關スルモノ尠カラザルニ由リ、此ヲ以テ果シテ時宜ニ適シタルモノトスベキヤ否ハ頗ル考量ヲ要ス。故ニ此ノ點ニ關シテハ更ニ閣下ノ定奪ヲ願ハシ、御指諭ニ因リテ重テ審議ヲ竭クサムコトヲ期ス。

右及報告候也

明治三十八年四月二十五日

帝室制度調査局副總裁男爵 伊 東 巳 代 治

帝室制度調査局總裁侯爵 伊 藤 博文 殿

御詔勅草按

朕嚮ニ憲法ノ條章ニ由リ信教ノ自由ヲ保明セリ汝有衆各々自ラ其信依スル所ヲ擇ミ之ニ安ズルヲ得ト共ニ又能ク他ノ言依スル所ヲ尊重シ互ニ相犯スナキヲ要ス
此ノ次不幸ニシテ露國ト釁端ヲ開ケリ朕ガ平素ノ志ニ違ヒ戰ヲ宣スルニ至リタルノ事由ハ朕既ニ業ニ之ヲ示セリ。事毫モ宗教ト相關セズ朕ガ信教ニ對スル一視同仁ハ更ニ平時ニ偷ルコトアルナシ汝有衆能ク朕ガ意ヲ體シ信仰歸依ノ如何ヲ問ハズ互ニ相親ミ相愛シ協力同心以テ朕ガ意ヲ空フスルナキヲ期セヨ。

調査著手ノ方針

一

- 一、本局調査事務ノ要領ハ皇室一般ノ制度ニ關シ皇室典範ノ施行ニ便スルニ在ルヲ以テ先ヅ左ノ諸項ヲ查察スルヲ要ス。
 - 一、大則ハ皇室典範ニ定メラル、モ其方式、手續、順序等ニシテ未ダ規程ナキモノ。
 - 二、皇室典範ニ明條ナクシテ將來ノ爲メ規程ヲ要スル庶般ノ疑義ニ對スル攻究。
 - 三、政府ト宮内省トノ關係、就中宮内省ナル者ノ國法上ノ關係、内閣總理大臣ト宮内大臣ノ奏宣權限及式部職ト外務省トノ關係。
 - 四、皇室典範ト普通法典及其他行政法令トノ關係。
 - 五、華族令ト普通法トノ關係。
 - 六、帝室財産ニ關スル一切ノ事項。
 - 七、皇室ニ對スル請願ノ規程。
 - 八、御陵制度。
 - 九、恩賞、特赦、大赦ニ關スル事項。

十、狩獵ニ關スル規程。

一、調査局從來ノ成案ニシテ既ニ上奏中ニ係ルモノハ現ニ副總裁ノ手許ニ於テ再調査中ニ屬シ増訂修補ヲ要スルモノアリ。尙ホ現任主査ト協議ノ未修正案ヲ具ヘテ更ニ總裁ノ裁ヲ乞フベキコト。

一、即位令、大祀令、立儲令等ハ已ニ成案アルモ成年式若クハ攝政復辟ノ手續等ノ如キハ未ダ調査成ラザルヲ以テ其調査ヲ現任主査ニ命ジタキコト。

一、前項ノ成案中未ダ附式ノ定マラザルモノハ本則ト共ニ完成スルノ要アレバ、其調査ヲ主査ニ命ジタリ。案成ルノ後本則ノ修正案ト共ニ更ニ總裁ノ裁ヲ乞フベキコト。

一、既ニ成案アリテ未ダ上奏セザルモノハ一應再調査ヲ遂ゲ、更ニ總裁ノ裁ヲ乞ヒ上奏スベキコト。

一、皇族相互ノ民刑訴訟及懲戒手續ニ關スル事項ヲ梅及岡野ノ兩法學博士ヲシテ調査立案セシムベキコト。

一、總裁ノ指揮ニ依リ各御用掛ニ主査ヲ命ジ、方針及範圍ヲ示定シテ調査事項ヲ分掌セシムベキコト。

一、調査局ニ常勤セシメ又ハ自宅調査ヲ命ズル等事務進捗ノ便宜ニ依リ時々總裁ノ指揮ヲ請ヒ各主査ニ命令シタキコト。

一、各主査擔任ノ事務中彼此交渉ヲ要シ或ハ調査事項ノ性質互ニ相牽連スルモノアリテ會同審議ヲ要スル場合ニハ、臨時必要ノ御用掛ヲ調査局ニ召集シテ會議ヲ開キ、其結果ハ時々總裁ニ報告スベキコト。

但高等官ヨリ兼任スル御用掛中本官ノ事務都合ニ依リ便宜夜間開議スルコトアルベシ。

一、主査擔任ノ事務ハ副總裁督勵ノ責ニ任ジ成案ヲ得ル毎ニ總裁ノ覽ニ供スベキコト。

一、成案ヲ得テ總裁ノ閱覽ニ供シタル後或ハ御用掛ノ總員ヲ會同審議セシメ或ハ御用掛中特ニ人員ヲ限リ開議スル等ニ總裁ノ指揮ヲ仰グベキコト。

一、現在ノ御用掛以下局員ノ淘汰スベキモノニ付テハ先日內諭ノ旨ニ依リ竊カニ從來ノ成績ヲ查察シタル結果高見ニ從ヒ決行スベキ爲ニ更ニ案ヲ具ヘテ指揮ヲ仰グベキコト。

一、國法學及行政學上ノ智識ヲ要スル爲ニ、新ニ法學博士奧田義人同有賀長雄ノ兩人ニ御用掛ヲ命ゼラレタキコト。

一、各國ノ事例參考ノ必要ヨリ、比較法制ニ精通シ現ニ大學ニ在リテ其學科ノ教授ヲ爲ス者一名ヲ簡拔シテ新ニ御用掛ニ加ヘラレタキコト。

但適當ノ人物心當リアリ。

一、沿革及參照ノ必要ヨリ我古制ニ精通スル者一名ヲ簡拔シテ新ニ御用掛ニ加ヘラレタキコト

但適當ノ人物心當リアリ。

一、本局ハ樞密院事務局ノ一半ヲ以テ之ニ充テラレ、平常主査ノ會同ニハ差障ナカルベキモ御用掛ノ總員ヲ會同セシムル場合ニハ到底狹隘ニシテ其用ニ堪ヘザレバ、總會ノ場合ニ限リ總官舎ノ別棟ノ一館ヲ之ニ供用セラレ、總裁ノ臨席ニ便ニセラレタキコト。

一、從來宮内省ヨリ別途支出ヲ以テ總裁ニハ五千圓、副總裁ニハ三千圓ノ手當ヲ毎年兩度ニ分賜セラレタルモ、總裁副總裁ニ限リ一切ノ賜金ヲ拜辭シタキコト。

一、從來御用掛ノ手當ハ毎年二回ニ分チ支給セラレタルモ、愈々調査ノ進行ヲ急グニ隨ヒ服務繁忙ヲ極ムベキニ因リ、僅少ノ金額ヲ二季ニ支給スル如キハ適材ヲ使用スルノ道ニアラズ、宜ク斟酌ヲ加ヘ大ニ獎勵ノ實ヲ舉グルノ必要ヲ認ムルヲ以テ、更メテ月俸制トシ、凡ソ一個月三百圓以下五十圓以上ノ範圍ニ於テ執務ノ繁閑ニ應ジ總裁ノ指揮ヲ乞フテ支給シ、有給職員トシテ十分勉勵セシメタキコト。

二、御用掛ノ手當ヲ前項ノ如ク改ムルニ依リ、從來宮内省ヨリ別途支出シタル手當金ハ總裁及副總裁ノ分ヲ除キ、悉ク本局ノ經費中ニ編入シ、人員ノ増減ニ拘ラズ此範圍内ニ於テ支給スル爲ニ宮内省ト協議シタキコト。

一、囑托員中其囑托事項ニ付一時全部ニ對スル報酬ヲ與フルモノト、又時々分與スルモノトハ一ニ總裁ノ指揮ヲ請フベキコト。

一、本局ノ會計出納ハ副總裁專ラ監督ノ責ニ任ジ帳簿及證票ノ整頓、物品書籍ノ保管等主任ヲ定メ過誤失錯ナカラシムベキコト。

一、本局ノ經費ハ總裁ノ專權ニ屬シ、宮内省ノ干涉ヲ受ケズト雖モ、會計出納ハ最モ嚴重ニシ、毎月主任ノ報告ヲ徵シ、定期宮内省ニ報告スルコト。

調査著手ノ方針 二

第一 一

帝國憲法ノ表面ニハ天皇ト臣民トニ關シテノミ明條ヲ存スルモノ、皇族ノ地位ニ涉リテハ何等規定スル所アラズ。故ニ國家ノ法令ハ人臣ノ列ニ居ル皇族ニモ適用セラルベキガ如クナルニ拘ラズ、皇室典範ニ於テ皇族ハ至尊大權ノ餘光ノ下ニ一種特殊ノ地位ヲ占メ、天皇ガ皇族ノ家長トシテ勅定セラル、所ノ典例ニ依ルヲ常則トシ、國家ノ法令ニ依ルヲ例外トシタリ。今皇室典範ヲ以テ帝國憲法ト共ニ國家ノ根本法トシテ對等ノ効力ヲ有スルモノトシ、特ニ明文ヲ設クル場合ノ外ハ、皇族ニ國家ノ法令ヲ適用セザルノ主義ヲ取ル事。

第一 一一

皇室典範ハ曾テ公式ヲ以テ發布セラレザルモ、國家ノ機關ヲシテ公然認知セシメザレバ其ノ必ズ適用セラレンコトヲ期シ難キ場合アリ（土地收用法ヲ世傳御料ノ土地ニ適用セズ、又勅許ナ

クシテ皇族ヲ勾引召喚セザル等ノ例) 既ニ憲法ノ明條ニ皇室典範ヲ認メタル以上ハ、憲法發布ノ當時有司ニ示サレタル手續ヲ以テ發布セラレタルモノト認定スベク、又將來皇室典範ヲ改正増補スルノ必要ヲ生ズル場合ニ於テハ、行政司法ノ權域ニ牽連スルモノ益々多カルベク、其ノ都度別ニ法律命令ヲ以テ國務トノ關係ヲ規定スルハ頗ル煩雜ニ陥ルベキヲ以テ、金匱無缺ノ皇室ノ地位ヲ明ニシテ、其ノ典例ハ當然國家ニ對シ有効ナルノ主義ヲ取ルベキ事。

第三

皇室ノ事ヲ以テ天皇ノ私事ナリトシ、皇室典範ハ皇室自ラ其ノ家法ヲ條定スルモノナリト斷定シタルノ說ハ我日本帝國ノ歴史ト相容レザルノミナラズ、現ニ國務大臣ハ皇室ニ對シ一定ノ義務ヲ負ヒ、又將ニ制定セラレントスル宮中ノ諸例規ニ於テ、內閣總理大臣ニ事ヲ命令スル場合多シ。故ニ皇室ハ國家ノ要素タルベキ固有ノ關係ヲ明徵ニシ、以テ不易ノ規準タルベキコトヲ確定スル事。

第四

皇室ノ例規ニシテ行政官廳ニ事ヲ命令スルモノアリ、例ヘバ大喪ノ場合ニ日數ヲ限リテ休務セシムルガ如シ。然レドモ國家ノ官廳ハ國家以外ノ命令ニ從フノ理由ナシ。故ニ皇室ガ國家ノ要素タルベキ主義ヲ確定スベク、唯々責任ノ關係ヨリ內廷外廷ノ別ヲ立ツル事。

第五

宮内大臣ハ國家ノ各省大臣中ニ列セズ而シテ地方官ハ官制ニ依リ命ヲ各省大臣ニ受クルモ之ヲ宮内大臣ニ受クルノ明文ナシ然ルニ宮内省達ヲ以テ定メタル現行宮内省官制ニハ宮内大臣モ主任ノ事務ニ付警視總監、北海道廳長官、府縣知事ニ示命スルノ明文アリ故ニ此ノ關係ヨリスルモ皇室ハ國家ノ要素ニシテ宮内省モ亦國家官廳ノ一タルベキ主義ヲ取ル事

第六

皇室ノ諸例規ニシテ臣民ニ服從ノ義務ヲ負ハシムルモノアリ。例ヘバ大祀令草案第五條ニ「宮内大臣ハ地方長官ニ其ノ齋田ニ充テタル所有者ニ對シ其ノ年ノ新穀ヲ供納セシムルノ手續ヲ命ズ」トアルガ如シ。此ノ如キ場合ニ於テ實際上ヨリ觀察スレバ、天性忠厚ナル我國臣民ハ喜ンデ其ノ命ニ應ズベシト雖、法理上ヨリスレバ是レ尙ホ臣民ノ所有權ヲ制限スルモノニ非ズト云フコトナシ。故ニ此レ等ノ關係ヨリ論ズルモ、宮中ノ典例ハ直ニ臣民ニ向テモ有効ナルベキ主

義ヲ確定スベキ事。

第七

現行宮内省官制ニ「宮内大臣ハ例規ニ依リ宮儀祭典、行幸、行啓、其他主任ニ屬スル事務ニ關シ臣民ニ命令告示スルコトヲ得」トアリ。假令制裁ナキノ命令タリトモ臣民ニ命令スルハ國家ノ事ナラザルベカラズ。仍テ宮内省モ國家ノ官廳タル地位ヲ明ニスルノ要アル事。

第八

皇室ノ事務ニ關シテ國務ト牽連スルモノニ對スル責任關係整理方法ニ就テハ、便宜甲乙丙法ノ手段ヲ取ル事。

(甲) 皇室ノ事情ニシテ國務ニ對スル關係ノ至重至大ナルモノハ皇室典範ノ改正増補ト爲シ帝國憲法ト對等ノ効力ヲ有シテ法律命令ヲ左右スルノ効力ヲ有セシムルノ方法ヲ取ルコト但シ皇室典範既定ノ原則ハ必要止ムヲ得ザル場合ノ外、成ルベク更改ヲ避ケ、務メテ之ヲ主持シテ以テ典範ノ根基ヲ固クスルコト。

(乙) 皇室ノ事務ニシテ國務ニ對スル關係稍々重要ナルモノハ法律命令ヲ以テ之ヲ規定シ、國務ノ官廳ヲシテ之ヲ執行セシムルコト、例ヘバ御料地ノ管理ヲ地方長官ニ委托スル爲ニ明治二十三年勅令第八十八號ヲ發布シタルガ如シ。

(丙) 皇室ノ事務ニシテ國務ニ關係スル所更ニ輕微ナルモノハ、皇室ノ例規ヲ以テ規定シ、宮内ノ官僚ヲシテ執行セシムト雖、其ノ國務ト交渉シ、從テ國法上ノ責任ヲ生ズルモノハ之ヲ國務ノ官廳ニ移シテ執行セシメ、其ノ長官タル國務大臣ヲシテ其ノ責ニ任ゼシムルコト。但シ乙丙ノ事務ニ對スル經費ハ皇室ヨリ支辨スルノ方針ヲ取ルコト。

第九

内大臣ハ之ヲ宮内官ニ數フルモ、其ノ職務ハ公文式ニ依ル國家ノ公事タリ。又樞密院ハ憲法上ノ制置ニシテ、其ノ員ニ列スルモノハ素ヨリ國務官タリ。而シテ其ノ審議スベキ事項ノ一半ハ皇室ニ關スルモノナリ。仍テ皇室ノ事ハ天皇ノ私事ナリトスル理論ハ斷然排斥シ、皇室ヲ以テ國家ノ要素ナリトシテ別ニ責任ノ關係ヲ明カニシ、宮内官ニシテ國務ヲ取ルコトアリ、國務官ニシテ皇室ノ事務ヲ取ルコトアルベキ方法ヲ定ムル事。

第十

宮内大臣ハ皇室ノ官職ニシテ國家ニ關係ナシト云フトキハ、或ル場合ニ於テ國家ノ法律命令ヲ以テ其ノ事務ヲ規定シタル理由解シ難シ。例ヘバ華族世襲財産法ノ事務、敍位條例ノ事務ノ如シ。故ニ宮内大臣モ國家ノ大臣ニシテ唯々憲法上ノ責任ヲ負ハザル一點ノミ各省大臣ト異ルモノナリトスル關係ヲ明ニスル事。

第十一

宮内官吏ハ國家ノ官吏ニ非ズトスレバ、是レ國家ヨリ觀テ私人ナリト雖、實際ニ於テ宮内官吏ヲ一種ノ官吏ト視做スノ必要アルノミナラズ、現ニ彼等ハ國家ノ官吏ト同一ノ服務紀律ノ下ニ立チ、裁判上ニ於テモ官吏トシテ取扱ハレツ、アリ。仍テ宮内官吏モ亦國家ノ文武官タル主義ヲ取り、唯々責任上ノ關係ニ於テ内廷ノ臣ト外廷ノ臣トヲ區別スル事。

第十一

内廷外廷ノ臣僚共ニ國家ノ官吏タルベキニ於テハ素ヨリ其ノ地位及待遇ニ於テ彼此ノ間權衡ヲ均一ニシテ、宜ク秉公持平ノ道ヲ明カニスベク、獨リ宮内次官及宮内ノ一局長等ニ親任官待遇ヲ與フルガ如キハ偏重偏輕ノ形迹ヲ現ハシ、冗濫ノ弊延テ一般ノ國務官吏ノ制度ニ及ボスノ虞アレバ、宜ク之ヲ杜絶スルノ主義ヲ定ムベキ事。

第十二

國家ノ官吏ハ皇室ニ關係ナシト云フモ、現ニ日本ノ官吏ハ法律命令以外ニ於テ皇室ニ對シ一定ノ義務ヲ負ヘリ（參賀、賢所參拜等ノ如シ）仍テ皇室モ國家ノ要素ニシテ外廷ノ臣モ皇室ニ事フルノ義務アルヲ明ニスル事。

第一

皇室典範ハ憲法ト同ジク國家最高ノ法典タリ。然レドモ形式上國務大臣ノ副署ナク、且公布シタルモノニアラザルヲ以テ、其國法上ニ於ケル關係果シテ如何。又普通法令ノ皇室典範ト矛盾シタルトキハ其効力如何。

第二

歐洲君主國ニ於テハ皇室財産即世襲財産及君主ノ私産ニ就キ或ハ二種トナシ、或ハ三種ニ區別

セルモノアルガ如シ。其得失如何。

第 三

皇室典範ニ於テ規定シタル世傳御料以外ノ財産、即チ御私産ノ處分ハ普通民法ノ制裁ヲ受クベキモノナルヤ。將タ特別ニ之ガ規定ヲ設クベキヤ。

第 四

皇族財産ニ對シテ前項ノ場合如何。

第 五

皇室財産ハ世傳御料タルト御私産タルトヲ問ハズ、諸税及手数料ヲ納ムベキモノニアラザルヤ、又ハ御私産ノミニ限り之ヲ納ムベキモノナルヤ。又ハ其諸税及手数料ノ性質如何ニ依リ納否ヲ區別スベキモノナルヤ。又地方税市町村費ノ如キハ補助金等ノ名義ヲ以テ下付スルヲ至當トスルヤ。

皇室財産ヨリ諸税及手数料ヲ支拂フベキモノトセバ特別ニ法律ヲ以テ定ムベキヤ。

第 六

皇族ノ財産ニ對シテ前項ノ場合如何。

第 七

天皇ハ神聖ニシテ侵スベカラザルヲ以テ、民事上共ニ責任ナキモノトス。然レドモ民事ニ在リテハ君主ト雖モ個人ト同ジク權利義務ノ關係ヲ有スルモノト爲スハ歐洲君主國ニ於テ其例アリ。果シテ然ラバ世傳御料ト御私産トヲ問ハズ、臣民ヨリノ訴訟ヲ許スベキヤ。將タ之ヲ區別スル爲特別ノ規程ヲ設クベキヤ。又其裁判管轄訴訟代人訴訟手續等ハ如何。之ヲ定ムルヲ以テ穩當トスベキヤ。

第 八

宮殿離宮又ハ山陵ヲ建設營造セン爲、國有地ノ讓與又ハ使用ヲ政府ニ求メントス。然ルニ現行法令（會計法、會計規則、官有財産管理規則、官有地特別處分規則、官有地取扱規則、官有森林原野及產物特別處分規則）中帝室ニ係ル場合ヲ規定セズ。果シテ然ラバ現行法令ハ國有地ヲ

御料ニ供スルヲ禁ジタルモノナルヤ、將タ帝室國家ノ間ニ於ケル土地ノ授受ハ特別ノ處分ニ出ヅベキモノナルニ依リ之ヲ除外シタルモノト認ムベキヤ。

殖産ノ目的ヲ以テ國有ニ屬スル土地森林原野ヲ御料ニ讓與ヲ受ケントスル場合ニ於テハ如何。

備考 現行法令發布以後國有地ヲ御料ニ讓與シタル先例アリ。

第九

宮殿離宮山陵其他學藝慈善ノ用ニ供スル爲、帝室ニ於テ土地ヲ收用シ得ベキコトニ法律ノ改正ヲ求メント欲ス如何。

第十

國法學ノ上ヨリ觀察ヲ下ストキハ、宮内省ハ行政官廳ト同視スルコトヲ得ベキ場合アルヤ、又宮内官モ亦一般ノ官吏ト同視スルコトヲ得ベキ場合アルヤ。

調査著手方針 三

天皇及皇族ノ庶子ニ關スル件

皇室典範ハ一定ノ場合ニ於テ皇位繼承ノ庶子ニ及ブヲ規定シタリ。然ルニ民法ハ其ノ第八百二十七條ニ

「父ガ認知シタル私生子ハ之ヲ庶子トス」

ト規定セリ。即チ認知ノ手續ヲ經ザルモノハ未ダ庶子ニ非ズ。而シテ皇族其ノモノハ民法ノ外ニ立ツトスルモ、其ノ私生子ノ母タル者ハ皇族ニ非ザルガ故ニ必ズ民法ノ制裁ヲ受ケザルベカラズ。是ヲ以テ父タル皇族ガ民法上私生子認知ノ手續ヲ爲スマデハ、其ノ子ハ皇族ノ庶子タルコトヲ得ザル結果トナル。此ノ關係ハ皇庶子ニ在リテモ亦同一ナルガ故ニ、頗ル注意ヲ要スルモノアリ。

即チ皇庶子ノ母タル女官ハ必ズ某戶籍吏（即チ市町村長）ノ管轄内ニ在ル某華族ノ家族ニシテ其ノ本籍地若ハ寄留地ノ戶籍簿ニ其ノ名ヲ存スル者ナラザルヲ得ズ。從テ正當ノ結婚ニ因ルニ

非ズシテ子ヲ生ミタルトキハ先ヅ戶籍法第六十八條ニ依リ十日以内ニ出生ノ届出ヲ爲サルベカラズ。同條ニ曰ク

「子ノ出生アリタルトキハ十日内ニ左ノ諸件ヲ具シテ之ヲ届出ヅルコトヲ要ス。

一、子ノ名及男女ノ別

二、子ガ私生子ナルトキ又ハ出生前ニ認知セラレタル爲メ庶子ト爲リタル者ナルトキハ其旨

三、出生ノ年月日時及場所

四、父母ノ氏名、族稱、職業及本籍地但私生子ノ届出ニ付テハ母ノ氏名、族稱、職業及ビ本籍地ノミヲ記載スルコトヲ要ス

(以下略ス)

此ノ届出ヲ怠ルトキハ戶籍法第二百十條ニ依リ十圓以下ノ過料ニ處セラルベク、詐僞ノ届出ヲ爲シタルトキハ十一日以上四年以下ノ重禁錮又ハ二圓以上百圓以下ノ罰金ニ處セラルベシ。

右ノ届出ハ戶籍法第七十一條第二項ニ依リ、母ヨリ之ヲ爲シ、母之ヲ爲スコト能ハザルトキハ戶主又ハ同居人又ハ分娩ニ立會ヒタル醫師産婆等ノ中ヨリ出生地又ハ母ノ本籍地若クハ寄留地ノ戶籍吏ニ向テ之ヲ爲スベク、若シ出生前ニ父ノ認知ヲ經テ庶子トナリタルトキハ出生地又ハ

父ノ本籍地若クハ寄留地ノ戶籍吏ニ向テ其ノ届出ヲ爲サルベカラズ。

又私生子認知ノ手續ニ關シテハ民法第八百二十九條ニ

「私生子ノ認知ハ戶籍吏ニ届出ヅルニ依リテ之ヲ爲ス」

トアリテ其ノ届出ノ手續ハ戶籍法第八十條ニ規定シタリ即チ左ノ如シ。

「私生子認知ノ届書ニハ左ノ諸件ヲ記載スルコトヲ要ス」

一、子ノ名及男女ノ別

二、出生ノ年月日

三、死亡シクル子ヲ認知スル場合ハ死亡ノ年月日

四、父ガ認知ヲ爲ス場合ニ於テハ母ノ氏名職業及本籍地

前項第四號ノ場合ニ於テ母ガ家族ナルトキハ其戶主ノ氏名職業、本籍地及其戶主ト母トノ續柄ヲ記載スルコトヲ要ス

又出生前ノ認知ニ關シテハ戶籍法第八十一條ニ左ノ規定アリ。

「民法第八百三十一條第一項^{即チ出生前ノ認知}ノ規定ニ依リテ認知ヲ爲ス場合ニ於テハ認知者ハ母ノ氏名、職業及ビ本籍地ヲ具シテ其胎内ニ在ル子ヲ認知スル旨ヲ届出ヅルコトヲ要ス」

以上ヲ現行ノ法制ナリトシテ茲ニ宮中ノ例規ヲ一定スル爲メ講究ヲ要スル問題左ノ如シ。

- 第一、皇庶子ノ身分取扱ハ其ノ母ガ臣籍ニ在ルノ故ヲ以テ民法戶籍法ニ準據スベキカ。
- 第二、皇庶子ノ認知ハ出生前ニ於テスベキカ、將タ其ノ後ニ於テスベキカ又其ノ届出ハ何人ヨリ何所ニ向テ爲スベキカ。
- 第三、皇族ノ私生子ノ場合ニ於テハ以上ノ問題ヲ如何解決スベキカ。

五世以下ノ皇族男子ニ關スル件調査要點

原 案

- 一、本制ハ皇族ノ員數ヲ減ジテ皇室ノ經費ヲ節約スルヲ目的トシタリ。而シテ原案ニ於テ此ノ目的ヲ達スル爲左ノ方法ヲ取レリ。
 - 甲、五世以下皇族男子ノ華族ノ養子トナルヲ勅許スル事。
 - 乙、或ル場合ニ勅旨ヲ以テ五世以下ノ皇族男子ヲ華族ニ列シ世襲財産ヲ賜フ事。

修 正 案

- 一、以上甲ノ方法ハ正當ナリト雖、乙ハ皇室典範第三十一條ノ原則ニ對シ例外ヲ設クルモノニシテ、皇位繼承ノ既得權利ニ關係シ事體重大ナリ故ニ取ラズ。
- 一、然レドモ五世以下皇族ノ自ラ臣籍ニ降ラント請フ者ヲ勅許シ、之ヲ華族ニ列シテ姓ヲ賜フハ敢テ典範ニ基ク既得ノ權利ヲ動カスニ非ズ。故ニ其ノ道ヲ開キテ第二方法ニ替ヘタリ。
- 一、五世以下ノ皇族繁榮スルモ、爲ニ皇室ノ資財ヲ散逸セシメザラント欲セバ世襲財産ヲ以テ財産上ノミノ關係ニ於テ特別ノ一家ヲ爲サシムレバ足レリ。故ニ此ノ道ヲ存シテ第三ノ方法ト爲シタリ。
- 一、既ニ請願ニ依リ華族ニ列シ、又ハ華族ノ家ニ入ルノ途ヲ開クモ、現在ノ如ク皇族ノ優待令遇遙ニ華族ノ上ニ在ルトキハ此ノ途ニ由リ臣籍ニ降ラント欲スル者甚ダ多カラザルベシ。故ニ段階ヲ設ケテ五世以下皇族ノ待遇ヲ薄クシ、以テ寧ロ華族ト爲ルノ安易ナルニ就クコトヲ獎勵シ、傍ラ皇室ノ經費ヲ節減スル第四ノ方法トシタリ。
- 一、皇族繁榮ノ一原因ハ庶子ニ在リ、所謂庶子ハ元ト私生子ニシテ、父ノ認知ニ依リ始メテ庶子ノ身位ヲ得ルモノナリ。故ニ此ノ認知ニ勅許ヲ請ハシメ、成ル可ク之ヲ制限スルノ方法ヲ取ルヲ以テ第五ノ方法トシタリ。

皇室婚嫁令第二條中特ニ定メタル華族トハ其標準左ノ如シ。

一、皇族

九條、近衛、一條、二條、鷹司、德川

三、同上 三條、岩倉、毛利、嶋津二家

四、侯爵 凡テ三十五家

壹號ヨリ四號ニ至リ順次ヲ追フテ其人ヲ求ム、若シ后位ニ陞ルベキ淑徳ヲ備フル女子ナキトキハ伯子男ト爵ノ順序ヲ追ヒ仍ホ之ヲ求ム。

總提

渡邊千秋

王家ニ於テ君主廷臣力ヲ一ニシ、經費ヲ節約シ、資財ヲ豊富ナラシメ、資ヲ以テ或ル場合ニ於テハ國庫ニ下賜シ、其他王家臨時必要ノ歳出ニ填補シ、又ハ内外臣民ニ對シ恩賞慈惠ノ料ニ充ルノ準備ヲ爲スハ蓋各國帝室一般ノ通義タルヲ信ズ。

我ガ皇室財産ノ如キ

陛下至仁ノ聖謨ト元勳忠誠ノ翼賛ニ依リ既ニ寶祚ニ屬スルモノハ世傳御料トシ之ヲ定メ、天下ニ公示セラレ、其他ハ所謂皇家私有財産ト云フガ如キモノニテ之ヲ存有セリ。其種別ハ土地森林牧場有價證券ノ四種トス。而テ

陛下勤儉ノ叡慮ト宮内大臣恪奉ノ厚キニ依リ、歳々御資部財産ノ増進ニ趣クハ實ニ皇室ノ慶ニシテ國家ノ幸ナリトス。

然レドモ御資部御料部財産管理ノ方法ニ至テハ今ニシテ未兩綱繆ノ策無カラズンバアル可ラズ

目下ノ現状ヲ見ルニ、從來言フニ忍ビザル情弊ヨリ因襲シ來リ、一定ノ制規未ダ全カラズ、頗ル錯雜多岐ニ涉リ、殆ド收拾スル所ナク、換言スレバ非常ノ破綻ノ露出セザルハ會計整理ノ常率ヨリ推ストキハ寧ロ却テ怪ムベキ變態ト視做スベキノ感アリ。逐年經濟複雜ニ至ルモ猶今後在苒姑息ニ處スレバ必ズ危運ニ瀕スルノ不幸ヲ見ルノミナラズ、國民ガ帝室經濟ニ容喙スルノ嚆矢媒介ト爲ルニ至ラン。既ニ某國議會ニ於テ帝室經費ノ精算報告ヲ請求セシ例證ナキニ非ズト爲サズヤ。

爰ニ一二ヲ例セバ、此四種ノ財産ハ同ジク皇家ノ物タリ。然レドモ其有價證券ニシテ御資部ニ屬スルモノアリ、故ニ御資部非認スルモノ御料部是認スルモノナキヲ保セズ。又土地ニシテ御料部管掌スルモノアリ、常用部監督スルモノアリ、故ニ御料部不可トスルモノ常用部可トスルモノ無キニ非ズ。一面ノ不利ハ一面ノ利トシ、一方ノ賣却ハ一方ノ買收ト變ズベキノ奇觀ヲ呈シ、其弊ヤ帝室經濟ノ城府ハ各自割據ノ勢ヲ生ジ、遂ニ今日ヲ以テハ其生産的不生産的ニ拘ラズ、相互資金ノ流通ヲ爲ストキハ利子ヲ徵收スルノ慣法ニテ恰モ利害逸憂ヲ異ニスル他邦ノ如シ。宜シク經濟統一ノ制規ヲ立ツベキナリ。

宮内行政組織ニ於ル今帝室各部ノ提供スル常用部又ハ御資部御料部豫算ノ數ハ實ニ三十有餘ニ分立シ、其支部ヲ挿加スレバ驚クベキモノアリ。限リアル國庫支出ノ常額ヲ以テ此ノ多數ノ部局ヲ存シ、事端多岐ニ涉ルトキハ年々歲々不知不識膨脹ニ傾クノミ。如何ニ經費ヲ節シ冗員ヲ淘汰セントスルモ決シテ行ハルベキニ非ズ。他ノ歐洲帝室ニシテ數倍ノ財力ヲ保有スルモ、斯ノ如クナル過大繁多ナル例ヲ聞カズ。部局已ニ多シ矣。人員經費之ニ伴フハ自然ノ結果ナリ。宜シク部局ヲ合併又ハ廢止シ、人員ヲ減省或ハ兼攝シ、簡捷事ニ從ヒ、常用部ニ於ケル通常經費及ビ臨時經費ハ之ヲ合セテ國庫ニ支出セシムル常額金三百萬圓ヲ以テ極度ト誓フベキナリ。既ニ客歲ノ如キ大喪ニ丁リ、臨時國庫ヨリ支出セシムル金七十萬圓ハ特別ノ事項トシ、之ガ收支ヲ控除シテ試ニ歲出金額ヲ算スレバ金三百三十萬圓以上ニ騰レリ。去年然リ、今年モ然ラザルヲ得ザルハ自然ノ趨勢ナリトス。抑皇室モ亦一家ナリ、要之尊卑上下ヲ問ハズ日常生活ノ度合ノ進ムニ對シ、之ヲ抑制セントスルニハ主者猛省シテ一家革新ノ大決斷ヲ下スニ非レバ其目的ヲ達スル能ハザルハ數ノ見易キモノトス。何爲ゾ家人奴婢ノ物議苦情ヲ顧慮スルニ違アラン。是レ一家ノ盛衰安危ト輕重同ジカラザレバナリ。銳意志ヲ決シ此際宜シク宮内行政革新ノ實ヲ舉ゲ、更ニ帝室施設ノ基礎ヲ樹立セラレントヲ茲ニ意見ヲ六項ニ條列シ付テ萬一ノ採擇ヲ仰グ。

明治三十一年四月

內藏頭 渡 邊 千 秋

皇室會議ノ事

要領

宮中顧問官特選、皇室經濟顧問皇室經濟會議員等各種ノ議事機關ヲ全廢シ、更ニ皇室顧問官ヲ特置シ、議權ヲ擴張シ、顧問官ハ政黨政派ノ外ニ卓立シ、皇室百般施設ノ根基ヲ鞏固ニ爲スベキノ議。

皇室ニ宮中顧問官アリ、特選皇室經濟顧問アリ、帝室經濟會議員アリ議事機關蓋三種ニ分ル。而テ宮中顧問ハ其撰擇ノ輕重待遇ノ上下ニ於テ變遷アリト雖モ、其宮中ノ儀典ニ關シ諮詢奉對ノ責アリシモ之ヲ刪除セラレ、今ヤ官一等等ノ名アルモ宮中奉ズルニ職ナク、坐スルニ席ナキモノノ如シ。寔ニ空曠ノ冗官ニシテ他ノ麝錦兩祇候タル名譽ト何ゾ撰バン。又皇室經濟顧問ハ勳臣若干名ニ命ゼラル、モ、其規程ニ照ストキハ範圍頗狹小、要スルニ平時會計經濟收支ニ關シ案書ヲ回覽スルガ如キニ止マルノ觀ナシトモズ。帝室經濟會議員ハ宮廷ノ臣僚ニシテ宮内大臣以下會計ニ關スル職務ニ伴ヒテ命ゼラレ、皇室經濟顧問ト相同ジクシテ一事件ニ關シ一面ハ發案者ト爲リ、又ハ執行者トナリ、一面ハ議事者トナルモノニテ、所謂自畫自贊ニ屬シ、其功用ヲ見ザルモノアリ。如此錯雜ナル機關ハ却テ其功果ヲ收メズ、徒ニ各部ノ事務ヲ阻滯セシ

ムルニ過ギザルヲ以テ、斷然全廢セラレ、更ニ皇室顧問官名譽官ヲ置カレ、其人員ハ十五名ヲ上限トシ、勳臣ヲ以テ機軸トシ、加フルニ廷臣練達ノ人若干名及學識卓拔ノ士若干名ヲ簡拔セラレ、皇室ニ於テ凡重要百般ニ係ル事項又ハ常規ナキノ案件及隨時勅詢ニ奉對シ、又ハ宮内大臣ノ提議顧問官ノ發議其他經濟會計ノ方針目途等ヲ審按議決シ、苟モ閣外ニ擾々タル政黨政派ノ渦線ニ關セズ、卓爾特立シ、内閣ノ交迭宮内大臣ノ進退等ニ依リ帝室施設ノ根基方針ニシテ動搖變換セザルヲ要ス。今帝室ニ公法私法成學ノ士無キヲ以テ、事ニ臨ミ或ハ辯護士ヲ顧問トシ又ハ教官ヲ聘問スルノ已ムヲ得ザルニ至ル。然レドモ事ニ機密アリ重要アリ、叨ニ局外ニ漏泄シ能ハザルモノ無シトセズ。宜ク帝室ニ整然タル議事機關ヲ設立シ、宮内行政ノ完美ヲ期スベキナリ。

皇親ニ關スル事

要領

宮中ニ正親院ヲ置キ全皇族ヲ輔導シ家務ヲ總提シ爵位局ヲ廢シ華族ヲ併セテ本院ニ於テ監督スルノ議。

皇親ニ關スルコトハ皇室典範ニ載セテ炳焉タリ。若シ或ル條章ニ於テ更改ヲ要セララル、トキハ

至尊ノ宸斷ニ出ヅルモノアラン。今ヤ皇族振々トシテ昌盛ニ趣キ、誠ニ皇家ノ慶事ニシテ國民ノ欽喜スル固ヨリ其所ナリトス。而テ今謹デ大寶令ヲ讀ムニ、宮内省ニ正親司アリ、皇親二世以下四世以上ノ名簿ヲ掌リ、其他戶令ニ依リ皇親不課ノ事ニ及ブモノアリ、之ヲ外邦ニ徵スルニ歐洲帝室ニ於テモ皇族局ト云フガ如キモノ無キニ非ラズ。又唐制ニ依ルトキハ宗正寺ナルモノアリ、以テ宗親全般ノ事ヲ統督スルニ似タリ。今猶宗人府等アリ要之皇族ヲ監督スルノ權ハ天皇ニ存スト雖モ、常時ニ於テモ道德ヲ輔導シ吐納ヲ匡正スルノ任無ル可ラズ。是古今東西其權域ノ大小職務ノ輕重アリト雖モ部局ヲ存立シ事ニ從フハ符節ヲ合スルガ如シ。今宮内省ノ制ヲ見ルニ皇族家職トシテ各家ニ別當家令アリ、其他御養育主任ナルモノアリ。各内親王殿下ニ關スルコトヲ各別ニ掌ルモノノ如シ。然レドモ其職責具ラズ、故ニ各主任隨意事ニ從ヒ或ハ敬重ヲ旨トシ、或ハ簡易ヲ主トシ、恐ラクハ主任其人ノ私見ヲ以テ待遇ノ輕重ヲ爲スノ感ナシトセズ。各皇族家別當家令ノ如キモ皇族ノ威嚴ヲ保持スル爲メ費額ヲ放ツモノアリ、或ハ皇族家永遠ノ維持ヲ慮リ貯蓄ヲ專トスルモノアリ、且帝室ヨリ費途ヲ仰グヲ能トスルモノアリ。却テ之ニ反スルノ意思ヲ抱持スルモノアリ。隨テ同ジク皇族ニシテ其體面著シク徑庭ヲ生ズルニ至ル、若シ夫レ假令バ各内親王殿下ノ各地行啓ニ於ケル、甲ハ函根ヲ可トシ日光ヲ不可トシ、乙ハ日光ヲ可トシ函根ヲ不可トシ、又鎌倉ヲ善トスルモノアリ、葉山ヲ善トスルモノアリ、號テ

官邸建築ノ議ヲ提出スルニ至ル。固ヨリ匡言ニ徵スルモノアルベシト雖モ、是等ハ豫メ避寒避暑ニ適應ノ地ヲ一定セザルヲ得ザルハ論ヲ俟タズ。果シテ然レバ各地ニ散在スル狭小ノ宮邸ハ之ヲ廢シ、更ニ避暑避寒各恰當ノ地ヲ撰ビ、各内親王殿下行啓ノ宮邸ヲ合一シテ建築スルニ至ラバ其倫情ヲ全クシ賜フノミナラズ、帝室經濟ニ非常ノ節制ヲ來スベシ。猶進ンデ遂ニ東京常御ノ宮殿モ亦同一ナルニ達センコトヲ期ス。

然レドモ是等數年來因襲ノ慣行ヲ改更スルニ今日ノ現制ヲ以テ行ハル可ラズ。宜シク大寶ノ古制ニ基キ各國ノ制度ヲ斟酌シ、更ニ正親院ヲ宮中ニ置カレ、總裁一人ハ勳臣ノ中ヨリ任ゼラレ、全般ヲ統轄シ、常ニ皇親ヲ輔導匡正スルノ責ニ任ジ、從來ノ別當家令等ヲ廢シ、更ニ正親院官吏ヲ派シ、以テ家務ヲ同一掌理セシメ、併セテ爵位局ノ如キモ之ヲ廢シ、本院ニ於テ衆華族ヲ監督スルノ責ヲ有スルモノトスベシ。是レ天潢ニ亞グ名族門流ナルヲ以テ、本院ノ重キヲ以テ管スルトキハ貴族社會今日萎靡不振ノ頽勢ヲ挽回スル必ヤ見ルベキモノアラン。若シ然ラズシテ尙今日ノ現狀ヲ以テシ統紀スル所ナクンバ、恐クハ皇族ノ尊稱ヲ利用シ言フニ忍ビザル弊端ヲ啓キ、爲メニ皇室會計經濟ノ豫定計畫ヲ定ムル能ハザルノミナラズ、之ヲ定ムルモ亦直チニ之ヨリ瓦崩スルニ至ランノミ。

皇室會計經濟ノ事

要 領

會計經濟ノ分裂ヲ禦ギ更ニ内藏寮ニ御資部御料部常用部ノ三部ヲ置キ之ヲ總提統一シ將來經濟ノ基礎ヲ確定シ御料局ハ純然タル一ノ作業局ノ性質トシ及ビ各年ノ歲出額ハ金三百萬圓ヲ極度ト誓フベキノ議

帝室會計經濟ハ瓜分シテ歸一スル所ナシ。宜シク内藏寮ニ御資部御料部常用部ノ三部ヲ置キ、之ヲ總提統一シテ始メテ整頓完全ヲ期スベキナリ。而テ御料局ハ純然タル一ノ作業局ノ性質ト爲スベシ。抑モ帝室ニ於テ帝領省或ハ御料局ヲ置クハ各國皆然ラザルナクシテ、其目的タル固定資本及運轉資金ヲ定メ、作業ヲ經營シ、每歲ノ利益ヲ内帑ニ收藏スルハ一般ノ通規タリ。然ルニ何ゾ圖ン總提ニ縷述セシ如ク、我が皇室ニ於テハ從來已ムヲ得ザル(行掛リ)ノ弊習トシテ全ク御資部御料部ノ關係其反對ノ結果ヲ來シ、御資部ハ軍事公債買入或ハ株式拂込ニ對シ他ヨリ負債ヲ起スモ、御料部ハ御資部ニ存有スル鑛山賣却金其他ノ有價證券ヲ御料部基金ト唱へ、之ヲ管理シ其利子配當ハ御資部ニ納入セズシテ同部ノ歲入ニ加フルモノナレバ、却テ綽々餘裕アルモノノ如ク、之ヲ換言スレバ御資部ハ年々御料部ヨリ收利ヲ藏ムベキモノナルニ、却テ御

料部ニ御資ヲ割讓スルノ事實ヲ生ゼリ。其甚シキハ不生産的ナル土地ト雖モ御料部之ヲ管シ、其買收スル毎ニ年々數十萬圓ヲ御資部ヨリ御料部ニ移入シ、徒ニ繁擾極リナク、殆ド兒戲的ニ類スルモノト他人之ヲ評スルモ分岐シ能ハザルナリ。其弊ヤ遂ニ帝室毎年ノ豫算ハ分岐シテ御資常用兩部ノ豫算ハ内藏頭之ヲ調査提供シ、御料部ノ豫算ハ御料局長之ヲ調査提供シ伸縮精粗其門ヲ異ニシ、一帝室ノ會計ニシテ決算二途ニ定ル。是レ御料局長其人ノ罪ニアラズシテ法規ノ然ラシムルモノニシテ實ニ慨嘆ニ堪ヘズ。其未ダ破綻セザルニ先チ、之ヲ當然ノ秩序ニ改正シ、而シテ將來帝室財産中ニ於テ有價證券種類ノ區域御料事業ニ於テハ土地ノ制限及ビ作業ノ程度等ヲ確定シ、其各年ノ歲出ハ常額三百萬圓ヲ極度ト爲シ經濟計畫ノ鞏固ヲ保ツハ最モ至要ノ事ナリトス。

御資部ニ於ケル負債金額五百八十萬圓ハ今回會計經濟ヲ釐革統一シ、諸經費ヲ年額金三百萬圓ニ定メラル、トキハ今後御料作業ノ運轉資金ヲ控除シ自餘ノ金額ヨリ收容スル利子配當金ヲ以テ明治三十一年度下半年期ヨリ明治三十六年度下半年期迄六ケ年間ニ全部償還スルモノトシ別ニ計畫ヲ存セリ。

皇有土地物件ノ事

要 領

皇家私有財産ト視做スベキ動産不動産ニ課税ノ如何及ビ將來帝室所用ニ際シ
官有地受授ノ手續其他皇族所有地制限等ヲ豫メ審定スベキノ議

皇家寶祚ニ屬スル土地ハ卅傳御料トシ、既ニ之ヲ勅定公告セラレタリシモ、其私法上ノ財産ト
視做スベキ動産不動産少シトナサズ。是等ニ對シテハ普通法律範圍内ニ於テ處理セラルベキカ
將タ特別ノ法規ヲ立テラルベキカ、未ダ一定ノ制規ナシ。故ニ世運ノ發遷ニ從ヒ必ヤ他日帝室
ニ關スル多少議論ノ種子タルヲ免レザラン。蓋シ立憲制ノ理義ニ於テ帝室私有財産トシテハ其
權義或ハ人民ト差違無ルベキカ。果シテ然レバ其動産不動産タル土地物件ニ對シ國稅ハ勿論府
縣稅市町村稅ノ負擔、若クハ東京其他ニ於ル離宮御用邸等ノ土地家屋ニシテ、其世傳御料ニ係
ルモノハ假令租稅ノ賦課地方費ノ負擔ナキモノトスルモ、或ハ慈仁ノ聖旨ヲ以テ若干ノ補助金
ヲ下賜セラル、モノアルベキカ。渾テ皇有財産ニ關スル各種賦課ノ有無多少ノ程度如何ニ依リ
將來會計經濟ノ計畫ニ一大變動ヲ來シ、御料事業ノ伸縮有價證券所有ノ多寡等ニ關係少カラズ
隨テ損益利害異日大ニ反對ノ結果ヲ見ルモ亦知ルベカラズ。且今後帝室所用ニ係ル離宮其他生

産的經營ニアラズシテ官有地ヲ要スル場合、之ガ處理ハ確定セザル可カラズ。目下播州明石城
址ニ關スル事件ノ如キ是ナリ。其他皇族賜邸地ノ外ニ於テハ其所有ニ制限ナキヲ以テ、生産的
事業地及ビ別邸等多クハ別當家令ノ名義ヲ以テ其所有ヲ塗抹シアルガ如キハ名實相反スルノミ
ナラズ、將來皇族家政ノ如何ニ關係シ、直チニ帝室財計ニ影響スルモノナレバ是等規程モ亦忽
諸ニ付ス可ラズ。要之皆以テ豫メ審議セラルベキ緊要ノ事項ナリトス。今日事皇家ノ利害ニ屬
スルヲ以テ互ニ相避ケ默々ノ間ニ放擲シ、他日紛爭物論ノ生ズルニ際シ倉皇テ手スルガ如キハ
策ノ得タルモノニ非ザルベキヲ信ズ。

宮内行政組織ノ事

要 領

宮内行政組織ノ繁大ヲ收縮スル爲メ部局ヲ廢合シ人員ヲ淘汰シ職俸ヲ改正シ
簡捷敏活其責任ヲ明晰ニ爲スベキノ議。

宮内行政組織ハ其始メ太ダ繁大ナラザリシモ、累年加重シテ今ヤ三十有餘ノ部局ニ分立シ、各
其好ム所ニ基キ歲計豫算ヲ提出スルニ至リ、人員相伴テ増加シ、其俸給ヲ算スレバ年額金五十
五萬圓以上ニ騰リ、之ニ追隨スル廳費旅費賄費等モ亦數萬圓ヲ要セリ。然シテ其高等官ノ俸給

表ヲ繙ケバ俸給ノ階級五十四級ニ分レ、官一階ニシテ俸給八級ニ分斷シ、其繁擾實ニ驚クニ堪ヘタリ。竊ニ其基ク所ヲ聞ケバ往時當該ノ吏人官階ヲ弄ビ威福ヲ張ルノ意匠ニ外ナラズト云フ。果シテ然ルヤ否、斯ノ如キ弊習ハ斷然肅清セラレ、先ヅ宣シク部局ヲ廢止又ハ合併シ、人員ヲ減省或ハ兼攝ト爲シ、併セテ職俸制ヲ改正シ、其行政機關ヲ簡捷ニシ責任ヲ明晰ナラシメバ新政爰ニ舉リ官守肅清冗費削減ニ歸スルハ信ジテ疑ハザル所ノモノタリ。前年製艦費二十四萬圓ヲ支出スルニ際シ、各科目ニ於テ該金額ヲ減省シテ之ヲ填補セリ。今日ニシテハ物價騰貴シ此成績ヲ推ス能ハザルモノアルヲ以テ、行政組織ヲ簡易ナラシメ、以テ經濟ヲ整理スルニ如カザルナリ。而テ各官職俸ノ正額及部局廢止合併ノ制限人員淘汰兼攝ノ配置其他東京帝國博物館京都奈良博物館ノ處分等、苟モ此際革新スベキモノハ別ニ調査スル所ノモノ存セリ。要之總提末項ニ述ルガ如キ情弊ヲ拂拭シ、全省ヲ刷新スルニ至ラバ其慶當ニ皇室ニ止ラズシテ永ク國民ノ欽仰スル所ノモノタルベキヲ信ズルナリ。

華族ニ關スル事

要 領

帝室藩屏ト稱スル華族ノ衰頹甚シキヲ以テ夙ク之ヲ矯正セザレバ帝室ニ一種

ノ頽累ヲ醸生スベキニ依リ新陳交謝ノ道ヲ以テ其腐敗ヲ防止シ隨テ帝室經濟ノ許可ス可ラザルヲ以テ將來ノ昇爵授爵ニ對シ家門繼續ノ下賜金ヲ全然廢スベキノ議

立憲君主國ニ於テ君民ノ間ニ至大ノ關係ヲ有スル貴族制度タル、曩ニ五爵ノ制ヲ定メラレ、漸ク發達ノ緒ニ就クガ如シト雖モ、其真相ヲ觀察スレバ能ク國民ノ上ニ立チ品位資望兼ネ全ク華族ノ體面ヲ保ツモノ六百餘人ヨリ比算スレバ僅ニ百戸未滿ナリトス（千秋客歲全華族ノ所得高ヲ府縣知事ニ委囑シ凡是ヲ得タリ）概ネ舊諸侯ハ封建時代ノ老臣忠隸日ニ凋落シ、家道危運ニ傾クモノ少シト爲サズ。舊堂上華族ニ至テハ資産極テ薄弱、其侯伯爵ニシテ之ヲ官吏ニ比スレバ判任三四等タル屬官ノ所得タルニ過ギズ。其他多クハ家道漸ク糊口スルニ止ルノミ。如何ゾ子弟ヲ教育シ國民ノ上位ニ立ツノ基礎ヲ養成スルヲ得ベケンヤ。

如此ノ境遇ナルヲ以テ、華族ノ大部分ハ假令表面禮遇停止ヲ蒙ラズ、身代限ノ處分ヲ受ケザルモ、實際ハ遠ク士民下等ノ地位ニ存立スルモノ亦多シト爲ス。其甚シキハ帝室内藏寮ニ於テハ皇家ノ藩屏トモ稱スベキ華族ノ爲メニ財產差押ノ令狀ヲ受クルガ如キ悲ムベキノ奇觀ニ接スルコトアリ。之ヲ國民ヨリ見ルトキハ帝室ハ宮牆内ニ一種怪ムベキ種族ヲ養成スルガ如キノ感想ヲ起サシムベク、誠ニ忌ムベキノ事ノミ。是レ世襲財產法及華士族平民名稱ノ廢止論條ノ媒介

タラズンバアラズ。要之此類勢ヲ挽回シ健剛ノ氣象ヲ養ヒ、貴族ノ體面ヲ保持セシメントスルニハ、先其腐敗ヲ除去スルニ如カズ。果シテ然レバ今後華族ニシテ失行汚辱アルモノハ涙ヲ揮ヒ假借セズ除族又ハ辭爵セシムルト同時ニ、功勳アルモノニシテ資産ヲ有シ體面ヲ傷ケザルモノニ限り、昇爵又ハ授爵ノ典ヲ舉行セラレ、更ニ新鮮ノ空氣ヲ注入シ、腐敗ノ萌芽ヲ防止スルニ加カズ。夫レ物久シケレバ潰ユ、新陳交謝ハ不得已自然ノ數ナリトス。然レドモ今後其新ニ昇爵又ハ授爵ニ對シ、全然家門保續ノ賜金ヲ停止セラル、固ヨリ其所ナリ。如何トナレバ國家無限ノ功勳者ニ帝室限リアルノ財産ヲ分賜シ能ハザルハ理ノ當然ナレバナリ。

上 申 案

各府縣士民

天機伺並方物献上之義ニ付伺

各府縣士民

天機伺之義ハ是迄例規モ無之候處即今

天機伺之義願出候向モ有之且献上物之儀ハ去ル辛未八月被差止候得共其後追々書籍又ハ製作物等献上出願者有之候ニ付於當省獻品取扱内規ヲ設ケ昨十六年八月卅一日附ヲ以及上申候末同九月廿二日御聞届之旨御指令相成候處尙又地方物産米穀等献上願出候向有之右兩條共畢竟敬上報本之丹心ヨリ出タル者ニテ即今人心渝薄之折柄奇特殊勝之義ニ候得バ一途ニ阻絶候モ人民之篤志ニ對シ如何ト被存候間於當省別紙之通り内規ヲ設ケ今後共出願者有之節ハ篤ト事情取調之上右内規ニ據リ特別許可致度條至急何分ノ御指揮相伺候也

宮 内 卿

太 政 大 臣

各 府 縣 士 民

天 機 伺 及 ビ 方 物 獻 上 内 規

各 府 縣 士 民

天機伺及ビ地方物産米穀等獻上願出ル者往々有之、右ハ畢竟國恩報酬之篤志ニ出デ奇特之至ニ付、自今士民總代若クハ其本人ヨリ願出ルニ於テハ管内士民協議相整ヤ否其管轄長官ニ於テ篤ト取調之上宮内卿へ具申致サセ、本省ニ於テハ左ノ條規ニヨリ許否ノ指令ニ及ブコトトス。

一、各府縣士族出京

天機伺ヒ一管内士族總代壹兩名一ケ年一回ヲ限ル

一、各府縣人民

天機伺ヒ前同様人民總代壹兩名一ケ年一回ヲ限ル。

一、一府縣士民申合之上士民ノ總代一兩名差出スモ妨ナシ。

一、一管内ノ士民總代其長官ニ就テ

天機ヲ伺度旨願出ル者有之節ハ長官之ヲ受ケ宮内卿へ申牒スベシ。

一、地方土宜ノ物産一時若クハ毎年獻納願出ルトキハ之ヲ許可ス。

一、獻納ノ品種若クハ其員數ニヨリ其全數ノ幾部分ヲ獻納致サシムルコトアルベシ。

一、獻品ハ總テ其本人ニ於テ宮内省ニ回送スルコトトス。

一、天機伺トシテ參内スルモノハ羽織袴又ハフロツクコートヲ着用スベシ。

一、獻品ニ對スル御報酬ハ下賜セザルベシ。